辰口町・高座遺跡発掘調査報告

県営圃場整備事業(寺井地区)関係埋蔵文化財
調査報告書

1978・3
石川県教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和52年度に石川県教育委員会が実施した県営圃場整備事業に係る、能美郡辰口町高座遺跡の発掘調査報告であり、調査費用については国庫補助を受けて実施したものである。
2. 発掘作業は昭和52年９月21日に開始し、同年11月15日に終了した。
3. 調査は、県教委文化財保護課主事　中島俊一・浅田耕治が担当し、調査区及び遺構測量に東四柳史明(同課主事)・三浦純夫（同課職員）の援助を受けた。
4. 本書の編集・整理は中島と浅田があたり、遺物の実測に長谷川芳樹氏(金沢大学生)・トレースに高橋均実嬢の協力を受けた。又、本文作成に当っては中島・浅田両名で検討し、中島がとりまとめを行った。
5. 指導ならびに助言を頂いた方々は、高堀勝喜氏(石川考古学研究会会長)・清水保昌氏（辰口町文化財専門委員)・吉岡康暢氏(石川考古学研究会幹事）をはじめ、多くの方々より頂いていると伴に、地元（高座・徳久・荒屋・秋常部落）各位より多大な協力を受けた。記して感謝を致します。

Ⅰ　遺跡の位置と環境

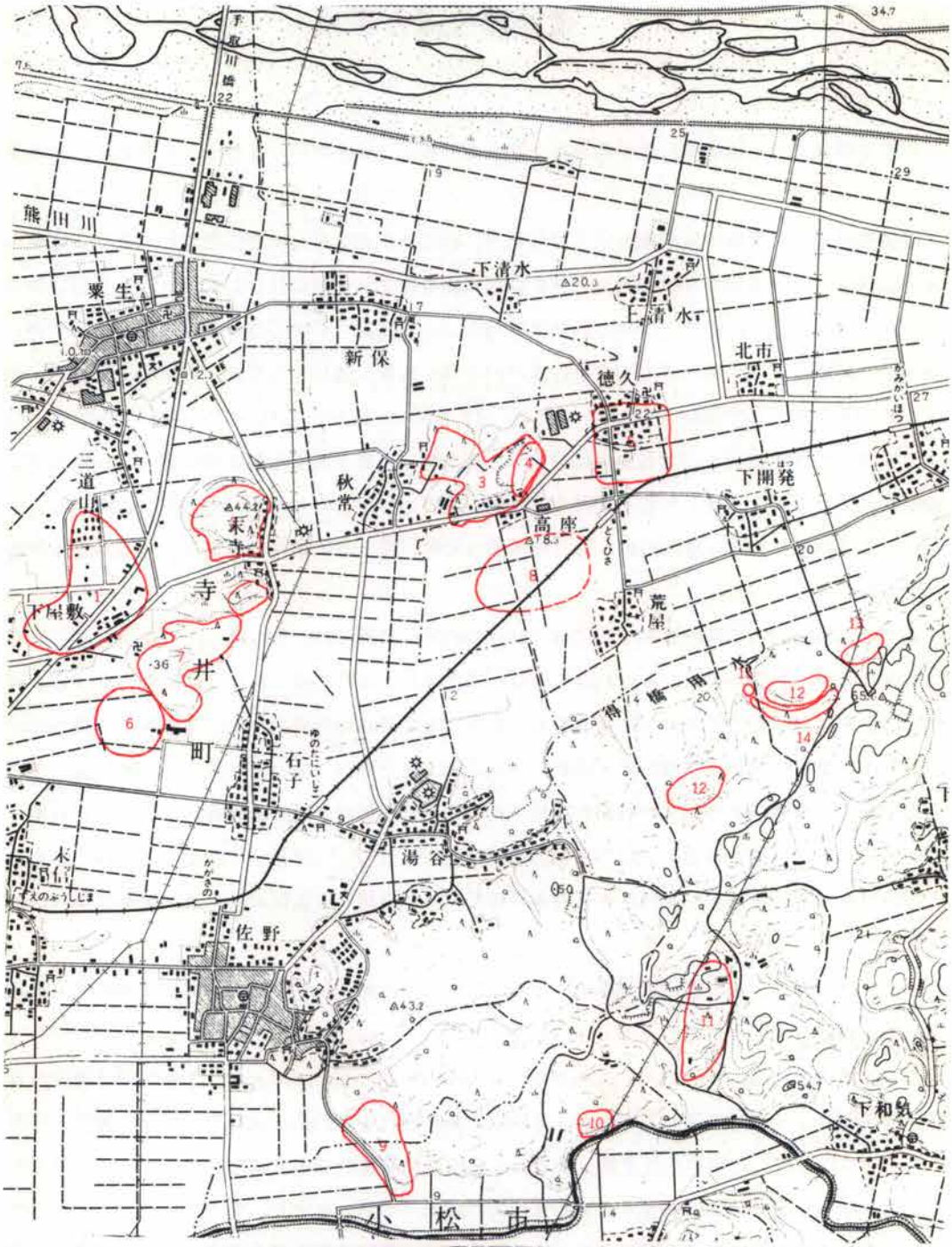
高座遺跡は、石川県能美郡辰口町高座・徳久及び秋常（寺井町）にまたがる現水田下に所在する。

遺跡地周辺は、手取川扇状地の南部にあたり、白山（2,702 m）の前山地帯を形成する能美山地の前縁をふちどる標高100～200mの、扇頂部の鶴来町より西側に延びる能美丘陵と、早壮年期の隆起丘陵が沈降[1]の際にとり残された現沖積面との比高20～30mの残丘（独立小丘）が点在し、能美郡辰口町に所属する丘陵と寺井町にまたがる独立丘陵（残丘）上には3世紀末～7世紀にわたる約70基を起える古墳群（①～③・⑦・⑨・⑫・⑮）が存在し、これらの古墳群を総称した"能美古墳群"[2]所在地として著名な地域であり、能美地方の盟主的支配集団の墳墓として継起的に造営されている点、古墳の形態と変遷を系統的にみることができる県下でも屈指の場所であると伴に、古代該期における政治組織・権力機構等の究明に関する手掛りを与えてくれる貴重な地域に数えられる。

さて、これらの古墳群が存在するにはそれらの古墳に被葬され、あるいはその築造に参与した同時代の人々の生活の舞台がなければならないことはいうまでもないが、この問題をも含め、昭和51・52年に精力的に能美地域の踏査を行った金沢大学考古学研究会によって能美古墳群和田山支群足下に拡がる和田山下遺跡[3]（仮称）⑥が最初に発見され、次いで昨年の夏に国指定史跡和田山支群⑦の整備の為の調査が行われた折に古墳下より住居跡・高床式倉庫跡（古墳時代前期・各1）の存在が確認されると伴に、今回の調査で明らかとなった沖積地でかなりの拡がりをもっと想定される高座遺跡⑧も追加され、従来不明であった該期の生活領域の一部が除々に明らかとなりつつある。

一方、前後して、谷口部の鶴来町より手取川に面して西側に延び能美丘陵縁辺においても原始・古代の遺跡が数多く分布している。

まず、本遺跡の東約8kmには、もっかのところ県内で調査された唯一の先土器時代遺跡である灯台笹遺跡[4]が所在し、同じく東方約4.5kmには縄文時代中期の莇生遺跡[5]及び莇生城跡（中世か）と、やや近接して岩内火釜遺跡（縄文）・岩内茶仙堂遺跡（中世墓地）がある。又、東方約2.5～3kmの来丸地区には少なくとも10基以上の古墳（円墳）があり、やや奥まって、昭和49年度の発掘調査で3基の窯跡が検出され、奈良時代中頃に想定された来丸サクラマチ古窯跡[6]が所在する。又、同じく東方約1.5kmには土取工事によって消滅した上開発古墳（1基？）及び隣接した西側の丘陵には18基を降らない上開発茶臼山古墳群[7]⑫・⑮及び打製石斧が採集されている茶臼山A・B遺跡⑯・⑬、茶臼山製鉄跡（時代不詳）などがある。又、鍋谷川の開折作用によっ



第1図　周辺の遺跡　　1：25,000　（粟　生）

1.　寺井山1～6号墳　　2.　末寺山1～15号墳　　3.　西山1～14号墳・西山1号墳穴
4.　西山常徳寺跡　　5.　徳久山上郷館跡　　6.　和田山下遺跡（仮称）
7.　和田山1～21号墳　　8.　高座遺跡　　9.　河田向山1～5号墳
10　向山遺跡　　11　和気1～3号窯　　12　茶臼山1～18号墳
13　茶臼山B遺跡　　14　茶臼山1～8号製鉄跡　　15　茶臼山A遺跡

って分断される能美丘陵の西南端――鍋谷川に面して奈良末～平安初頭頃の須恵器窯である和気古窯跡[8]（１～３号）⑪・土師器の包含地である向山遺跡⑩・さらに河合向山古墳（１～５号）⑨などが確認されている。

なお、時代不詳ではあるが中世の遺跡かとも考えられる常徳寺跡④・徳久山上郷舘跡⑤が本遺跡の北方に接して分布している。ちなみに鎌倉末期の『南禅寺文書』[9]によれば、所領としての“得橋郷”の範囲を示す資料として「東は秋恒に限る」とあることを考え合せれば、少なくとも現在の寺井町秋常周辺をも包括するなかで、中世村落の息吹きが感じられる。

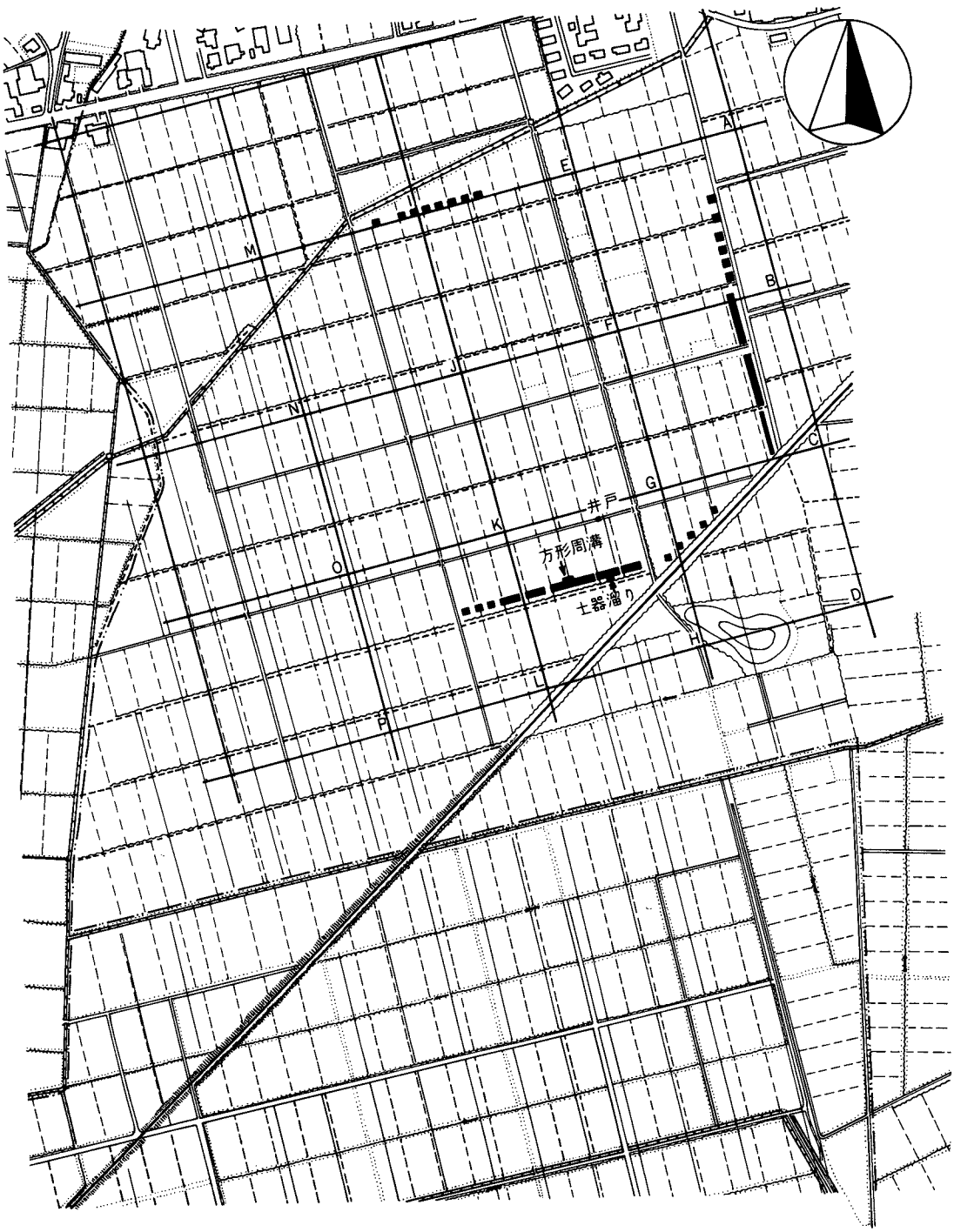
II　調査に至る経緯

本遺跡の発見は、大正～昭和初期に行われた耕地整理の際に用排水路掘削によって掘り出された曲物製井筒（現存せず）に遡るが、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として衆目に浴するに至るには、昭和40年代前半（40～42年頃）に上野与一氏・清水保昌氏・吉岡康暢氏等能美古墳群西山支群を調査された折に現地を踏査され、かなりの広がりをもつ遺跡であることが推定された。これらの所見を基に、昭和49年に刊行された『石川県遺跡地図』（石川県教育委員会）に登載されるによって多くに周知されるに至った。ただ、本遺跡の時代区分については、井筒（曲物製）及び若干の須恵器片が採取されている点から周辺の古墳群と直接的（同時代的）な係わり合いについては不明であった。

又、当地域においては戦後の昭和20年代半ばにおいて歴史学における真理の探求という自由な学問精神にのっとり考古学の分野での調査が行われるようになり、[10]時　に昭和26年に行われた寺井町和田山１・２号墳の調査の結果、中期的様相を留める県下で最初の族長墓が発掘され、[11]出土遺物が一括して国庫買上げされるに至り、古墳群の輪廓がようやく明らかにされるに伴い県下でも有数の古墳群として衆目をあつめるに至った。――経過をふまえ、その後、政治勢力の集約的表現としての古墳“群”構成の把握に努力される一方、昭和30年代に入り、地域開発の波が加速度的に増加し、これら独立丘が格好の土取場として開発の機危にみまわれる中で、古墳群保存の要望が研究者・地元町民の間で急速に高まり、各方面の努力によって、“古墳公園”化という具体的な構想に結実した。しかし前後してこの間、数基の古墳が消滅ないし半壊し、又、事前調査の性格をもった発掘が昭和39年・42年と相次いで実施されるなど、保存に対するなみなみならぬ労力が注がれた事にもより、古墳群をとりまく生産集団の生活領域の発見までには及んでいなかった点で、昭和52年における一連の発見は部分的ではあるにせよ今後の能美地域の古墳文化研究の一助になり得る重要な発見であったと想われる。

さて、本遺跡の発掘に至る直接の契機は、農業経営の近代化（水田１区画を30ａの大圃場とし、

辰口町高座



第２図　高座遺跡調査地点（黒ぬり）　　S＝$\frac{1}{4000}$

農地の集団化により大型機械による労力の節減という）を目的とした、能美郡寺井町を中心に一部辰口町高座地内を含む約16haに及ぶ地域に県営の圃場整備を実施しようという計画の策定がなされたことにはじまる。

昭和51年11月に県農林部耕地整備課より調査依頼を受けた県文化財保護課は、同月18日に遺跡の範囲及び状態を把握するために試掘を伴う分布調査を実施した。この調査結果を基に、耕地整備課と協議した結果、切土（削平）を最少限に留めることによって遺跡を保護する事とし、掘削が行われる用排水路部分については発掘調査を行う事で合意した。

昭和52年５月２日付で発掘通知書が提出され、調査の実施については現在耕作（水田）されているため、稲刈り終了後に開始する予定で準備を進め、文化庁よりの発掘通知（昭和52年９月19日付委保第５の1365号）をまって、同９月21日より地元の協力を得て開始され、同11月15日（実労40日）に終了した。高座地区では約100,000㎡の範囲内に遺物の分布が認められ、時代事に範囲が限定されるようであるが縄文･古墳･平安･中世各期の遺物が包蔵されているなかで、用排水路線に沿って約1,000㎡を調査した。調査費用については国庫補助1,500,000円・県負担1,500,000円の計3,000,000円である。

III　発掘の経過（発掘日誌）

９月21日（曇一時雨）　発掘現場に器材を運搬。現場小屋としてプレハブ（２×３間）の設置を予定しているが、場所の選定と周辺環境の整備を実施した後、遺跡の遠景写真撮影を行う。

９月22日（曇）　圃場整備事業計画区画方位に合致させたグリッドを設定し、杭打ちを行う。（まづ、方100ｍの大区画Ａ～Ｐ区を設定し、大区画をそれぞれ方20ｍの１～25区の中区画とし、又、その中区画を方４ｍの１～25区の小区画とすることにした。従って基本グリッドを４ｍ区画とする。）

９月24日（曇）・９月26日（晴）・９月27日（晴）　大区画割の杭打作業を行う。

９月28日（晴のち曇）　遺跡の広がり、時代等を把握するために坪掘り（１×１ｍ）を行う。

９月29日（曇のち雨）　プレハブ小屋の設置と発掘器材の納入。

９月30日(晴)・10月１日(晴)・10月３日（曇時々雨）　坪掘り作業の継続。本日までに114ヶ所に至る。層序は①耕作土②灰褐色土③黒褐色土④黄茶褐色砂土が一般的である。又、③層面が平安～中世期・④層面が古墳期（主に試掘区東側）となろうか。

10月４日（曇一時雨）　本日より用排水路部分の発掘にとりかかる。Ｉ（10－10、５－15・５）Ｅ（25－20・10、20－25・15・５）各グリッド表土除去。

10月５日（晴）　前日に続き、Ｉ・Ｅ区第２層の発掘――土師質土器片数点出土。

10月６日（晴）　Ｉ・Ｅ区下部層への断割りを実施（灰褐色２層が平安ないし中世期の包含層となる。遺構としては、不規則な浅い溝状跡を確認したのみである）。下部層には人工遺物は包含されておらず、黒褐色土～黄色砂質土と続く。

10月７日　Ｂ（７－10・８－８区）表土排除。土師器細片数点出土。

10月11日（曇のち晴）　前回調査区第２層の発掘及びＢ（９－６・８・10、10－７）区表土除去作業。前回の調査区では第２層は厚く、４～50cmの堆積である。又、この層中下部には自然礫（河原石）の堆積があり、以下礫層が続くようである。遺物・遺構の発見なし。

10月12日（晴）　Ｂ（10－15）・Ｃ（６－12・14、７－11・15）区を追加し、耕土及び第２層の発掘を行う。Ｃ７－15区第３層（黒褐色土）面より太平通宝（北宋銭）出土。Ｃ区に至って、古墳時代の土器細片教点の出土があった。黒褐色土が包含層と考えられるため、断割りを行う。

10月13日（晴）　Ｃ（８－12・14、９－11）区及びＣ区南端に２×28ｍのトレンチを設定し、耕作土・第２層の発掘を行う。Ｃ８・９区では少量の須恵器片と、土師器細片が多く出土し、ここでも黒褐色土が古墳期の包含層であることが確認される。（現在までは、律令～中世期の面と考えられる黒褐色土で止め、遺構の発見に当っているが、浅い（２～５cm程度の）溝状跡が数ヶ所で確認できるのみである）。

10月14日（晴）　Ｃ（６－11・13・15）、Ｃ７－12、Ｃ（８－11・13・15）、Ｃ９－12各区の発掘作業。

10月15日（晴）　Ｂ・Ｃ区黒褐色第３層（古墳期）の掘り下げを開始。高坏脚部等が出土。

10月17日（晴）　Ｂ・Ｃ区掘り下げ、併行してＬ（８－21・16・６）、Ｌ３－21、Ｈ23－６、Ｈ18－21区の表土除去。Ｃ区より月影式期（古墳時代前期）の遺物が多く出土する。なお、本日午後中田課長・河崎係長の視察を得る。

10月18日（晴）　Ｈ（18－11・１）、Ｈ（13－16・６）、Ｈ（８－21・11）区表土除去及びＢ・Ｃ区古墳期包含層の発掘継続。

10月19日（晴）　Ｂ・Ｃ区掘り下げ及びＨ区第２層の発掘。Ｈ23－11区より寛永通宝１点、さらに指頭大の仏像頭部（土製）出土。

10月20日（晴）　Ｈ（18－６・11・16）区の掘り下げ。Ｈ18－６・11区で黒色土の落込み？――精査を行うが、プラン明らかでない。Ｈ11－３区で井戸跡の発掘にとりかかる（この井戸については、大正～昭和初期頃に耕地整備を行い、用排水路を堀削した折に曲物製井戸筒が掘り出され、外枠と想われる円筒形の枠の一部が用排水路に露呈していたもので、今回の圃場整備工事で削平される危険性があったため発掘することになっていたものでる）。

10月21日（晴）　Ｈ８－21、Ｈ18－16・21Ｈ23－６区の発掘（掘り下げ）。

10月22日（晴）　Ｈ13－６・21、Ｈ13－16・21区第３層の掘り下げに併行してＨ８－６・16区

柱穴状小ピットの発掘にとりかかる。

10月24日（晴）　Ｈ８区及びＨ13－１区の遺構発掘作業。又、Ｈ13－16・21区の精査により溝（巾約30cm）を発見―覆土は黒褐色土で、土師器片（月影期）を包含している。本日より高座遺跡の圃場整備区画内で行った、坪堀り部分の埋戻し作業を行う。

10月25日（晴）　前日に続き坪堀り部分の埋戻し及びＢ・Ｃ区の精査にとりかかる。Ｂ・Ｃ区では古墳時代前期（月影式期）の土器等が地山面に点在しているが、明確な遺構はつかめない。溝状遺構２本が確認できる。午後より井戸（中世？）内部の発掘を行うが、湧水が著るしく、発掘排土より遺物を検出するといった状態で、木の実・土師質土器・漆器椀等が出土した。

10月26日（晴）　Ｈ13－６区で多量の土器細片が発見され、検出作業にかかる。又、Ｈ18－６・11区の黒色土の濁りはプランが不明瞭なため一部断割りを行った結果、坩形土器数点が発見されて住居址の可能性が出てくる。

10月27日（時）　前日の住居址と想われる北側（Ｈ18－11・16）の拡張を行う。しかし依然としてプラン不明瞭であるが、確かに黒色の濁りがある。

10月28日（晴）　Ｈ13－６区（土器溜り）の拡張。Ｈ18－11・16区（住居址？）平面ではつかめないので一部断割を行った結果、小型壺２点出土――壁面の立上りであろうか、やや濁りが薄くなる。なお本日より調査区の実測準備を兼ね、調査員２名の増員を得た。

10月29日（晴れ）　Ｈ13－６区精査。住居址（？）中央部分より掘り下げを開始。調査区実測の為、遣り方の設置作業を行う。

10月31日（曇）　本日よりＩ・Ｅ区実測開始及び写真撮影。Ｈ18区の調査では、住居址の形態になりつつある。内部より多量の完形土器が現れてきた。

11月１日（曇）　Ｂ・Ｃ区平面図作成。Ｈ18－11・16区掘り下げ。

11月２日（晴）　線路沿いに設置したＤ区グリッドの平面図作成に併行してＨ区住居址状遺構掘り下げ及び土層図作成と畦の取りはづし。土層の観察では住居址となりそうである。

11月４日（曇）　Ｂ・Ｃ区土層断面図の作成。Ｈ区住居址状遺構の排水作業（地下水位が高く、地表より約80cm程度下ったところで水が湧き、色別の難しい土層に加して二重苦の感あり。Ｈ11－３区井戸跡の作図を行う――底面では礫層となり、湧水豊かで排水ポンプと競い合いである。

11月５日（晴）　Ｈ18－11・16区掘り下げ及び土層断面図の作成。Ｃ区土層図作成。

11月７日（曇）　昨夜雨の為、全面的に排水作業。午後よりＣ区の遺構実測及び住居址状遺構セクションベルトの取りはづし。

11月８日（曇のち雨）　Ｃ９－12区土層図・Ｈ８－６・11区土層図及び遺構実測作業。

11月９日（晴時々曇）　排水作業後、Ｈ区の土層図作成及び遺構実測。

11月10日（曇のち雨）　Ｈ13区平面図作成。雨のため途中より作業を中止する。

11月11日（曇）　H23区・L３区・L８区平面図及び断面図の作成作業。

11月12日（晴時々曇）　H13－６・７区土器溜りの実測と取り上げ。H18－６・11区住居址状遺構内土器実測及び写真撮影。

11月14日（晴時々曇）　調査区写真撮影。H－18－６・11区住居址状遺構内土器の取り上げ後、柱穴の確認を行う――湧水著るしく、又、地盤軟弱で全く不明であるため一部断割りで追求してみることになる。掘削途中、下部に溝状跡があることが判明した。この溝状跡は黄褐色土層で床面となり、住居址状遺構と考えていた底面下の中心部で約20cm位であったため、湧水で阻まれた柱穴の確認を兼ねた黄褐色土までの掘り下げを行った。

11月15日（晴）　掘り下げの結果、住居址状遺構を包括する格好で、方形周溝遺構が現われ、「墓」の可能性も考えられるので急遽、周溝内部の精査を行ったが、遺構ないし遺存遺構は発見されなかった。写真撮影・実測を行った後、井戸側・筒を取り上げ、発掘予定範囲（用排水路）が一応達せられたので今回の調査（現場）を終了することにした。

調査期間中は比較的好天に恵まれるなかで進展することができたが、地下水位が高いせいか地表下約60cm前後（古墳期生活面に当る）に至ると浸透湧水が生じて難渋する面もしばしばあった。これらによって見落した遺構のないことを念願しているが、可能性は充分にあったことを記しておきたい。

Ⅳ　遺構・遺物

(1)　調査区の概要

高座遺跡における遺物の分布範囲は約100,000㎡（中世期）にも及ぶと想定されるが、今回の調査では圃場整備事業における工事によって確実に消滅する新用水路に調査対象を限定して、約1,000㎡の発掘を行った。従って、広範囲に亘る遺跡地の極く一部についての調査であって、各調査地区より発見した遺構・遺物等の相互関係についても十分に把握するに至らず個別的なものとなった。

東側調査区では主に古墳時代前期の遺物が多く出土し、圃場整備対象外にあたる東側の徳久方向にも拡がりが推測される。その他、縄文期・平安期・中世期の遺物も若干ではあるが出土している。遺構としては、溝跡２（古墳期・平安期(？)各１）と柱穴状小ピット（古墳期）に凹地（自然傾斜？）が確認できた。

南側調査区では、溝跡２（古墳期）・方形周溝遺構１（古墳期）・柱穴状ピット若干が検出され、主に古墳時代中期の遺物が多い。又、数少ないが、平安期・中世期等の遺物についても採取することができた。

土層の堆積状態は、①暗黄褐色砂質土第１層（耕土で約20cm）・②褐色砂質土第２層（約20cmで、平安及び中世の遺物包含層）・③黒色土～漸移的に黒褐色土に変化していく層の分類は甚だ難かしいがあえて２分し、黒色粘質土第３層（約10～20cm）・④黒褐色粘質第４層（約10～20cmで、③・④層が古墳時代の遺物包含層）とした。以下は黄褐～黄色土となる。なお、東調査区では黄褐色土面で縄文時代土器片を採取しているが遺跡の範囲等については詳になしえなかった。

又、南調査区に近接した位置で井戸跡１を発掘している。この井戸跡は旧来より所在が判明していたもので、内部より土器及び木器等が出土している。

(2) 南調査区（遺構・遺物）

溝跡・小ピット（第３図参照）　南調査区で発見した溝は①H13－16区と②H13－21区と隣接するグリッドより発見せられ、方位をほぼN－35°－E方向に、約1.2ｍの間隔をおいて併存しており、巾約30～35cm・深さ約10cmの浅い溝で、覆土は黒褐色土であった。H13－16区溝中より第３図１の甕形土器片が検出されているので、H13－21区溝中には出土遺物は発見されなかったが覆土に相異が感じられないので両者とも古墳時代前期（月影式期）の遺構と考えたい。

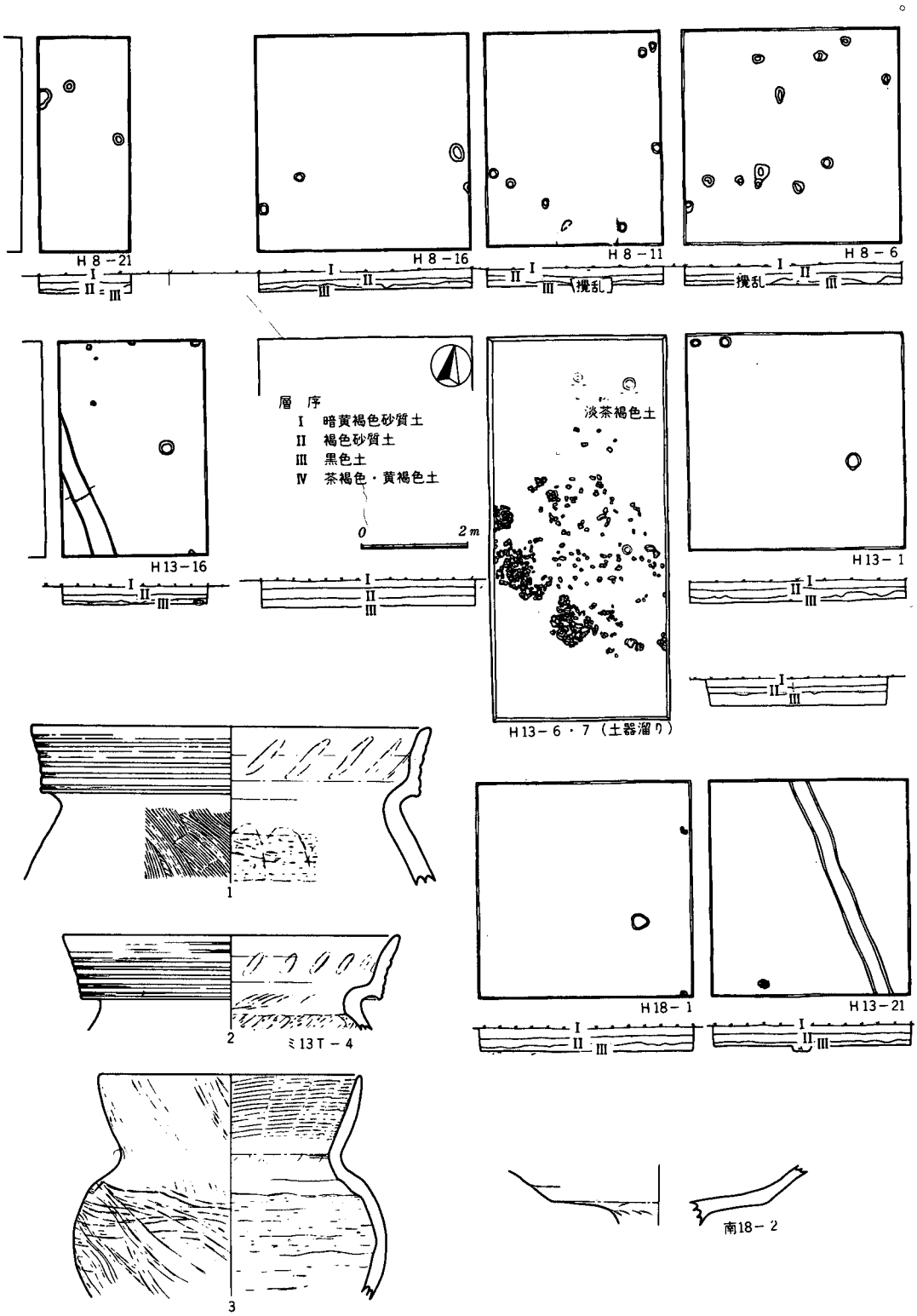
又、柱穴小ピット群は不規則的に点在しており、径約10～30cmのもので占められる。内充土は黒褐色であるが出土遺物は発見されておらず、時期・性格についても不明といわざるをえない。

その他、大正末期～昭和初期にかけて掘削されたという暗渠排水路が２条検出されたが本稿ではふれないことにした。

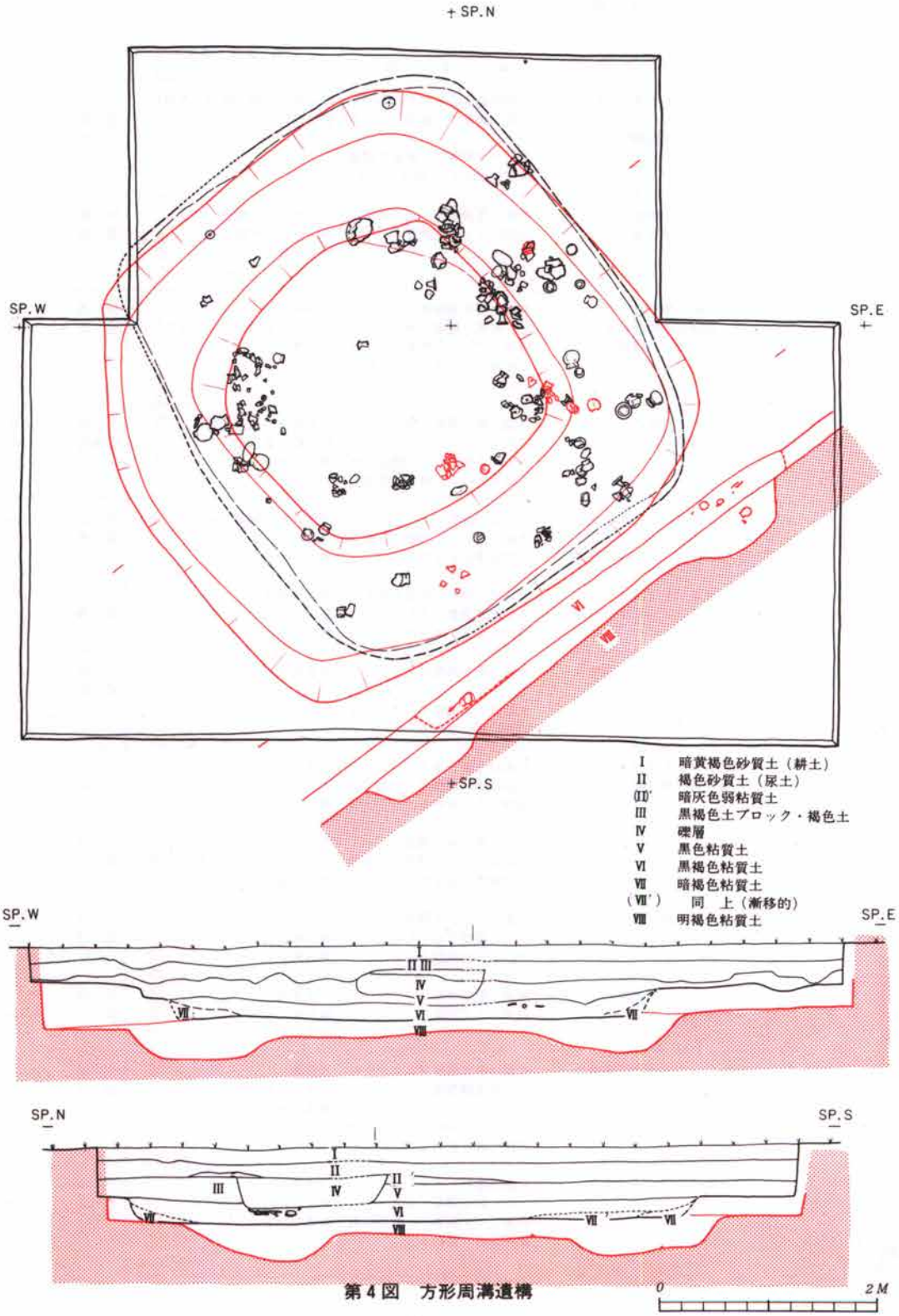
方形周溝遺構（第４図・図版７）　H18－11・16区（一部拡張）より検出された方形周溝は、当初は住居址ではないかと考えていた。第４層面の精査に於て、第３層黒色土の落込みが確認され、輪郭は不明瞭であったため小断ち割を行いつつ発掘を行った結果、多量の土器（完形が多い）が発見されるとともに、土層観察用畦にほぼ照合してプランが判明したかに思えた。そこで、柱穴・竈等の遺構の確認を行う事とし、実測を済ませた後床面の精査を行った。湧水著るしく、明らかにならないので一部断割りを入れる事とし、掘削した折に周辺下部より溝路が発見され、依然として柱穴等が確認できないので下部まで発掘する事になる。

結果、住居址と考えていたプランにほぼ合致して方形周溝が発見されるに至った。急遽“墓”の可能性も生じ、内部（台状部）に痕跡の有無を確認したが向も発見できなかった。従って、この遺構の性格については今後の検討課題とし、これら周溝遺構の類例をまって判断したい。

方形周溝は隅丸方形で約4.8ｍ×4.8ｍ・周溝巾は上端で約１～1.2ｍ・深さ約0.3～0.4ｍを測り、同溝内の台状部巾は約2.65×2.70ｍである。覆土は明褐色粘質土であった。なお、内部よりの出土遺物は上部・下部出土と２分しているが、相様差はほとんどみうけられないので一括資料として取扱っていいのではないかと考えている。以下出土遺物の説明を表で記載した。



第3図　南調査区溝跡・土器溜りの状態（$\frac{1}{6}$）・及び土器一部（$\frac{1}{3}$）


+SP.N
SP.W
SP.E
+SP.S
I 暗黄褐色砂質土（耕土）
II 褐色砂質土（尿土）
(II)' 暗灰色弱粘質土
III 黒褐色土ブロック・褐色土
IV 礫層
V 黒色粘質土
VI 黒褐色粘質土
VII 暗褐色粘質土
(VII') 同 上（漸移的）
VIII 明褐色粘質土
SP.W
SP.E
SP.N
SP.S
0
2M

第4図　方形周溝遺構

方形周溝遺構（上部）出土土器

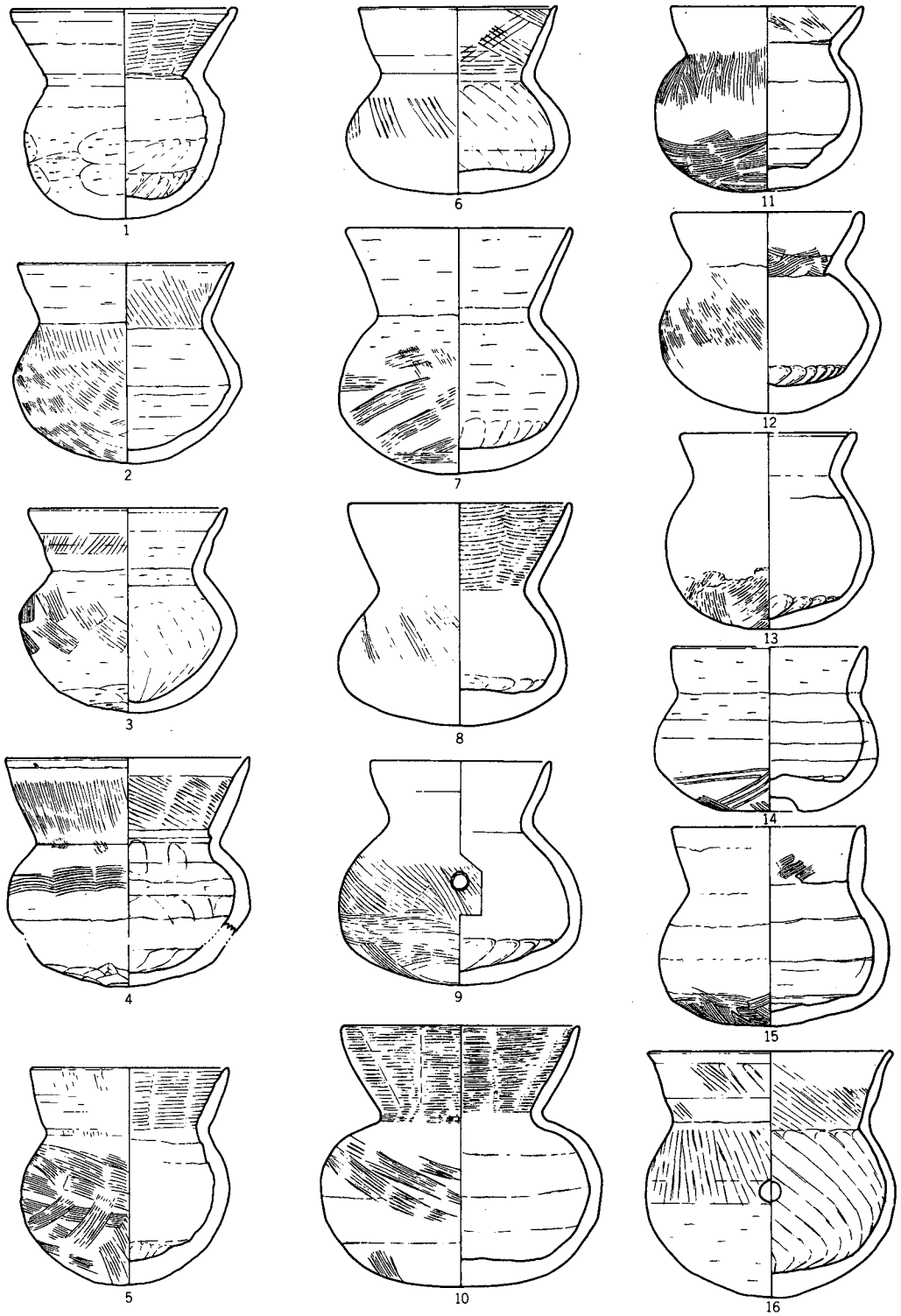
品種	番号	手法		色調・胎土・焼成等	その他
		口頸部	体底部		
坩（小型丸底壺）	1	・外面はヨコナデ調整（粘土の継き目を留める）。 ・内面は刷毛状具調整	・外面頸部下よりナデ、胴位では削り調整で、底部はナデを行う。 ・内面ナデ調整で、底部で指頭押圧を留める。（継ぎ目残す）	明灰褐色（胴・底部に黒斑） 胎土良好 焼成良好	口径 10.1cm 器高 9.5cm
坩	2	・外面ヨコナデ調整 ・内面は刷毛調整後のヨコナデ	・外面は篦調整後の刷毛調整か ・内面はヨコナデ調整	淡明黄褐～赤褐色 砂粒を含むが良好 焼成良好	口径 9.8cm 器高 9.1cm
坩	3	・外面は刷毛調整後のヨコナデで一部刷毛調整痕を留める。 ・内面はヨコナデ調整	・外面は刷毛調整後のヨコナデで、底部に篦削りあり。 ・頸部下でヨコナデを行い、他は底部からのナデアゲを行っている。	淡茶褐色 胎土に少量の粗砂粒を含む 焼成良好	口径 8.8cm 器高 9.2cm
坩	4	・口唇部ナデの他は、内外面とも刷毛調整。	・外面に刷毛調整を留め、底部に篦削りを行っている。 ・内面はナデ調整で、指頭圧痕を留めている（継ぎ目顕著）	淡茶褐色 粗砂粒少量含む 焼成良好	口径 10.9cm 器高約 10.2cm
坩	5	・外面は縦位の刷毛調整後のナデ ・内面は横位の荒い刷毛調整	・外面刷毛調整 ・内面は荒いナデ調整で、底部に指頭押圧痕を留める。	灰黄褐色（頸部～胴部の一部に黒斑あり） 胎土・焼成ともに良	口径 9cm 器高 10cm
坩	6	・外面はヨコナデ調整 ・内面は一部に刷毛調整を留める。	・外面は一部刷毛調整を留めるるがナデ調整である。 ・内面はナデアゲを行っている。	淡灰茶褐色 胎土良好 焼成良好	口径 9cm 器高 8.5cm
坩	7	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は刷毛調整後にナデを行っている。 ・内面はナデ調整で、底部に指頭押圧痕を留める	淡黄褐色 砂粒を含む 焼成良好	口径 10.4cm 器高 11cm
坩	8	・外面ヨコナデ調整 ・内面は荒い刷毛調整	・外面刷毛調整後ナデ？ ・内面はナデ調整で、底部で指頭押圧痕を留める。	淡茶褐色 細砂粒を含む 焼成普通	口径 10.1cm 器高 10.1cm
坩	9	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は荒い刷毛調整 ・内面はヨコナデ調整で、底部で指頭押圧痕を留める。	茶褐色 粗砂粒若干含む 焼成普通	口径 8.2cm 器高 10.2cm 穿孔 1
坩	10	・内外面とも細かい刷毛調整	・外面は一部刷毛調整を留めるがナデ調整を加えているか？ ・内面はナデ調整である。	淡茶褐色（一部黒斑あり） 細砂粒を含む 焼成あまい	口径 10.8cm 器高 12cm （化粧土使用か）
坩	11	・内外面ともナデ調整で、内面は刷毛調整の後？	・外面は刷毛調整 ・内面はナデ調整	淡黄茶褐色 粗砂粒目立つ 焼成あまい	口径 8.4cm 器高 8.4cm
坩	12	・内外面ともヨコナデ調整で、内面頸部に荒い刷毛調整	・外面は刷毛調整後にナデを行い、刷毛調整痕をほとんど消す。 ・内面はナデ調整で、底部に指頭押圧痕を留める。	黒灰色 胎土に砂粒多し 焼成普通	口径 8.6cm 器高 9.2cm
坩	13	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は摩耗して明らかではないが、刷毛調整であろう。 ・内面はナデ調整で、底部に指頭押圧痕を留める。	淡赤褐色 胎土に砂粒を含むが良 焼成やや甘し	口径 8cm 器高 9cm

品　種	番号	手　法		色調・胎土・焼成等	そ の 他
		口　頸　部	体　底　部		
坩	14	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は摩耗して明らかではないが、底部ちかくで荒い刷毛調整あり。 ・内面はナデ調整である。なお継ぎ目を顕著に留める。	淡黄褐色 胎土・焼成ともに良	口　径　8.8cm 器　高　7.5cm
坩	15	・外面ナデ調整 ・内面刷毛調整後にナデを加う	・内外面ともナデ調整で、外面底部では刷毛調整を行っている。	淡黄褐色 胎土・焼成ともに良	口　径　8.5cm 器　高　9 cm
坩	16	・内外面とも刷毛調整後ナデを加えている。	・外面上部を荒い刷毛状具で、下部をナデ調整 ・内面は底部よりナデアゲ。	淡茶褐色 粗砂粒を多く含む 焼成良好	口　径　11cm 器　高　11.3cm 穿　孔　1
坩	17・18	・内外面ともヨコナデ調整	・外面上部はナデ調整で、下部には板状具による削り様のナデを行っている。 ・内面はナデ調整	茶褐色 粗砂粒若干含む 焼成あまい	口　径　9 cm 18外面、煤(?)付着
坩	19	・不明 ・内面は細かい刷毛状具調整	・外面ナデ調整 ・内面は細かい刷毛状具調整	茶褐色 粗砂粒微量含む 焼成普通	推定口径　9.5cm 推定器高　8.2cm
坩	20	・不明	・外面は刷毛調整で荒い。 ・内面はナデ調整で、底部に指頭押圧痕を留める。	淡黄褐色（胴部上位に黒斑） 胎土に砂粒目立つ	
坩	21	・不明	・外面はナデ調整 ・内面はナデ調整で、継ぎ目留める。	暗褐色 胎土不良 焼成普通	
坩	22	・不明	・外面は荒い刷毛状具調整 ・内面に指頭押圧痕を留める	淡茶灰色 胎土・焼成良	
坩	23	・外面ヨコナデ調整 ・内面は荒い刷毛調整後ナデを行っている。	・外面刷毛調整 ・内面は底部よりのナデアゲを行う。	淡明黄褐色 砂粒及び粗砂粒を多く含む 焼成良好	口　径　10.3cm 器　高　11.7cm 外面下胴部に煤付着
坩	24	・内外面ともヨコナデ調整	・外面刷毛調整後にナデを行っている。又、底部に篦削り調整が認められる。 ・内面は底部からのナデアゲ	淡黄茶褐色 砂粒を混入 焼成良	口　径　11.2cm 器　高　12.8cm
坩	25	・内外面ナデ調整であるが、外面は刷毛調整後。	・外面胴上部は刷毛調整後にナデを行っている。 ・下部は荒い刷毛によるナデ（ツケ様） ・内面はヨコナデ（継ぎ目顕著に留む）	淡茶～茶褐色 細砂粒を多く含む 焼成ややあまい	推定口径　10.4cm 推定器高　14.5cm
坩	26	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は刷毛調整で、一部ナデによって刷毛調整痕消える。 ・内面底部～胴下部に刷毛調整で、上部はナデアゲ。	淡黄褐色 砂粒を含む 焼成甘い（２次加熱によるか）	口　径　12.6cm 器　高　14.5cm 胴部以下に煤付着
坩（小型壺形土器）	27	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は刷毛調整後のナデか（表面摩耗） ・内面はナデ（継ぎ目明瞭）	淡褐色（胴下部に黒斑あり） 粗砂粒微量含む 焼成ややあまい	口　径　9.6cm 推定器高　14cm
坩（〃）	28	・内外面ともヨコナデ調整	・内外面ともヨコナデ調整	淡茶灰色・砂粒を若干含む。 焼成良	口　径　8.4cm
坩（〃）	29	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は細かい刷毛調整 ・内面は荒いヨコナデ調整	淡黄褐色・微砂粒を含む。 焼成良	口　径　9.2cm

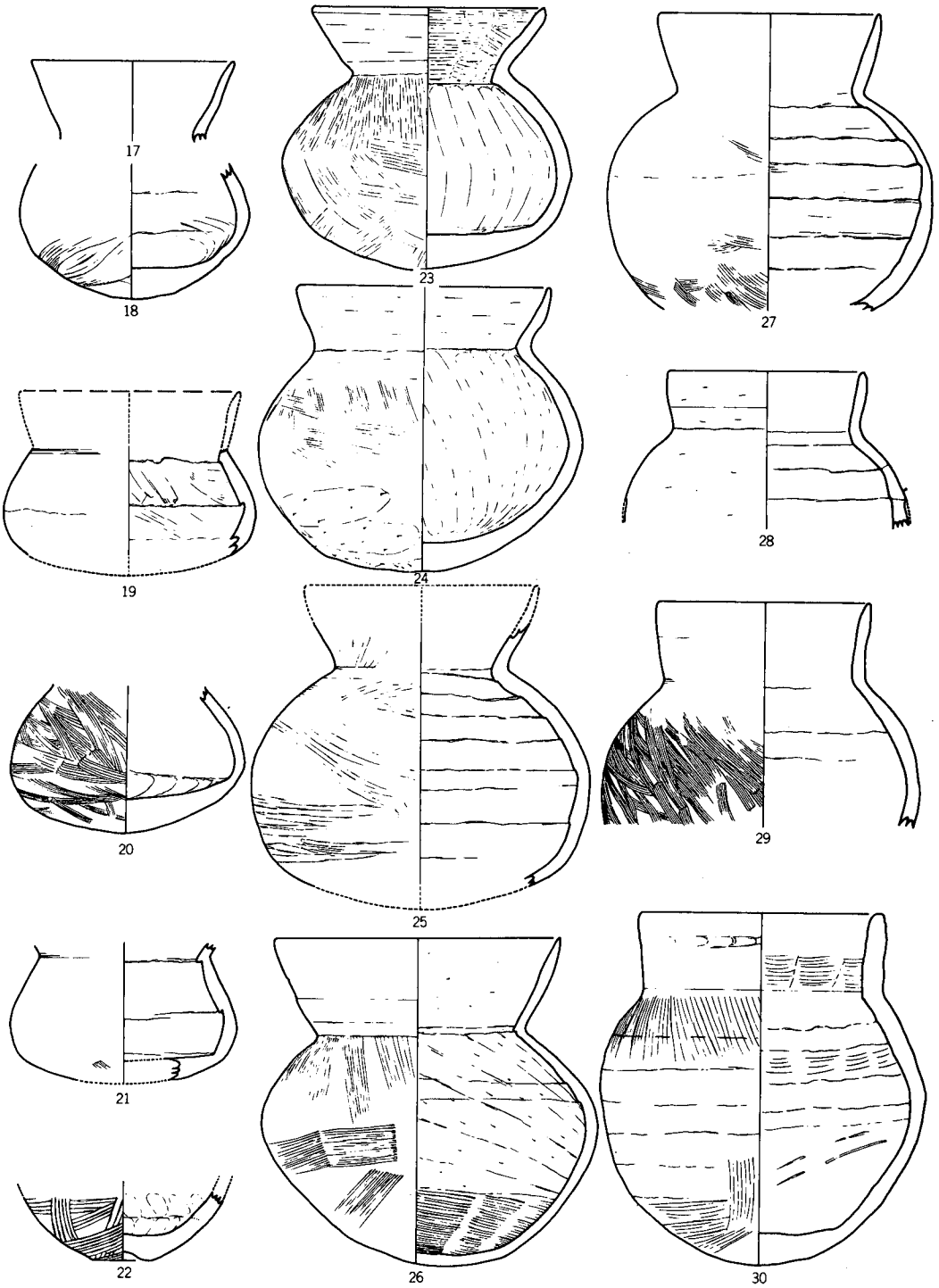
器　種	番号	手　法		色調・胎土・焼成等	その他
		口　頸　部	体　底　部		
坩 （小型壺形土器）	30	・外面はヨコナデ調整 ・内面一部刷毛の他ナデ	・外面は胴部中位でナデを行っているが、上下は刷毛調整 ・内面は、部分的に刷毛調整を留めるが、ナデを行っている（継ぎ目明瞭）	暗茶灰色（胴部に黒斑） 胎土・焼成良	口　径　10.6cm 器　高　15.6cm
甕	31	・外面は櫛歯状具による縦位のカキメを施こす ・内面はヨコナデ調整	・外面はヨコナデ ・内面は縦位の削り	赤褐色～淡茶褐色 粗砂粒若干含む 焼成良好	口　径　19.4cm
甕	32	・外面ヨコナデ調整 ・内面は刷毛調整後のヨコナデか	・内外面ともヨコナデ調整	淡茶褐色 細砂粒目立つ 焼成良好	口　径　16.8cm （外面に煤？付着）
甕	33	・外面はヨコナデで、頸部に荒い刷毛調整 ・内面は荒い刷毛後に一部ナデ	不明	赤黄褐色 粗砂粒若干含む 良好	口　径　21cm （外面に煤付着）
甕	34	・外面口縁端にナデ、下部には荒い櫛歯状具の刷毛調整。 ・内面は荒い櫛歯様の刷毛	・外面荒い櫛歯様の刷毛 ・内面は頸部下でナデの他は、削りを行っている。	淡茶褐色 細砂粒多く目立つ 焼成普通	口　径　15.6cm （外面部分的に煤）
甕	35	・外面は荒い刷毛調整 ・内面は斜位の荒い刷毛調整	・外面は口頸部に続けて荒い刷毛 ・内面は一部ナデを行った後、板状具によるナデ調整（部分にナデ残る）	淡黄茶褐色 粗砂粒目立つ（多い） 焼成普通（外面剥離著るしく、２次的加熱を受けた為か）	口　径　17cm 口辰に面取あり （外面部分的に煤）
甕	36 ～ 37	・内外面ともヨコナデ調整調整	・内外面とも板状具によるナデ調整 ・底部内面で刷毛調整痕あり	赤黄褐色・石英粗粒多く含む・焼成やや甘い	口　径　17.6cm 外表面若干摩耗 （外表面部分的に煤）
甕	42	・外面は荒い櫛歯様の刷毛調整後ヨコナデを加えている。 ・内面は削り調整後？のナデヨコ。	・外面は荒い櫛歯様の刷毛調整で、底部付近では削り調整である。 ・内面板状具によるか削り様のナデ（ツケ）である。	赤茶褐色～黒褐色 荒い砂粒目立つ 焼成は良い	口　径　15.8cm 器　高　22.2cm （内面底部に炭化物付）
甕 （壺？）	43	・内外面ヨコナデか	・外面に刷毛調整痕 ・内面はナデか	赤茶褐色 粗砂粒比較的目立つ 焼成あまい	（内外面とも摩耗）
甕	44	・不明	・外面は刷毛調整で、胴下部で一部削りを加えている。 ・内面はナデ調整で、一部板状具によるか削り様のナデを施こす。	淡黄茶褐色 細砂粒目立つ 焼成良	

器　種	番号	手　法		色調・胎土・焼成等	その他
		坏　部	脚　部		
高　坏	38	・内外面とも刷毛調整後、ナデを加えている。	・内外面ともナデ調整	淡赤茶褐色・細 細砂粒を含む 焼成やや甘い	口　径　13.8cm 器　高　11cm
高　坏	39	・内外面刷毛調整後に一部ナデを行っている。	・脚部外面はナデ、脚受部は刷毛調整である。 ・脚部～脚受くびれ部内面に削りを行っている他はナデ調整。	淡茶褐色 粗砂粒多く含む 焼成普通	口　径　17.4cm 器　高　13.2cm 脚受端径　11.9cm

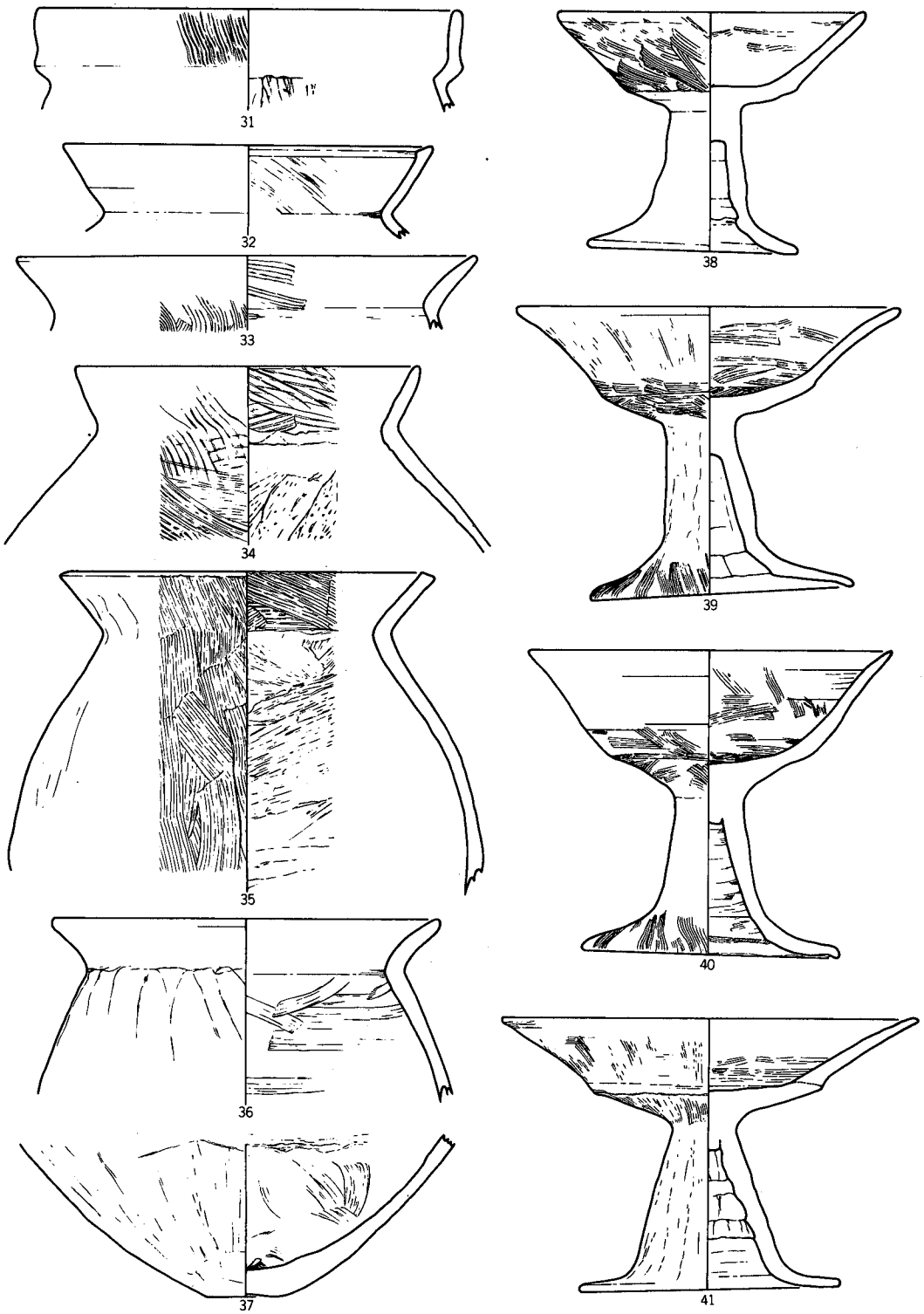
器　種	番号	手　法		色調・胎土・焼成等	その他
		坏　部	脚　部		
高　坏	40	・外面は刷毛調整後のナデ調整で坏下部で刷毛調整痕を残す。 ・内面は刷毛とナデの併用か。	・外面脚部はナデで、脚受部に刷毛調整を行っている。 ・内面脚部は右廻りの削りで、脚受部には刷毛調整後のナデを行っている。	茶褐色 粗砂粒若干含む 焼成良	口　径　16.4cm 器　高　13.8cm 脚受端径　11.6cm
高　坏	41	・内外面とも刷毛調整後にナデを加えて、刷毛痕ほとんど見えず。	・外面は脚部、脚受部ともナデ調整である（刷毛調整後？） ・内面はナデ調整で、脚部で指頭による押さえ痕を留める。	赤褐色 粗砂少量含む 焼成良好	口　径　18.8cm 器　高　12.5cm 脚受端径　11.8cm
高　坏	45	・内外面ともヨコナデ調整（内面坏底部で一部刷毛痕を残す）。	・外面は脚部を研磨、脚受部をナデ調整。 ・内面は脚部で削り、脚受部でナデ調整を行っている。	淡赤茶褐色 粗砂粒少量含む 焼成良好	口　径　19.8cm 器　高　12.2cm 脚受端径　11.9cm
高　坏	46	・内外面とも磨耗して不明であるが、ナデ調整であろうか。	・不明	赤褐色 微砂粒を含む （細石英粒目立つ） 焼成ややあまい	口　径　24.1cm
高　坏	47	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は脚部及び脚受部ともナデ調整である。 ・内面は脚部を軽い削りで、脚受部をナデ。	淡茶褐色 微砂粒多し 焼成ややあまい	口　径　19cm 器　高　13cm 脚受端径　13.5cm
高　坏	48	・内外面とも刷毛調整後、ナデを加えている（部分によって刷毛痕残る）。	・不明	淡茶褐色 微砂粒を含む 焼成普通	口　径　17.8cm
高　坏	51	・外面は荒い研き（様） ・内面はナデ	・外面は荒い研き（様） ・内面は削り	淡茶褐色 粗成粒多く含む ・内面は　焼成良好	
高　坏	52	・外面は荒い刷毛調整後荒研きによって部分的に刷毛痕消す ・内面は研きあり。	・外面は縦の研き ・内面はナデ	淡茶褐色 粗砂粒多し 焼成良好	穿　孔　4
高　坏	53	・外面刷毛調整 ・内面ナデか	・外面はナデで、脚受部では刷毛調整後。 ・内面はナデ調整	淡茶褐色 微砂粒を含む 焼成普通	脚受端径　9.5cm
器台(?)	49 〜 50	・内外面ナデ及び板状具によるか削り様のナデを施こす。(49)	・内外面ともナデ調整（50）	淡赤茶褐色(49)・淡茶褐色(50) 粗砂粒若干含む 焼成良	口　径　8.6cm 脚　端　11.4cm （器形は想定）
埦(鉢？)	54	・内外面細かい研摩	・内外面とも研摩	淡茶褐色・粗砂 粗砂粒含む 良	口　径　13.2cm 底　径　4.2cm （化粧土加か）
台付埦(〃)	55	・内外面ともナデ調整 （継ぎ目を留める）	・内外面ともナデ調整	淡赤茶褐色 良選土使用 焼成良	口　径　9cm 器　高　7.2cm 脚　径　5cm
台付埦(〃)	56	・内外面ともヨコナデで、一部研きを行っている。	・外面は研きで、脚端にナデを行っている。 ・内面は削りの後ナデ？	淡赤茶褐色 粗砂粒少量含む 焼成良	口　径　12cm 器　高　7.9cm 脚　径　6.7cm



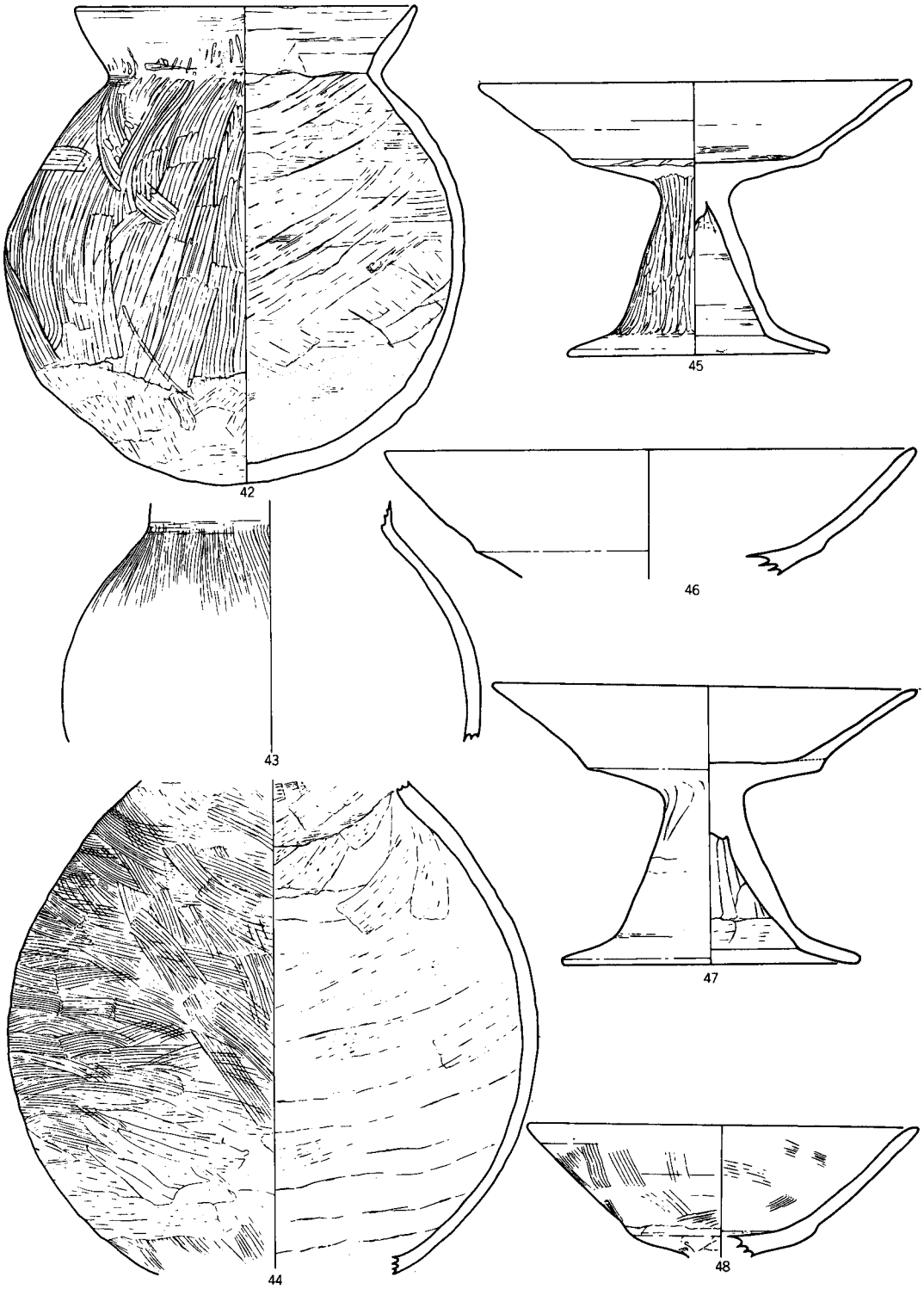
第５図　方形周溝遺構（上部）出土土器（$\frac{1}{3}$）



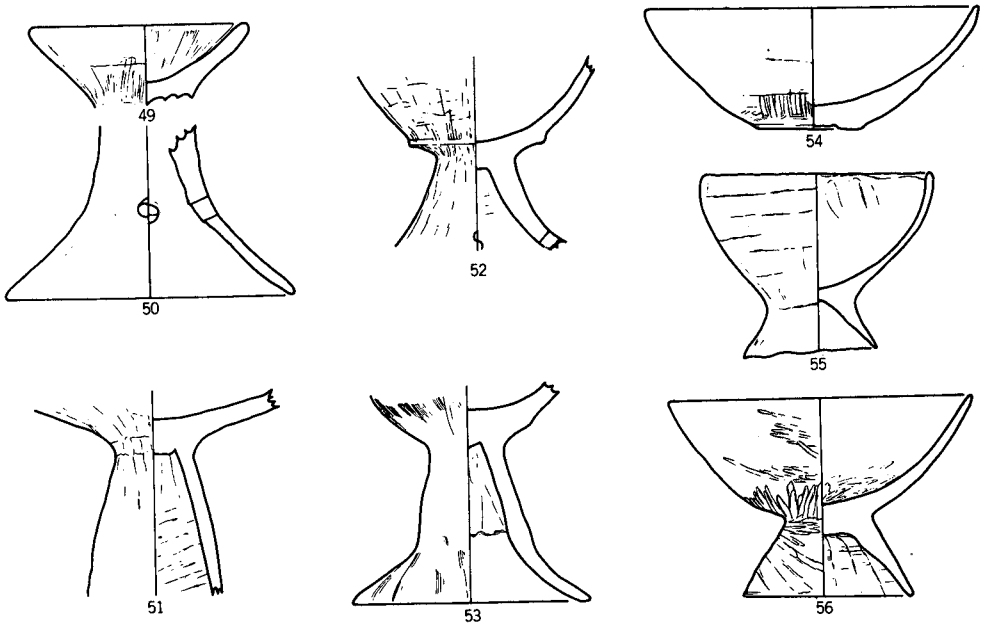
第6図　方形周溝遺構（上部）出土土器（$\frac{1}{3}$）



第７図　方形周溝遺構（上部）出土土器（$\frac{1}{3}$）



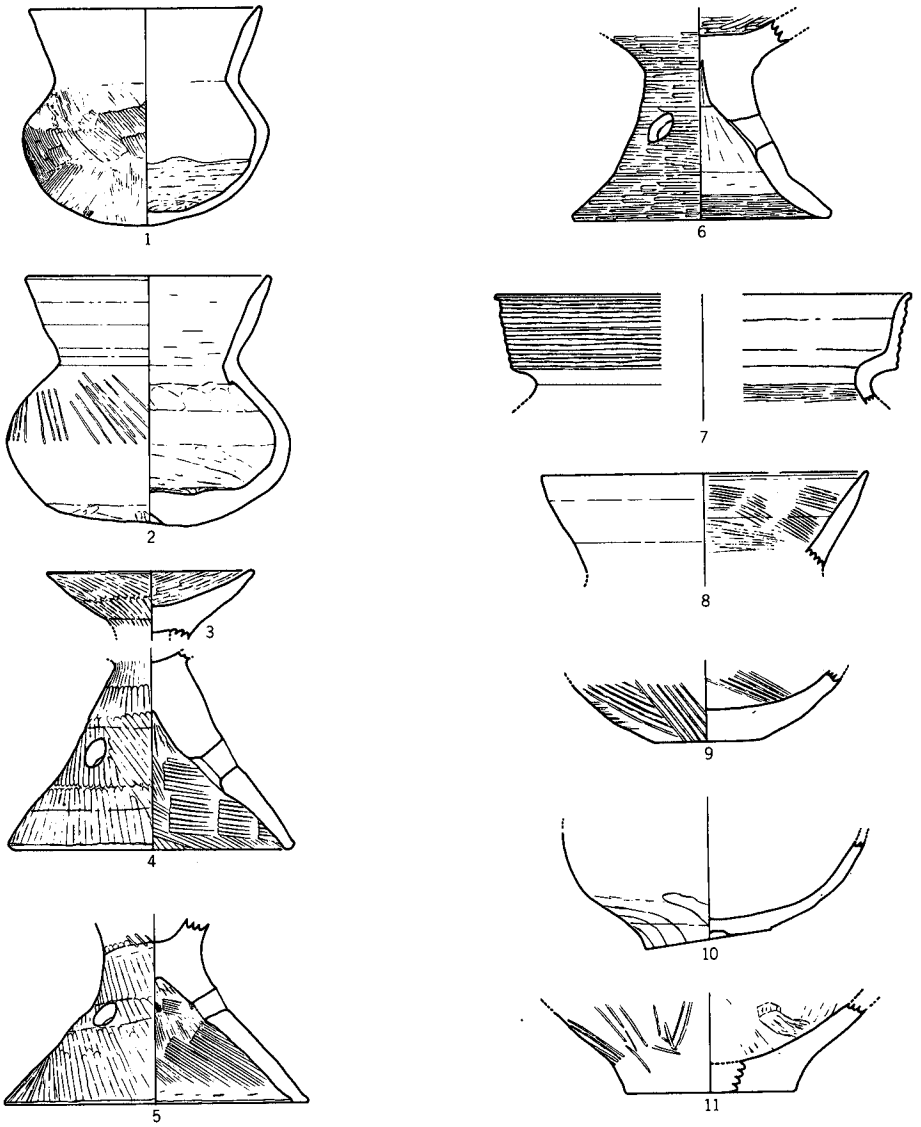
第8図　方形周溝遺構（上部）出土土器（$\frac{1}{3}$）



第9図　方形周溝遺構（上部）出土土器（$\frac{1}{3}$）

方形周溝遺構（下部）出土土器

器　種	番号	手法		色調・胎土・焼成等	その他
		口　頸　部	体　底　部		
坩 （小型丸底壺）	1	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は刷毛調整で、底部ちかくはナデを加えて一部刷毛目消える。 ・内面は上部をナデ、下部に右廻りのナデ様の削りを行っている。	淡茶褐色 胎土・焼成ともに良	口　径　9.2cm 器　高　8.7cm
坩	2	・内外面ともヨコナデ調整	・外面は上部で荒い刷毛、下部はナデ調整。なお底部は板状具によるかナデ(ナデツケ様) ・内面はナデ調整で、頸基部下に指頭による押さえ痕を留める。なお下部については荒い調整である。	淡灰褐色 胎土良好 焼成ややあまい	口　径　9.8cm 器　高　9.8cm 底部～胴中位にかけて煤の付着あり
器　台	3 ～ 4	・内外面とも篦研き	・外面は篦研きで、内面は刷毛調整である。（穿孔は３）	明茶～黄茶褐色 胎土・焼成ともに良好	口　径　8 cm 脚端径　11cm （器形については推定）
器　台	5	・不明	・外面は篦研きで、内面は刷毛調整である。（穿孔は３） ・脚端部に面取りあり。	明茶～淡黄褐色 胎土・焼成ともに良好	脚端径　12cm
器　台	6	・不明（研磨か）	・外面は篦研きで、内面はナデ調整があるが先端部に刷毛を残す。（穿孔３）	淡黄茶褐色 胎土・焼成ともに良好	脚端径　10cm
甕	7	・内外面ともヨコナデ調整で、外面に櫛状具による擬凹線（８条）を施こす。	・下部については不明であるが頸基部外面でナデ、内面に刷毛調整を留める。	淡灰茶褐色 胎土・焼成ともに良好	口径約　16.2cm
壺(坩？)	8	・外面はヨコナデで、内面は刷毛調整	・不明	淡灰茶褐色 胎土・焼成ともに良	口　径　12.8cm
底　部	9		・内外面とも荒い刷毛調整（平底）	淡茶褐色 胎土良・焼成あまい	底　径　4 cm
底　部	10		・外面はヨコナデに、一部底部よりのナデ上げあり。 ・内面はナデ調整（平底で底面刷毛目留める）	淡茶褐色 胎土に粗砂少量含む 焼成ややあまい	底　径　5 cm
底　部	11		・外面ナデ調整後に一部荒い刷毛痕を留める。 ・内面は板状具調整か。	黒褐色 胎土・焼成とも良	底　径　6.6cm



第10図　方形周溝遺構（下部）出土土器（$\frac{1}{3}$）

方形周溝遺構出土土器について

高座遺跡での発掘調査は広範な遺跡面積のうちで極く限られた範囲を、しかも線状に調査したに過ぎなく、又、出土した遺物量に比べ発見した遺構も数少ないといえる。しかし数少ない遺構のなかで、多量に遺物を包含した方形周溝遺構の性格は明らかにはなしえなかったが、出土した遺物は良好な一括資料としてとらえることができると考えている。

第５図～10図に図示した土器群は、従来より県内では発見例の少ない一時期をなしていると思われる。実測可能であった総計約66点の器種構成は、小形丸底壺(坩)・甕・高坏・壺・埦形土器・器台等で構成されるなかで、大形の坩ないし小形の壺とも考えられる23～30を除いても、小形丸底壺の占める割合は約37％で、上記のものを含めると約50％を占める。次いで高坏・甕の約17・16％、器台・埦形土器・壺・底部を合計して約17％である。しかし個体数の圧倒的に多い小形丸底壺であっても斉一化というよりはむしろバラエティに富んだ傾向にある。①胴部が球形になるもの・②算盤玉形をなすもの・③扁円形をなすものが混在し、口頸部についても㋐頸部のしまりも弱く、口縁径が胴部最大巾とほぼ同様の大きさをもつもの・㋑頸部のしまりが比較的強く、口縁径が小さくなるもの・㋒頸部のくびれが弱く、口縁部が短く直立的な傾向をなすものなど、大別すれば少なくとも３形態が存在する。調整については概して外面を刷毛調整（粗）し口縁部に横ナデ調整を加え、刷毛目を消しているものが大半である。稀に体下部に削りを施こしている１・底部に削りをもつ３・４がある。内面は、口縁部に刷毛調整後のナデ・体部に横ナデを行っているが継ぎ痕を留め、底部に指頭押圧痕を残すものが多い。又、3・6・16のように底部よりのナデ上げを行っているものもある。仕上げは粗雑である。なお胴中位～上位に穿孔(1)を行った９・16の２点もある。

甕形土器は、有段口縁の31・口唇端内面に肥厚帯をつくる32・口唇端面に面取りを行った35の他は、口唇部が先細りする“く„の字状口縁の甕で占められるが、内湾気味となるものと外反させるものがある。体部は長胴の傾向にあり、胴部中位～やや下位に最大巾をもつ。器壁の調整は外面で荒い刷毛（櫛歯様）が一般的で、内面は板状具によると想われるナデ（ナデツケ様）が顕著であり、荒い仕上げといえる。これら甕形土器大多数の外面には煤が付着しており、煮沸に用いられたことが知られる。

高坏形土器は、坏基部の稜線も弱く直線的に外反ないし外湾ぎみにのびる坏部に、ずんぐりと下ぶくれ状の脚部が急に屈折して内面に稜を有する形態となるが、脚部のふくらみ・屈折具合・脚受端部に小異も認められるが、39・45などが該期の基本的な形態ではあるまいか。調整は、坏部内外面を刷毛・ナデの併用が多く、刷毛後にナデを行ったものとナデ後に極めて部分的に刷毛を行っているものとがある。脚部についてはナデが一般的で、内面についても継ぎ痕を留めているものが多いがナデを行っている。研きがうかがえるのは45一点のみである。

器台形土器としたものは、49・下部出土とした3～6であるが、県内では未だ類例がなく定かではない。いずれも堅固な焼上りである。その他椀形土器（鉢？）としたものは、台付を含めて3点出土しているが入念な仕上げに属すといえる。なお、上部・下部とに区分した掲載を行っているのは同一の遺構あるいは遺構の性格を充分に把握しえるだけの根拠が得られなかったという点であって、例えば小型丸底壺・甕形土器をとってみればさほどの様相差は認められないが、強てあげれば下部出土の小型丸底壺1の内面胴下部～底部にかけて右廻り旋回の削りがある・甕形土器7の頸部のくびれが強く、口縁部に擬凹線を施こしている点などで若干の古相も感じられなくもない。いずれにせよ今後の検討課題としなければならないが、今回はとりあえず同一時期として考えていくことにしたい。

さて、本周溝遺構内出土土器と近縁（似）した遺物を出土した遺跡を県内で求めるならば鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡[12]・金沢市田中B遺跡・同高畠遺跡[13]などがあげられる。

北陵における土師器の編年[14]感はすでに定着化しており、殊に県内の遺跡でとらえるならば第Ⅰ様式に月影式土器、第Ⅱ様式に二ツ屋式土器、第Ⅲ様式に加賀市片山津玉作1・2・3・6号遺跡出土土器、第Ⅳ様式に金丸宮地遺跡出土土器が当てられ、その大綱に異論をみない。ただ近年発掘量の増加に伴なう多量の出土遺物をもって各様式の細分化が可能になりつつあるとともに、各様式間を充塡あるいは補強がなされつつある。

金沢市高畠遺跡で比較的顕著な出土をみた、口唇部内面に肥厚帯をつくる“く„の字口縁甕形土器（布留式類似土器）や、有段口縁基部に稜帯をつくりだす壺甕類に注目された橋本澄夫氏は、旧来「断片的ともいうべき資料しかなく、標準的なセットとして把握するには、やや資料不足」[15]であったという点で、良好なセットを構成し・顕著な形であらわれる高畠遺跡出土土器より摘出された一セットを第Ⅲ様式の標準資料とした方が妥当ではないかと提唱されている。

ここで断わっておかなければならないが、各様式の編年の問題について触れているものではなく、本遺構出土の土器と対比する観点から一部とりあげた事を断わっておきたい。

さて、ここで本遺構中の土器について考えてみれば、小型丸底壺の盛行をとってみても高畠遺跡より後出すことは明らかであろう。又、高畠遺跡で顕著な出土であった口縁内面に肥厚帯をもつ甕形土器・複合口縁の甕形土器とともにほぼその姿を消しつつあり、代って“く„の字口縁の甕が主流をなすとともに、球形にちかい胴部もあまり張らず長胴気味となる。この傾向は第Ⅳ様式とされる宮地式土器により近似している。又、高坏形土器についてみれば、高畠遺跡中でも宮地遺跡中の中膨みとなる脚部も若干存在するようであるが、概して棒状脚様の脚部が目立つことに注意したい。本遺構中のものは、中膨みとなり、脚受（脚端部）の掘折が強くなることも、宮地式土器の特徴にちかい。

しかしながら、宮地式土器の標識とされる坏基部に鋭い稜帯をもつ高坏がなく、半球形の体部

に口縁でわずかにくびれる坏形土器（埦？）・手捏土器も存在せず、又、胴上部に一孔を穿った瓿を想わせる小形丸底壺もない点、宮地式に先行する時期を想定できる。

南調査区土器溜り（第11・12図）　H13－11・12調査区には多量の土師器が出土し“土器溜り„と呼称した。これらの土器は、浅いレンズ状の凹部に推積した黒褐色土中よりほぼ一定したレベルで検出され、数ブロックのまとまりが伺えるが、そのほとんどが細片であり個体別として取り上げることができなかった。しかし少範囲に限られ、しかもほぼ同一レベルで取り上げられた点で一括資料として取扱ったが、若干の混同の可能性も予期して以下、出土した土器に若干の説明を加えていきたい。

1～7は甕形土器で、大別して4形態に分けられる。1・3は口縁端部に特徴をもち、先細りした端部を外方向え折り返したものである。1は口径14cmで、口縁部内外面は横ナデ・外面頸部下は刷毛目状調整がみられ、内面には縦方向のナデがうかがえる。3は口径約19cmで内外面はナデ調整が施こされている。2・3は有段状口縁の形態を留めるもので、2は口唇直下に強いナデを施こし、円みを持つ口唇部をやや外反ぎみに仕上げている。内外面はナデ調整で、体部外面には刷毛調整が行われている。4～6は、4に代表される“く„の字状口縁の甕で、いずれも口唇で外傾する面とりをなしている。器壁の内外面は刷毛状具で調整するが、外面口縁上部では横ナデによって消されている。内面頸部下は板状具によるナデを行っている。口径は約19cmのナデ肩の器形であろう。7は5に類縁性をもち、比較的長めの内傾する頸部より、“く„の字状に外反させた口縁部で、又、頸基部で稜線をもつ。器壁の調整は、口縁部及び頸部内外面はナデ調整であり、体部外面は刷毛状具調整・内面は板状具によるナデがうかがえる。8～14は壺形土器で、大まかに4形態に分別できる。8・9は頸部より緩く外反し、複合状口縁をなす巾広い外反する口縁帯をなすもので、9の器壁調整は内面は横ナデ・外面口縁帯では荒い刷毛状具調整後にナデを加えている。又、頸部では細かい刷毛状具調整が伺え、胎土に粗砂粒を少量含み、8は良選土を用いているが両方とも焼成はややあまい。10は頸部で強く屈折して孤状に開く口縁部をもち、口唇外面を面とりによって肥厚させた土器である。内外面ともに摩耗していて詳らかではないが、荒い刷毛状具調整であろうか。内面頸部下では指頭状の押さえがみられる。口径は8で18cm・9で17.5cm・10は15cmである。11は口径11.5cmと、小型に属する壺形土器であろう。“く„の字状に屈折した口縁部の口縁端部外面の強いナデによって受口状の口唇を作っている。内外面とも横ナデ調整で、微砂粒を少量含むが良選土を用い、赤褐色に焼き上げた土器である。12は頸基部に、篦状具の先端で刻みを付した凸帯をもつ土器で、第12図15のような口縁部がつくのではあるまいか。内外面ともナデ調整で、胎土に砂粒を多く含んでいる。13・14は“く„の字に開く、すんなりと長く延びる口縁部を持つ形態で、口唇先端が先細りする13・端部上面にナデを施こし、水平な面を作り出している14とがある。器体の調整は、内面をナデ調整し、外面刷毛状具調整後に一

部ナデを加えている。胎土には粗砂粒が目立ち、焼成はややあまい。

第12図15は外傾度が著るしく、複合口縁状の口縁端部を肥厚させた壺形土器と想われるもので、内外面ナデ調整が行われて細砂粒を少量含むが良選土が用いられている、口径19.6cmの土器である。16は高坏形土器と考えられるもので、口縁端部を嘴状に外反させ、甕形土器1・3と同手巧のものであろう。口径20cmを測り、内外面とも細かいナデ調整が施こされて、微砂粒を少量含む焼成良好な土器である。17は口径13.2cm・器高6.8cmの小型の鉢形土器であろう。器体外面には部分的に箆磨きがなされ、底部近くで刷毛状具を留めている。内面は、底部より中位までは削りを行い上部では板状具によるかナデが施こされている。胎土には砂粒を多く含み、淡茶褐色（内面は黒褐色）を呈する。18は口径8cmの坩形あるいは鉢形土器であろうか。口縁端を小さく“く„の字状に折り曲げて、わずかに口頸部を作り出している。器体の調整は、内面及び口頸部はナデ調整・体部は若干摩耗していて判然としないが刷毛状具調整後にナデを加えているようである。淡茶褐色を呈し、胎土に細砂粒を多く含んだ焼成はややあまい。小型（丸底？）壺と想われる19・20は、口径8.4cmと10cmを計り、口縁形態は、長く内湾ぎみにすんなりと延びる。器面調整は内外面とも刷毛状具後にナデを加える19と、外面に縦方向の荒い磨き・内面に横方向の磨きがみられる20とがある。21は高坏形土器であろう。外面には箆状具による磨きが施こされ、坏部内面には細いナデを行っている。22・23も高坏形土器の脚部であろうか。短くラッパ状に開く、端部には面取りが行われている。短く小さい点、壺・甕類の脚台部の可能性も考えられよう。器壁内外面はナデ調整である。なお21は赤黄茶褐色（内面は黒褐色をなし、焼上りは堅い。24は器台形土器と考えられるが、有段状の脚受部外面には4条の擬凹線が施こされ、内面は横ナデ調整である。胎土には細砂粒を含み、黄褐色をした焼成普通の品である。25～32は壺・甕類の底部である。25は底径約3.5cmで、内面は削り・外面は板状具によるかナデ調整であり底面は右廻りの削りによって上げ底となしている。26～29は底径4.8～5.8cmの、概して上底になるものが多く、胎土中に粗砂粒が目立つ。器壁調整は外面刷毛状具調整が一般的で、内面については刷毛・ナデ両者が存在する。底面よりの立上りでくびれを持たせた30は、26・28と伴に壺形土器の底部であろう。その反面、くびれ少なく立上る32は27・29などと、甕形土器底部ではあるまいか。なお、器壁調整は、内外面ナデ調整（内面は刷毛調整後？）の30・内面は板状具ナデ、外面の胴部は刷毛状具調整で底部には荒い削りによって円みをもたせた31・外面刷毛調整で、一部板状具によるナデ、内面は底部及び底基部を刷毛状具調整し、上部には板状具によるナデを行っている32がある。これら、胎土には若干の粗砂粒と砂粒を多く含んでいる。

この種の土器は金沢市古府クルビ遺跡[16]出土土器中に類似するものが存在するようであるが未報告であるため詳細については不明である。その他金沢市高畠遺跡下層出土の“く„の字口縁甕形土器の口唇で外傾する面取りを施こす一群に類似していると思われる。又、巾広い口縁帯を

なす壺・すんなりと長くのびる“く„の字口縁の壺などは、東海地方の元屋敷遺跡出土土器[17]に類縁するものではないかと考えられる。高畠式期を第Ⅲ様式期とするならば、これらの土器群を第Ⅱ様式後半頃に想定し、今後の検討資料としておきたい。

(3) 東調査区（遺構・遺物）

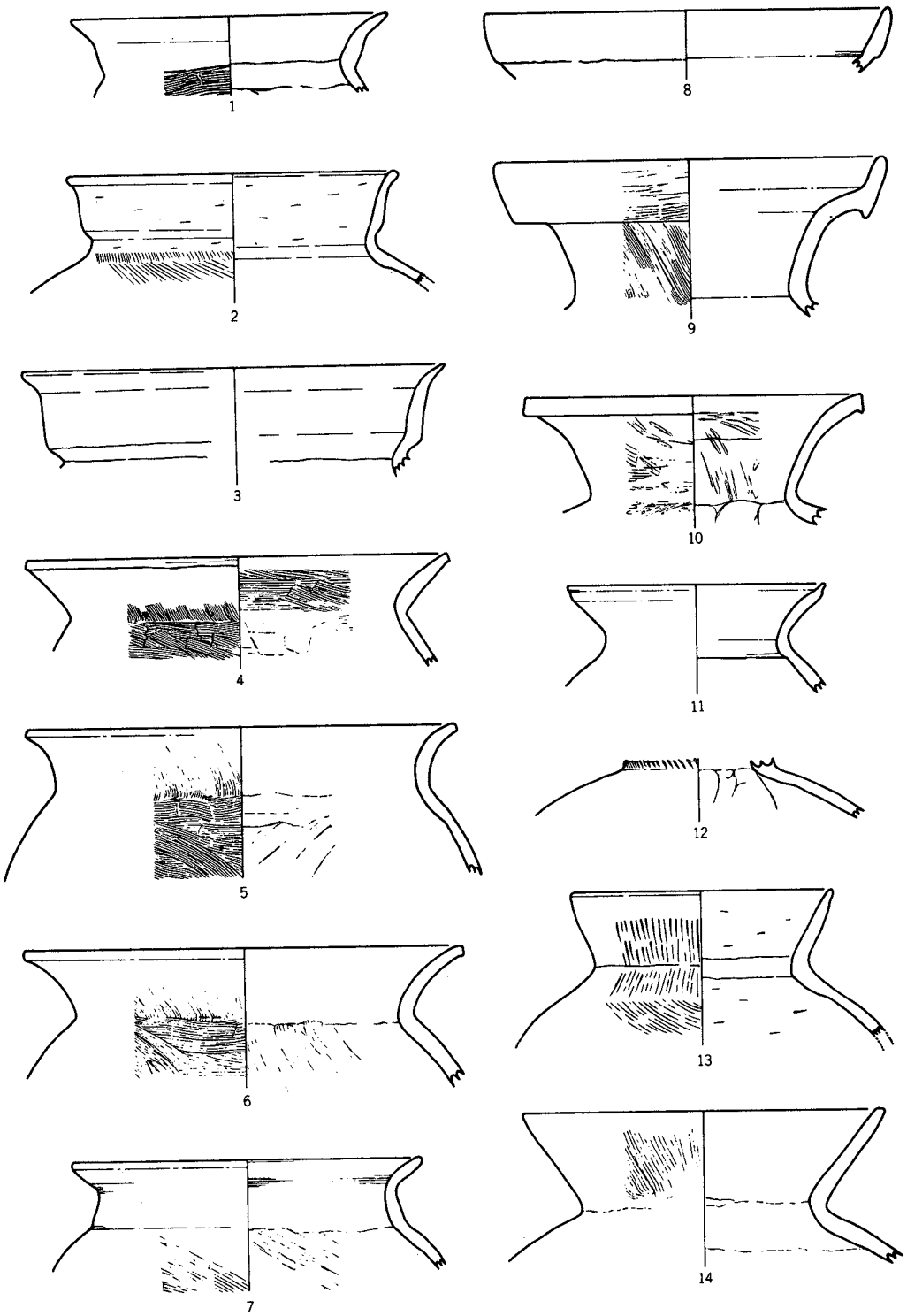
溝跡及び小ピット群（第13図）　Ｃ６－12区より古墳時代前期と考えられる巾約30cm・深さ約10cmの小溝が発見された。溝内よりの遺物はないが、肩縁に第16図34（高坏脚）があり、溝に付くものと考えている。溝内覆土は黒色土である。

Ｂ10－15区では、第３層（黒色土）より切り込んだ巾約60cm・深さ約50cmの溝が発見されている。覆土は溝底より暗灰色砂層・黄灰色粘土・暗灰色細砂・暗灰色粘質土・黒褐色強粘質土と堆積している。溝内底ちかくで須恵器細片が出土（図示不可）しており、律令期の溝と考えた。

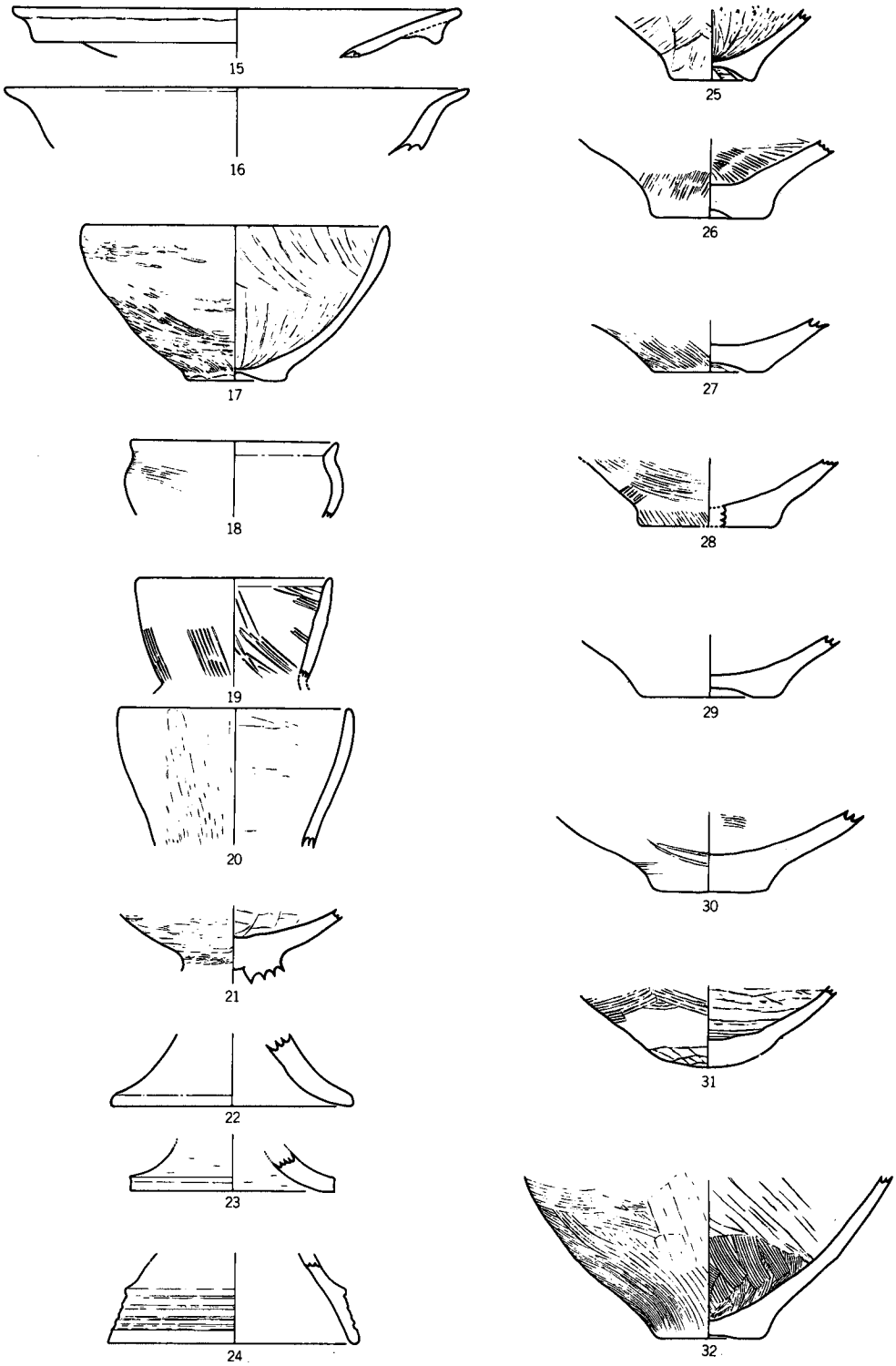
Ｃ６－11区では柱穴状小ピットが検出されているが、Ｃ６－12区溝跡検出面と同一面であり、古墳時代前期の遺構と考えたい。しかし性格については不明である。

その他、明らかに人為的な遺構であるかは詳らかでないが、Ｃ９－12区で落ち込み（南方に続く）が発見され、際には自然木及び杭（？）などが発見できた。落込み内には植物遺体（アシ状の）が多く、湿地であった事を想わせる。木材（？）といっしょに須恵器片が検出されたので律令期（平安後期頃？）と考えたい。

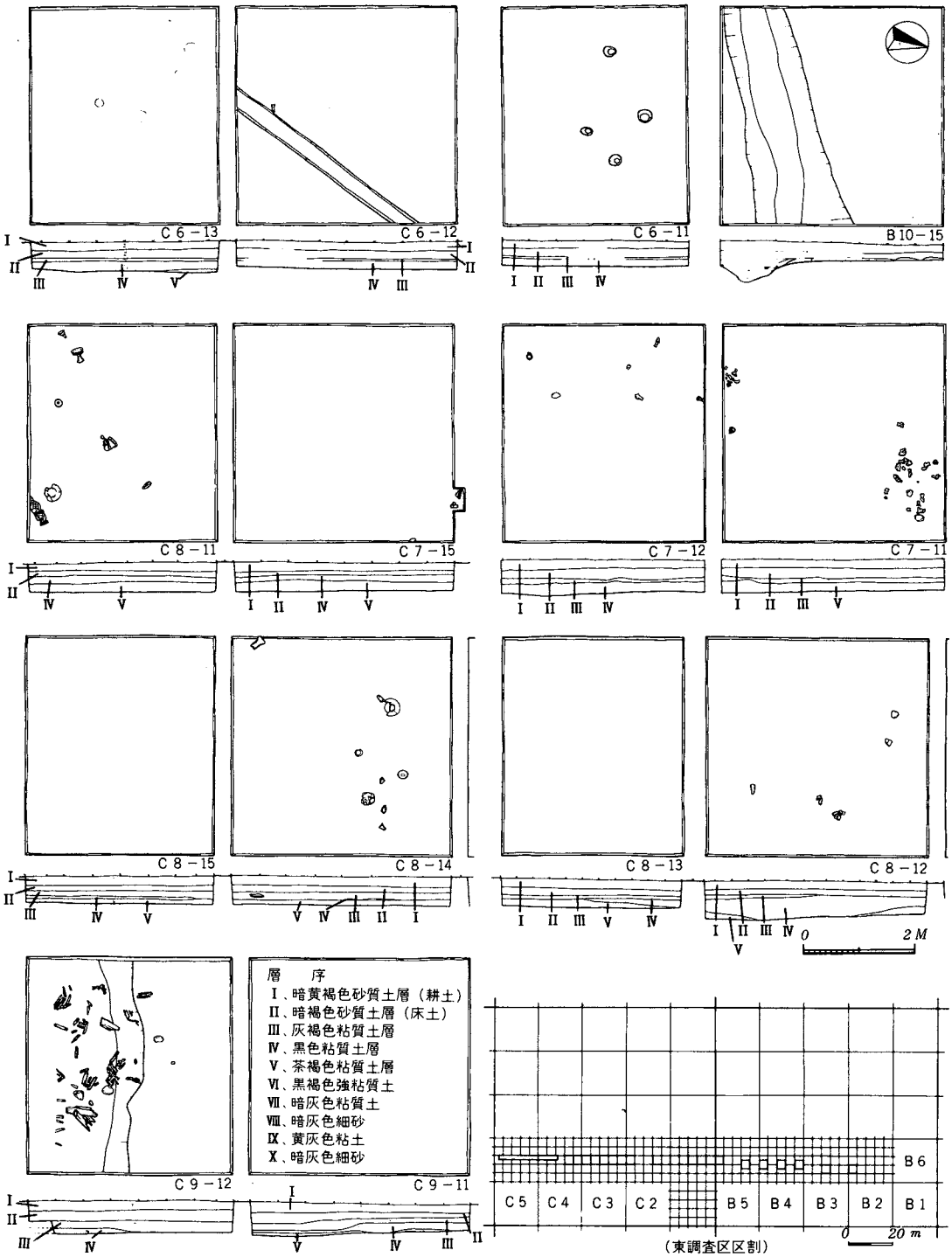
以下、遺構を発見することはできなかったが、古墳時代前期に比定できる土器が多く出土し、面として検出した遺物を中心に掲載した。



第11図　南調査区土器溜り一括（$\frac{1}{3}$）



第12図　南調査区土器溜り一括（$\frac{1}{3}$）


C 6 − 13
C 6 − 12
C 6 − 11
B 10 − 15
C 8 − 11
C 7 − 15
C 7 − 12
C 7 − 11
C 8 − 15
C 8 − 14
C 8 − 13
C 8 − 12
C 9 − 12
C 9 − 11
0
2 M
層　序
Ⅰ、暗黄褐色砂質土層（耕土）
Ⅱ、暗褐色砂質土層（床土）
Ⅲ、灰褐色粘質土層
Ⅳ、黒色粘質土層
Ⅴ、茶褐色粘質土層
Ⅵ、黒褐色強粘質土
Ⅶ、暗灰色粘質土
Ⅷ、暗灰色細砂
Ⅸ、黄灰色粘土
Ⅹ、暗灰色細砂
B 6
C 5
C 4
C 3
C 2
B 5
B 4
B 3
B 2
B 1
0
20 m
（東調査区区割）

第13図　東　調　査　区

東調査区出土土師器

器種	番号	手法		色調・胎土・焼成等	その他
		口頸部	体底部		
甕	1	・櫛状具による擬凹線文(8条)を施す。 ・内部には指頭による圧痕を残す。 ・調整は内外面ともヨコナデ	・外面不明、内面削りあり。	淡黄褐色 細砂粒及び粗砂粒少量含む。 焼成不良	口径 15.2cm
甕	2	・櫛状具による擬凹線文(8条)を施す。 ・内部には指頭による圧痕を残す。 ・調整は内外面ともヨコナデで頸部に刷毛状具調整を留める	・内面横方向への削り (黒斑あり)	淡灰黄褐色(内面に黒斑あり) 細砂粒を含む。 焼成良	口径16cm(推定) 有段口縁の段稜強い。
甕	3	・櫛状具による擬凹線文(4条)を施す。 ・内外面ともヨコナデ調整。	・内面横方向への削りあり。	淡黄褐色 細砂粒含む 焼成不良	口径 15.6cm 有段口縁の段稜弱く、直立的。
甕	4	・櫛状具による擬凹線文(5条)を施す。 ・内部に指頭による圧痕を残す ・内外面ともヨコナデ調整。	・外面は刷毛状具調整 ・内面は横方向への削り(下部については不明)頸基部で強い稜線を留める。	淡茶褐色 細砂粒を含む 焼成良	口径 16cm 鉢形土器とも考えられる
甕	5	・櫛状具による擬凹線文(6条)を施す。3条不鮮明・調 ・調整は内外面ともヨコナデであるが、内面については刷毛調整後のナデと想われる。	・外面は芝い刷毛状具によるナデ(ナデツケ様) ・内面は右下りの削り	淡茶褐色 細～砂粒を含む 焼成良好	口径 16.9cm 有段口縁の稜線弱い。
甕	6	・櫛状具による擬凹線(7条)不明瞭で一周しないものがほとんど。 ・内部に指頭圧痕をわずかに留める。 ・内外面に箆先による研磨様の調整を行っている。	・外面は刷毛状具調整。 ・内面は頸部下で削り、底部近くで箆先による研き様のナデを行っている。	淡黄褐色(器肉は黒褐色) 細砂粒を含むが良好 焼成良	口径 15cm 有段口縁の段稜やや強い。
甕	7	・箆状具によるか擬凹線(5条) ・内外面ヨコナデ調整を施す。	・不明	淡茶褐色 細砂粒及び粗砂粒若干含む 焼成不良	口径18cm(推定) 有段口縁の段稜ゆるく、直立的。
甕	8	・櫛状具による擬凹線(5条) ・内外面はヨコナデ調整。内面口縁中位に弱い稜線をもつ。	・外面刷毛状具調整。 ・内面横方向への削り。	茶褐色 砂粒を含む 焼成良好	口径径 18.2cm 有段口縁の段稜ゆるい。
甕	9	・櫛状具による擬凹線(7条) ・内外面ナデ調整で、内面に指頭圧痕を留める。	・外面ナデ? ・内面は横方向への削り。	淡褐色 砂粒を含む 焼成やや甘い	口径 19cm 有段口縁段稜強め直立的な立上りをもつ。
甕	10	・櫛状具による擬凹線(5条)を施す。 ・内外面ナデ調整で、内面に指頭圧痕を留める。	・不明	茶褐色 細砂粒に少量の粗砂粒を含む 焼成やや甘い	口径 20cm 口縁段稜強く、直立する口縁
甕	11	・櫛状具による擬凹線(7条)を施す。 ・内外面ナデ調整で、内面に指頭圧痕を留める。	・頸部下でナデ、下部については刷毛調整と想われる。 ・内面は斜位の削り調整。	口縁部は黒色・胴部淡茶褐色 少量の粗砂粒を含む 焼成良	口径 20.2cm 有段口縁の段稜強い。 スス付着

器　種	番号	手法		色調・胎土・焼成等	その他
		口　頸　部	体　底　部		
甕	12	・櫛状具による擬凹線（７条）を施す。 ・内外面ナデ、内面に指頭圧痕を留める。頸部外面には刷毛調整後のヨコナデ？。	・外面は荒い刷毛状具調整 ・内面は削り調整後に一部ナデを行っている。	淡茶褐色 粗砂粒を混入 焼成ややあまい	口　径　15.2cm 器　高　20.5cm 外面は全体的にス ス付着
甕	13	・櫛状具による擬凹線（８条）を施すが明瞭としないものが多い。 ・内外面ナデ調整で、内面に指頭による圧痕を留める。	・外面は荒い刷毛状具による調整 ・内面は底部に指頭による押圧圧を残すが、削り調整が顕著である。	黒褐色～明茶褐色 粗砂粒を混入 焼成ややあまい	口　径　18.6cm 器　高　25.7cm 頸部下よりスス付着
甕	14	・櫛状具による擬凹線（７条）を施すが、極めて不明瞭。 ・内外面はナデ調整が行われている。又、内面頸基部には箆状具によるナデが行われている。	・外面は荒い刷毛状具による。 ・内面は削り調整。	黒褐色～黄褐色 細粒を多く含む 焼成やや甘い	口　径　17.4cm 器　高　23.5cm 外面全体的にスス付着
甕	15	・櫛状具による擬凹線（８条）を施す。 ・内外面ヨコナデ調整で、内面に指頭圧痕を留める。	・外面は荒い刷毛状具調整 ・内面頸基部に刷毛状具調整を施している他は、削り調整である。	黄～灰黄褐色 細砂粒を含む 焼成良好	口　径　15cm
底　部	16		・外面は刷毛状具調整 ・内面は不明	淡褐色 粗砂粒を少量含む 焼成やや甘い	底　径　2.5cm
底　部	17		・外面は刷毛状具調整で、底面は削りを行っている。 ・内面はナデと思われる。	黒褐色 砂粒目立つ 焼成普通	底　径　4 cm
底　部	18		・外面は細かい刷毛状具調整 ・内面削り様の板状具ナデ	赤茶～茶褐色 砂粒目立つ 焼成良好	底　径　2.5cm
底　部	19		・外面は荒い刷毛調整で、底部はナデ調整 ・内面は刷毛ないし板状具のナデツケ	淡茶褐色 砂粒少量含む 焼成良好	底径　約　5 cm 壺形土器の底部？
蓋	20	（つまみ部）・内外面ナデ調整	・外面箆研き ・内面細かい刷毛状具調整	淡茶褐色 細砂粒を含む 焼成良好	つまみ部径 4.5cm （脚の可能性もあり）
蓋	21	（つまみ部）・内外面ナデ、指頭による押えを行っている。	・内外面ナデ調整で、口唇端部に面取りを行っている。	淡黄褐色 砂粒及び粗砂粒を多く含む 焼成やや甘い	つまみ部径 約 3.5cm 口縁径　12.5cm
鉢 （コップ型土器）	22	・内外面ナデを施こした後に箆状具による研きを行っている	・外面は研き調整。 ・内面中位で削り、底部で研き	淡青灰色・良選土 焼成良好	口　径　9.5cm 底　径　1.7cm 器　高　6 cm
鉢	23	・内外面ナデ調整	・外面は刷毛状具調整 ・内面は削り？	暗黄褐色 粗砂粒を含む 焼成普通	
鉢	24	・内外面ヨコナデ調整	・内外面ヨコナデ調整	淡黄褐色 粗砂粒多く含む 焼成あまい。	口　径　約14.3cm

器　種	番号	手法		色調・胎土・焼成等	その他
		坏　部	脚　部		
高　坏	25	・内外面ともに細かい篦研磨を施こし、くびれ部外面はヨコナデ	・外面は細かい篦研き。 ・内面下部に刷毛状具調整を施こし、接地部に面取りあり。	淡黄褐色 微砂粒を含むが良好 焼成やや甘い	口　径　26.5cm 器　高　17.7cm 脚端径　14cm
高　坏	26	・内外面とも篦研きか（摩耗）	・外面篦研きか（摩耗） ・内面下部はナデ調整	淡黄褐色 微砂粒を含む良好 焼成やや甘い	口　径　28.6cm 器　高18cm(推定) 脚端径　16cm
高　坏	27	・内外面とも篦研きで、くびれ部にナデ調整を残す。	・不　明	淡茶褐色 細砂粒を含む 焼成良好	口　径　28cm
高　坏	28	・内外面篦先による削り様球きくびれ部で一部ナデ調整を行っている。	・不明	淡黄～淡黄茶褐色 細砂粒を含む 焼成良好	
高　坏	29	・内外面細かい篦研き。外面坏胴位に巾約5cmの刷毛状具による施文帯を留めている。	・不明	淡赤茶褐色（外面黒斑あり） 細砂粒を含む 焼成良好	口　径　21cm くびれ部の段稜シャープ
高　坏	30	・不明	・外面篦研き（縦位） ・内面ナデ調整、脚受端部に面取りあり。	灰褐色 微砂粒を含むが良好 焼成良	脚端径　19cm 透し孔　4？
高　坏	31	・不明	・内外面横位の 胎土・焼成ともに良	明黄～茶褐色	径　23.2cm （坏部とも考えられる）
高　坏	32	・不明	・外面縦位の篦研き ・内面荒い刷毛状具調整に、一部ナデを行っている。又、脚端部に面取りあり。	灰茶褐色 胎土良好 焼成良好	径　18.5cm
高　坏	33	・不明	・外面は縦位の篦研き ・内面は脚部が縦位のナデ、脚受部が横位のナデ調整。	淡黄茶褐色 胎土は良好 焼成良好	化粧土を使用か
高　坏	34	・不明 ・	・外面は縦位の篦研き ・内面脚受部に横ナデ	淡茶褐色 微砂粒を含み・焼成普通	
高　坏	35	・不明	・外面は縦位の細い篦研き ・内面は、ナデ調整 焼成良好	灰茶褐色 微砂粒少量含む	透し孔　4？
高　坏	36	・不明	・外面は縦位の細い篦研き ・内面は篦状具による削り	茶褐色 胎土良好 焼成やや甘い	
高　坏	37	・不明	・外面は縦位の篦研き ・内面は脚受部で刷毛調整	淡灰茶褐色 胎土良好 焼成良好	
器　台	38	・内外面とも篦状具による研きで、有段状口縁外面に櫛状具による擬凹線（8条）を施こすが、不明瞭	・外面は縦位の篦研き ・内面脚部は篦削りで、脚受部は横ナデ調整。	灰青褐色 微砂粒少量含むが良好 焼成良好	口　径　20.8cm 器　高　15cm 脚端径　12.9cm 透し孔　4。
器　台	39 ～ 41	・内外面ヨコナデ調整	・脚高外面はナデ、内面上下はナデであるが、中位にはしぼり痕を留める。脚受部は内外面ナデ。	淡～茶褐色 粗砂粒目立つ 焼成やや甘い	器形については想定。

器　種	番号	手　法		色調・胎土・焼成等	そ　の　他
		坏　部	脚　部		
器　台	42	・内外面とも篦状具研磨で、内面くびれ部で指頭押圧痕を留める。	・不明	淡黄茶褐色 砂粒を少量含む 焼成やや甘い	口　径　28.6cm
器　台	43	・内外面とも細かい篦研磨	・不明	灰褐色 胎土良 焼成良	口　径　27.6cm （高坏の可能性あり）
器　台	44	・内外面とも細かい篦研磨	・不明	灰黄色 胎土・焼成良	口径27.6cm（推定） （高坏の可能性あり）
器　台	45	・内外面とも篦研磨	・不明	淡褐色 胎土良 焼成やや甘い	表面摩耗
器　台	46	・不明	・脚部外面は細かい篦研きで、内面は上部で研きの他刷毛を留める。 ・有段の脚受部外面には篦研きで、篦先による沈線（6条）と櫛歯状具による刺突文を施こしている。 ・内面はナデ調整である。	淡黄灰色 微砂を含むが緻密 焼成良好	穿孔　4
器　台	47	・不明	・脚外面は研き。内面はシボリ痕を留めるが、ナデ調整あり ・脚受部は外面研きで、篦状具による沈線と櫛歯状具による刺突文を施こす。内面は一部刷毛痕を残すが、ヨコナデ調整を行っている。	赤茶褐色 微砂粒多く含む 焼成良好	穿　孔　3
器　台	48	・不明	・脚外面は研き。内面はナデ調整。 ・脚受部は外面研きを行った後篦状具による沈線（4条）と刻み（2列）を施している。内面はヨコナデ調整である。	淡褐色～淡黄褐色 微砂粒少量含み、良好 焼成堅固	穿　孔　4
器　台	49	・不明	・脚受部外面研き。 ・内面はヨコナデ調整である。	淡黄褐色 胎土・焼成ともに良好	高坏脚部の可能性もあり。
器　台	50	・不明	・肥厚させた端面に篦状具による刻みあり。外面にナデ、内面に研き。	淡黄褐色 胎土・焼成ともに良好	天地逆　？

第14図～17図が東調査区古墳時代前期と考えられる面より出土した土器群で、月影式土器に比定されよう。甕形土器は複合口縁で占められ、口縁外面には不鮮明なものを含め概して擬凹線文を施こし、内面には指頭押圧痕を留めるものが多い。又、体部は卵形をなして小さな底部となっている。高坏形土器では、円みをもつ坏部が中位でくびれて大きく外反して延びる形態で占められ、金沢市下安原海岸遺跡[18]・富山県中山南遺跡[19]・福井県原目山遺跡[20]等で類例がある。器台形土器は4形態程存在するようで、外面は細かい箆研きの優品が多い。脚受部が段稜をなす脚台の46～48には箆描き沈線をめぐらし、櫛歯状具先端で刺突する46・47と刻みを行った48などは、高坏形土器とともに特徴ある形態であろう。

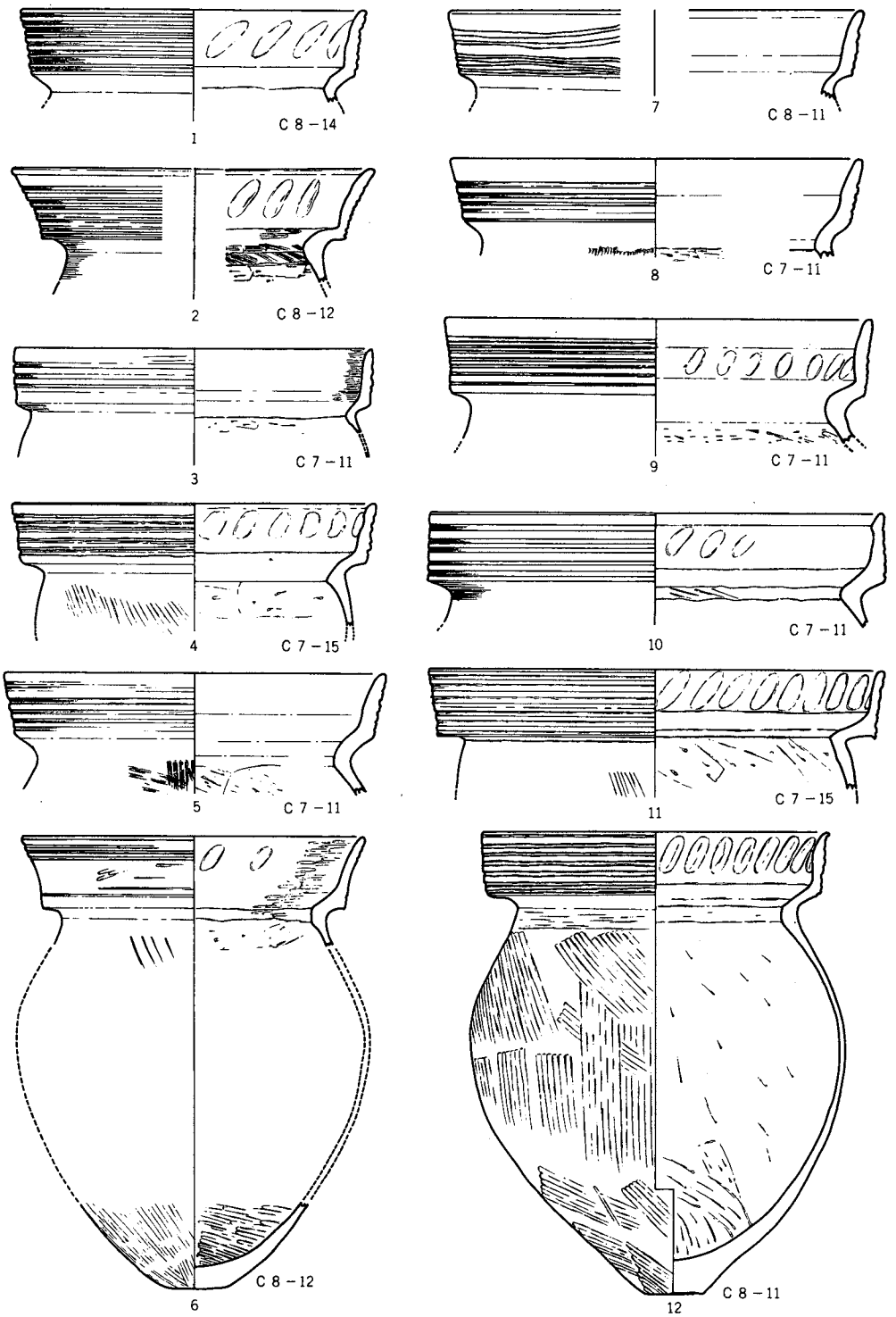
井戸跡（第18図・図版11）　旧耕地整理（大正末期～昭和初期頃）で用排水路の掘削をしていた折に発見されたもので、その際に曲物（井筒と考えられる）が1点掘り出されていたものであった。上部構造については不明であるが、下部での遺存状態は良好である。

径約80cm・現存長約100cm・厚さ約2cmの刳抜製井側で、内部に径約60cmの曲物製井筒を使用している。井筒は巾約58cm・厚さ約0.3cmの板の内面に切り目を入れ、サクラの表皮でとじている。遺存していたのは一段のみであるが、掘り方面より考慮すれば抜き取られたのは一段のみで、旧来は二段重ねであったろう。底面には特殊な施設は発見できなかったが自然礫層に至っており、自然浄化湧水が得られたものと想われる。なお現在も湧水が豊かで、自然の状態を充分生かした場所及び構築ではなかったろうか。

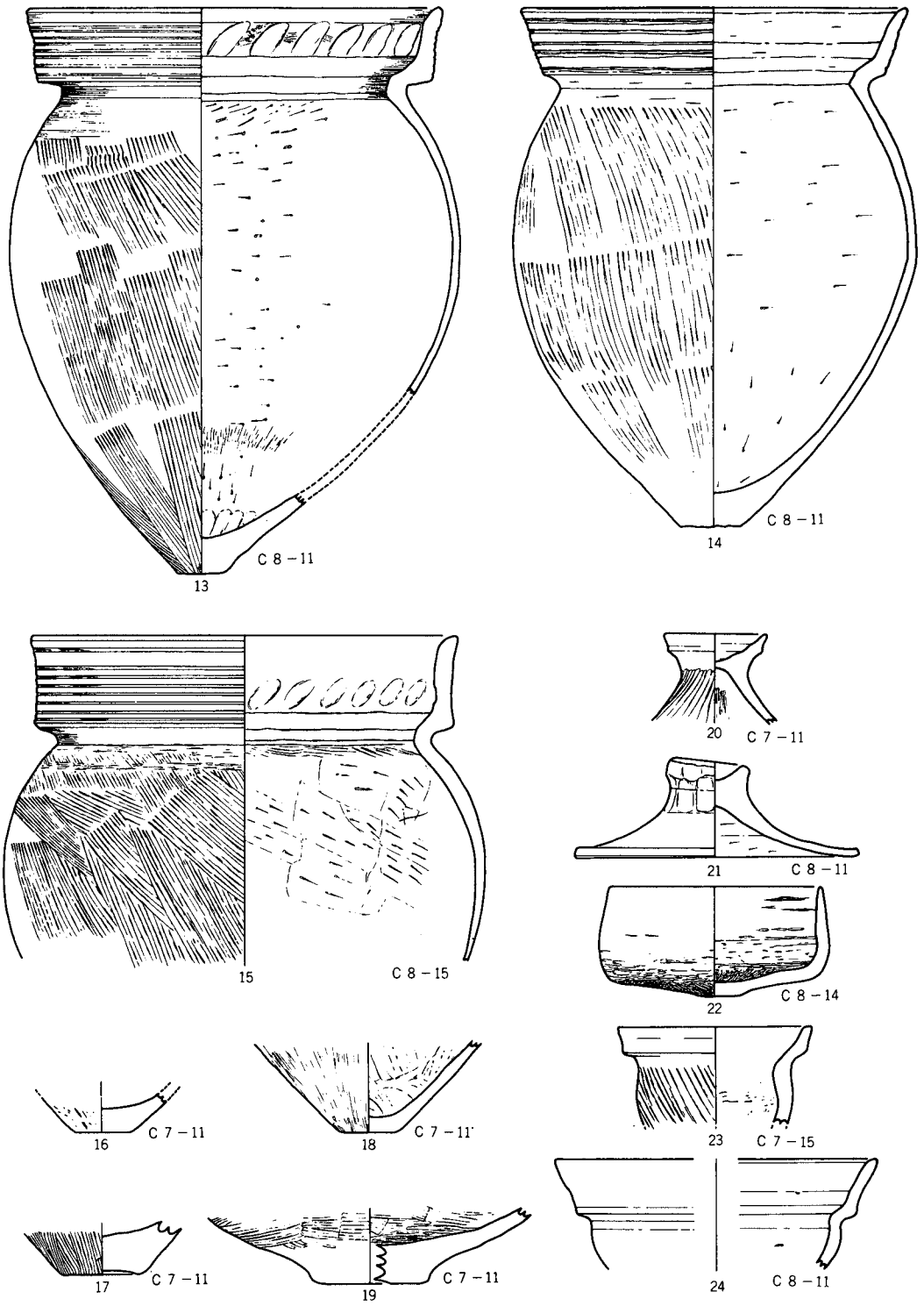
井戸内部の覆土状態は湧水に阻まれ詳らかになしえなかったが、植物遺体を内包した暗灰色粘質土で占められていたと観察している。出土遺物は、土師質土器・漆器椀・櫛・箸状木器・杓文字・種子等が出土した。

第19図がその出土遺物である。1～5が土師質土器で、口径8cm～約11cmを測る。器形的には3形態存在するが、いずれも手捏ねにより薄手に仕上げており、内外面はナデ調整を行っているが、底部外面に指頭押圧痕を留めるものが多い。色調は乳赤褐色～乳茶褐色を呈し、胎土は良選土を用いているが焼成はややあまい。6～13は箸状木器（杉材？）で、荒い削痕を留めて両先端を先細りにしている。長いものは23cmで、その他一般的には20cm前後のものである。図示したものは8点のみであるが、欠損品を含めると約40本分の出土がある。なお13の先端には焦げた痕跡がある。14は漆器椀で、黒漆地に秋草（？）の朱文様を描いている。約0.4cmと薄手で、大ぶりのものとなろう。底径は7.2cmとなる。15は櫛と思われるが、櫛歯間隔が約0.5mm（吸水による膨張によるか）と細かい。16は杓文字で、工具痕を留めている。柄先端には焦けた痕がうかがえる。

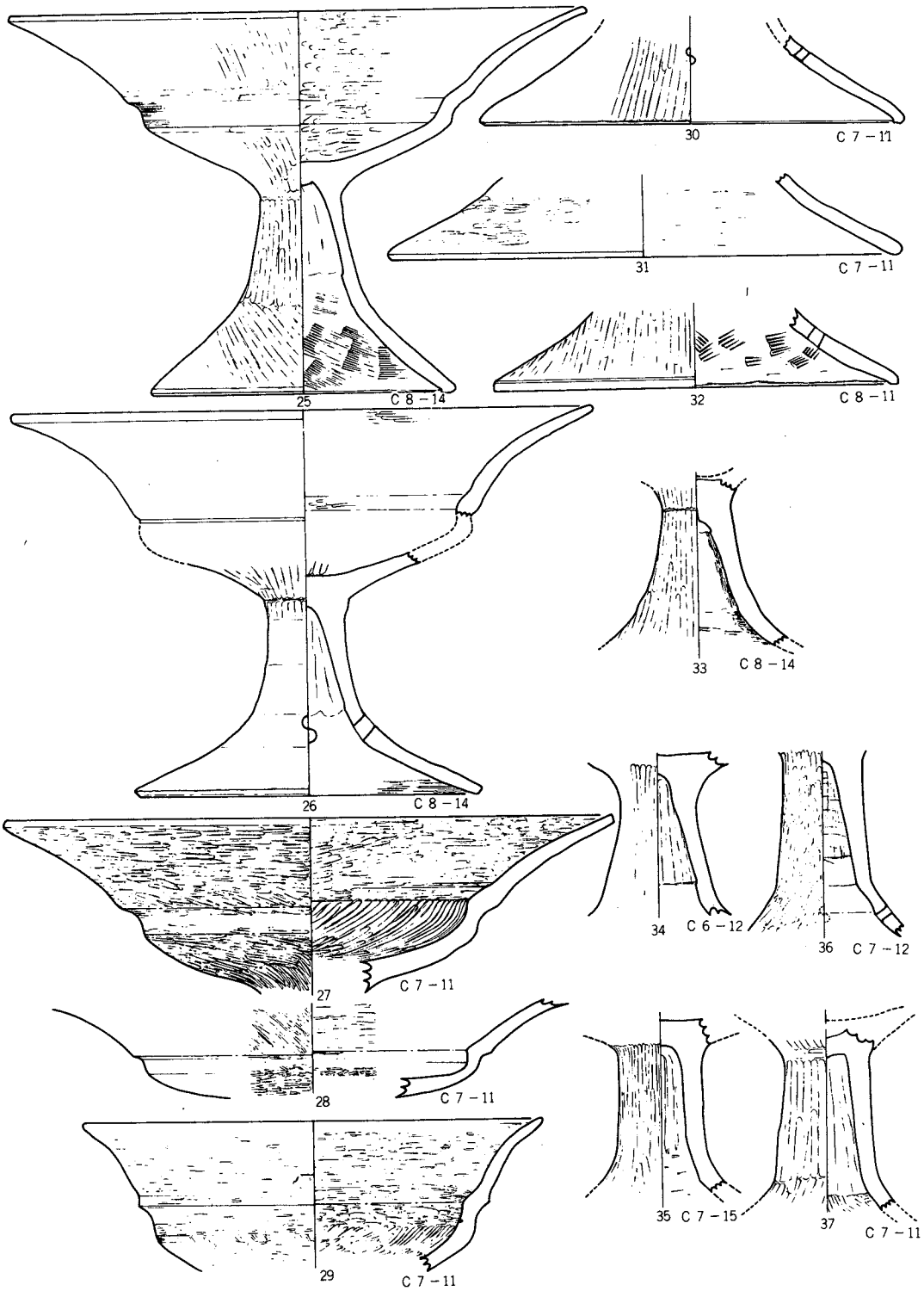
その他の出土遺物（第20・21図）　各調査区の遺物包含層中より出土した遺物で、縄文・平安・中世頃の遺物をとりあげてかかげた。いずれも断片的な出土であり、各該期の遺跡の状況を把



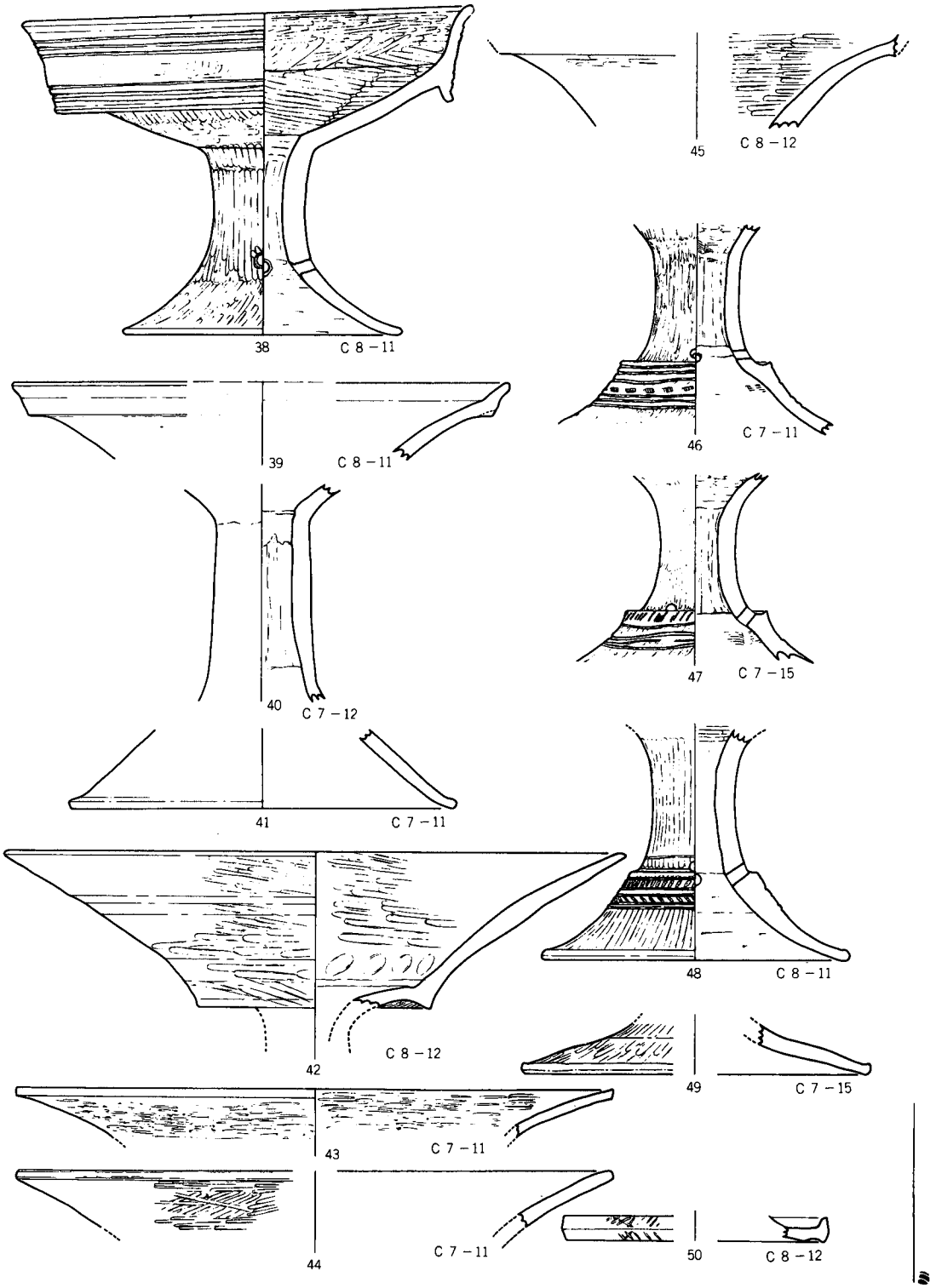
第14図　東調査区出土土器（$\frac{1}{3}$）



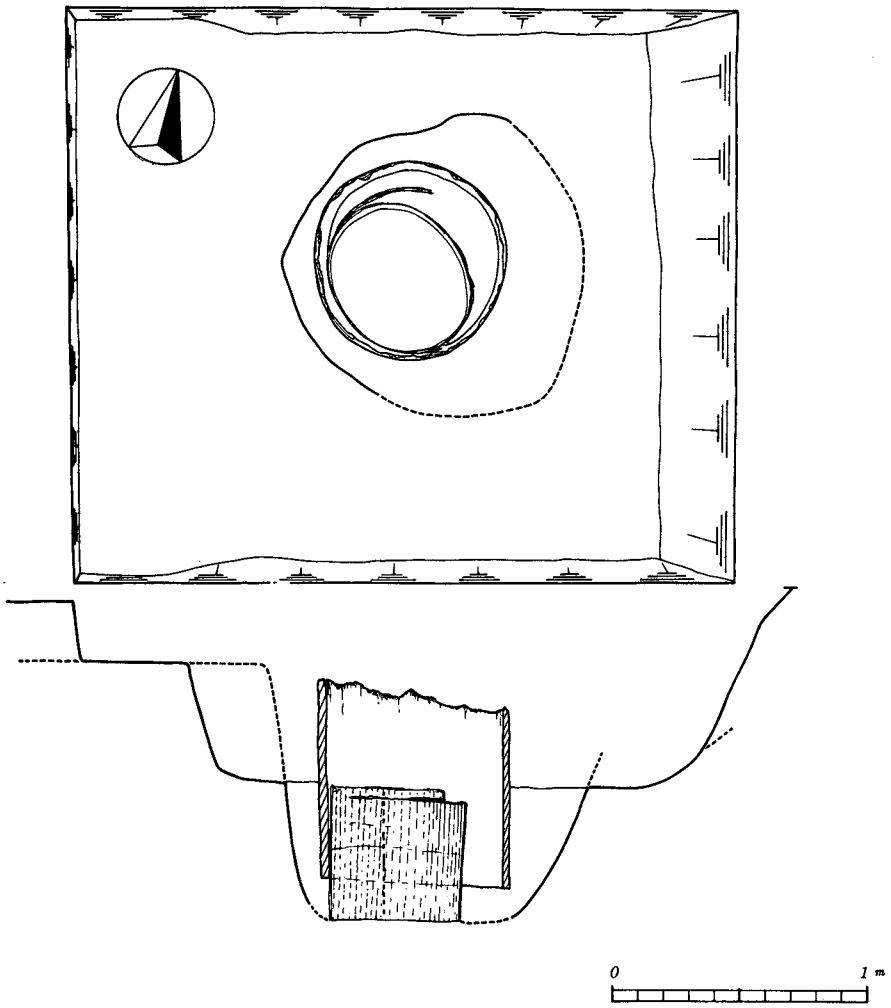
第15図　東調査区出土土器（$\frac{1}{3}$）



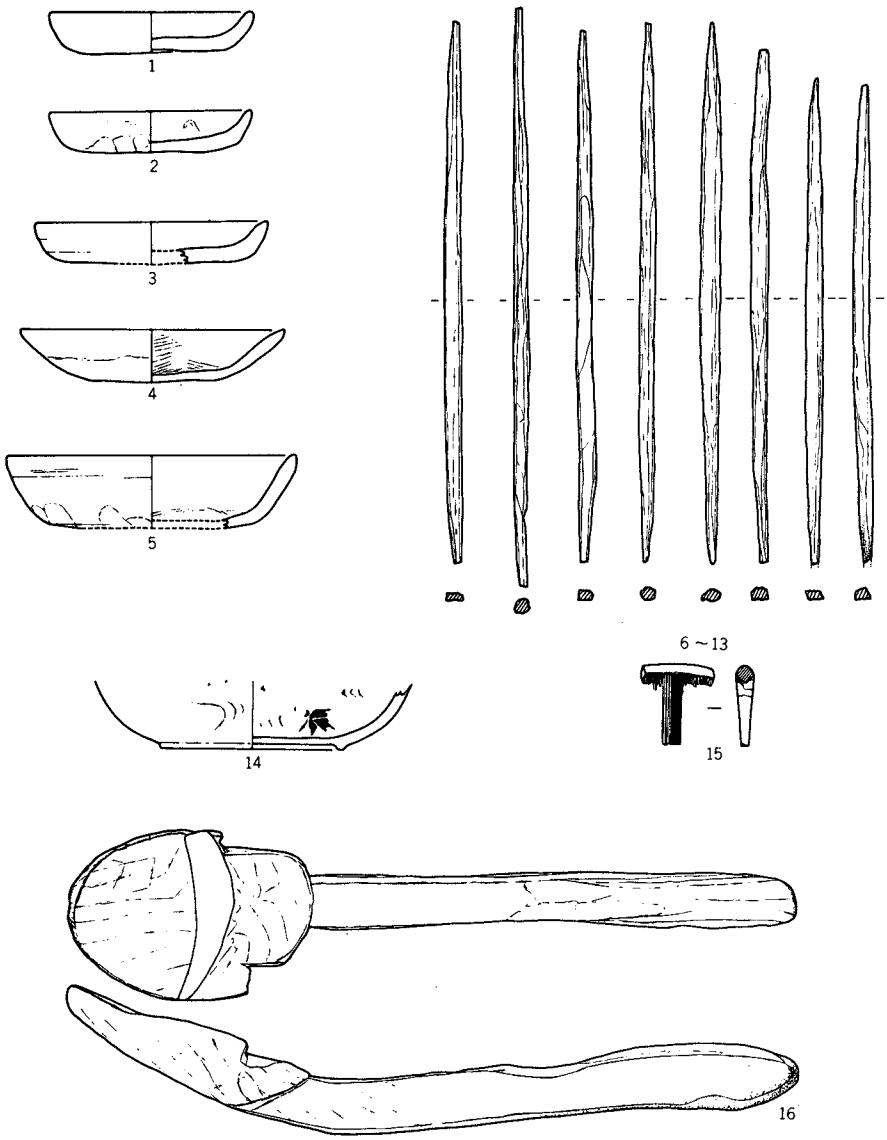
第16図　東調査区出土土器（$\frac{1}{3}$）



第17図　東調査区出土土器（$\frac{1}{3}$）



第18図　井　　戸　　跡（$\frac{1}{3}$）



第19図　井戸跡内出土遺物（$\frac{1}{3}$）　1～5（土師質土器）、6～13（ハシ状木器）14（漆器椀）、15（櫛）、16（杓文字）

握してはいない。しかし、広範な遺跡（遺物包含地）の中にほぼ連綿として生活の足跡をうかがわせる資料として一応の成果としておきたい。

第20図１～８は縄文式土器で、半截竹管による半隆起線文に刺突を施こす中期中葉のものから、縄文地文に凹線文を描く後期臭のもの、条痕を施こした粗製の土器は晩期の所産と考えられるものまで含まれている。

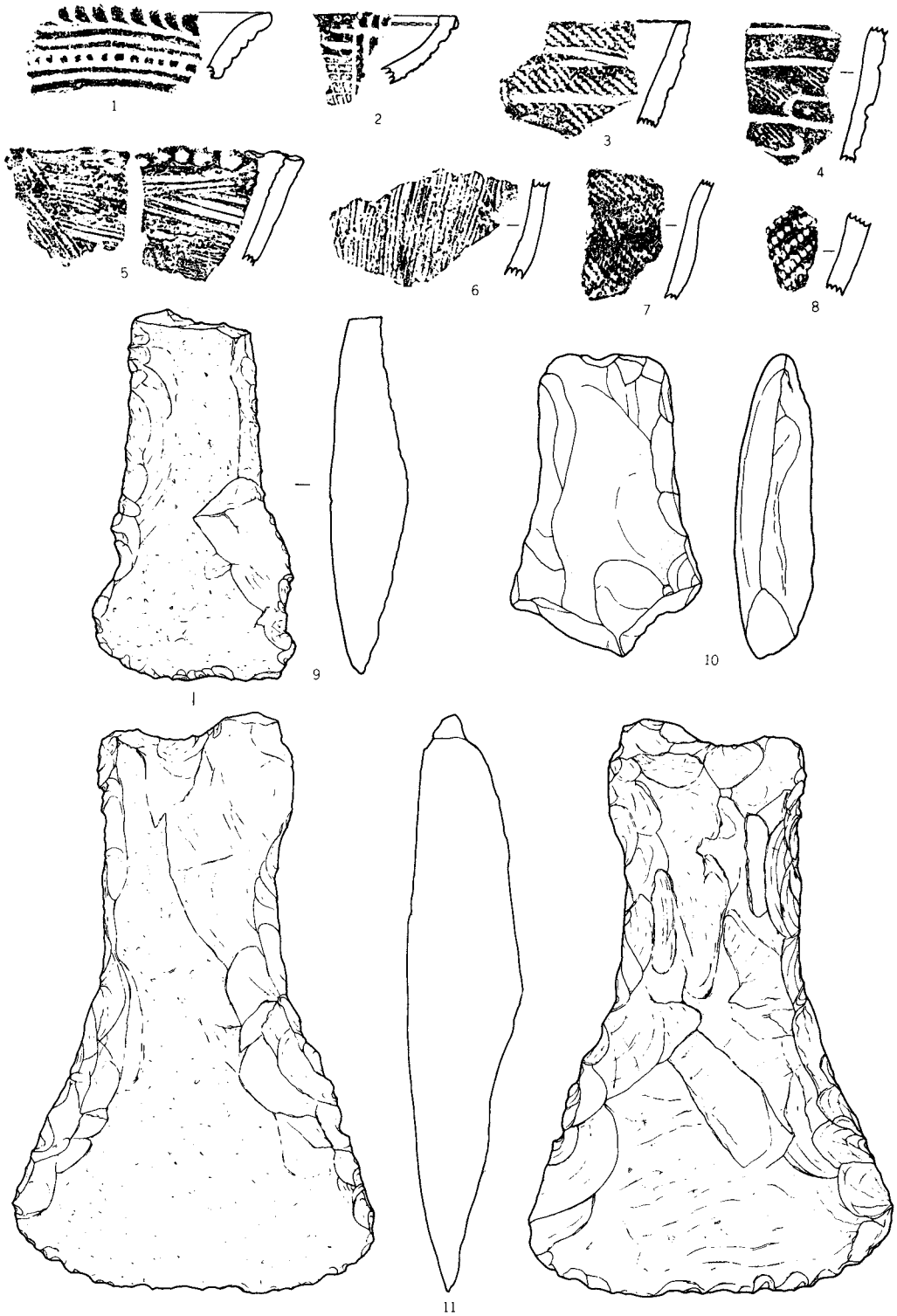
９～11は大型の打製石斧で、11は極めて大柄のものといえよう。最大長26cm・最大巾16.2cm外表面に一部自然面を残す角礫凝灰岩製で、全体に荒い打ち欠きを行って撥形に作り上げている。この種の大形石斧は石鍬としての用途機能が考えられる。しかも出土層位でとらえるならば、東調査区月影式土器群層位中より出土している点、金沢市下安原海岸遺跡出土例[21]・及び松任市宮永遺跡出土例[22]より加味すれば、月影期にも一部残存すると考えたい。このことは該期における鉄器の普及等の問題からも、今後留意せねばならぬ問題ではなかろうか。

2. その他の出土遺物（律令期以降）

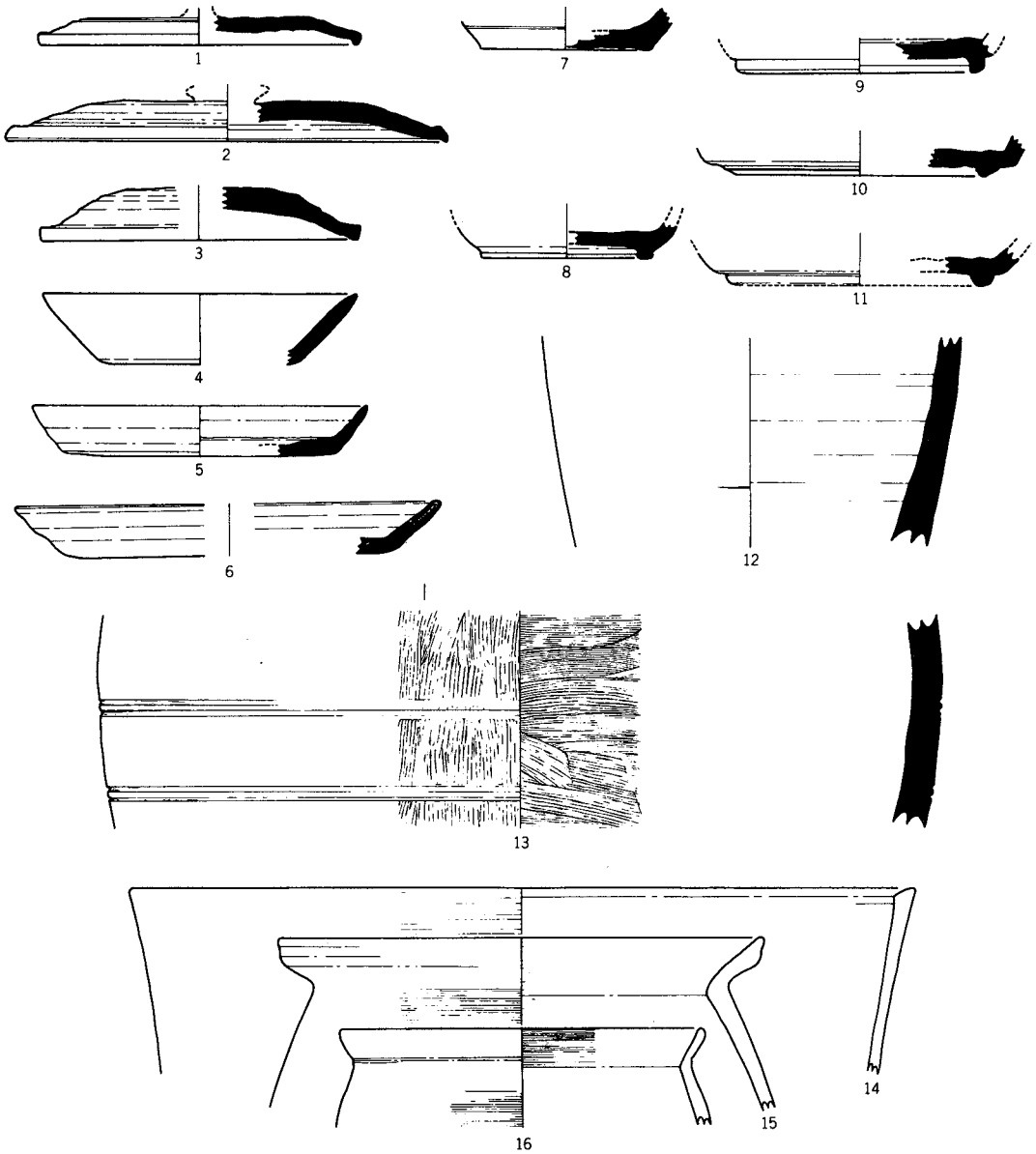
須恵器（第21図１～13）　原形を知り得るものは無く、すべて破片である。１～３は蓋で、１は口径13.1cm、現存高1.1cmで天井部に広い平垣面をもつ。口縁端部は円みをもち、小さく下方へ折り返している。天井部平担面は箆削りを行っているが荒い。色調は淡灰色で焼成良。胎土には粗砂粒若干含むが良好といえる。２は口径18cm・現存高1.6cmで平担な天井部をもつ。口縁端は嘴状に作られている。内外面ともヨコナデ調整を施こしている。色調は明淡灰色で胎土も良く、焼成堅緻である。３は口径13cm・現存高2.1cmで円みをもつ形態となろう。口縁端部は肥厚させているが、ほとんど返しを作っていない。内外面ともヨコナデ調整であるが外面には凹凸を留めている。色調は淡灰色で胎土焼成ともに良好である。

４～11は坏及び盤で、台付の大型のものは盤となろうか。４は口径12.8cm・器高３cmの内外面とも丁寧なヨコナデ調整を行っている。暗灰色で胎土・焼成とも良。５は口径13.4cm・器高2.1cmで、底部より先細りする立上りをもつ。内外面ともヨコナデで凹凸を留めている。色調は青灰色で胎土・焼成ともに良好である。６は器高2.1cm・推定口径17.4cmの底部から体部にかけてヨコナデによって円みをもつ仕上げである。淡灰色で焼成は良く、胎土も緻密である。７は底径７cmで回転糸切底を留めている。胎土に細砂粒を含み、黄褐色をした焼成のあまいものである。８～11は、ほぼ垂直に付けた高台をもち、丁寧な８・９と比較的粗な10・11とがあり、概して低い高台である。内外面ともナデ調整が施こされ、胎土・焼成とも良い。

12は瓶の胴下部と考えられる。内外面ともヨコナデ調整が行われており、外面に一部自然釉が認められる。色調は暗灰褐色で、胎土に微砂粒を含むが良質で焼成も良好である。13は胴部最大巾37cmと大型のものとなるが器形については不明である。外面に先端の巾広い櫛状の刷毛調整を



第20図　その他の出土遺物Ⅰ（$\frac{1}{3}$）



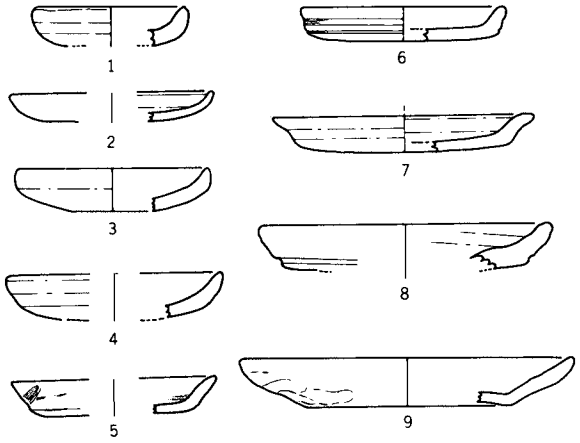
第21図　各調査区出土（律令期）土器（$\frac{1}{3}$）

行っており、横走の２条の沈線を二段に配している。内面には腰の強い刷毛調整を行っている。色調は灰褐色で、胎土に砂粒及び少量の粗砂粒を含み、焼成は良好である。

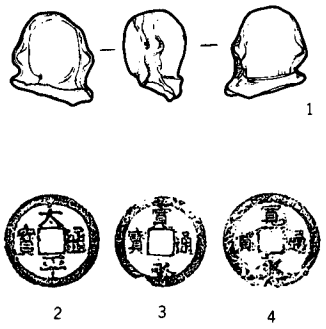
土師器（第21図14～16）　14～16は土師器であり，14は口径32cmの鉢形土器であろうか。内面はナデで外面はカキ目調整を行っている。15・16は甕で、口径20cm・15cmで、くの字状に折り曲げた口縁部の端部をナデによって円みをもたせている。内外面ともカキ目調整がみられる。いずれも黄茶褐色を呈し、粗砂粒を若干含んだ焼成良好のものである。

第22図１～９は土師質の皿形土器で、口径６～８cmの小型のものと10～13cmの大型の２種に大別され、器高は1.5cm～２cmと浅いもので占められる。器肉は比較的薄手のものが多く、調整は内外面ともナデ調整が行なわれている。胎土は緻密で良選土を用いているようであるが焼成は概してあまい。

第23図２は北宋銭の「太平通宝」（976～983年鋳造）であるが、１の仏像頭部片（土製）と同一層（第２層上部）より出土している。層序的には中世期に相当すると考えられるが、渡来銭の使用が近世初頭頃まで使用されているとすれば、仏頭片の年代下限を中世末ないし近世初頭としておきたい。３・４は「寛永通宝」である。



第22図　土師質土器（$\frac{1}{3}$）



第23図　仏像片・古銭（$\frac{1}{2}$）

V まとめ

1. 辰口町高座遺跡は手取扇状地の扇側地域にあたり、しかも谷口部より穏やかに連なる能美低丘陵縁辺とその前面に点在する独立小丘に囲繞された沖積地に立地しており、手取川の影響（洪水）も比較的少なかったことは想定されているところである[23]が、縄文時代中期前葉（新崎式）の土器が採取[24]されており本遺跡でも中期中葉(古府式)・及び中期前葉ないし中期末葉頃かとも考えられる（新崎式か称名寺式？）土器片が採取され、遺跡の範囲については不明であるが沖積地での生活も一部想定されよう。なお上記の徳久遺跡は本遺跡の東約500 mの位置に当り、同一遺跡である可能性も考えておきたい。

2. 今回の調査で発見された土器の多くは古墳時代前期・中期の土師器である。しかし遺構及び遺構に伴って発見されたものは数少なく、東側調査区での約20～30cmの同一包含層出土の土器は、ほぼ面に伴なうものとそれ以外のものとに区分して取り上げたが、様相差が認められないので一括して取扱った。この一群は北陸地方土師器第Ⅰ様式(月影式)[24]に比定されるもので、殊に堅緻で入念に調整された高坏形土器・器台形土器に特徴が伺え、湾曲した坏底面より中位で小屈して大きく外反させた口縁部を有するこのタイプは県内でも相対的に少ない形といえる。七尾市津向大杉崎遺跡[26]・金沢市安原海岸遺跡[27]・同塚崎遺跡[28]・富山県中山南遺跡[29]等で若干求めることができるが、福井県原目山遺跡[30]では主体をなしているようで興味深い。本調査では遺跡の性格・土器組成（構成）等、充分に掌握しえていないので時間・地域・用途機能によるものか判然としない。

3. 方形周溝遺構内より検出した土器群は、土師器第Ⅲ様式[31]（片山津玉作１～３・６号住）と第Ⅳ様式[32]（宮地式）の間隙に埋まる時期に比定されよう。いま、県内で本遺構内出土土器に最も近似した土器としては金丸宮地遺跡出土土器（第Ⅳ様式）となる。宮地遺跡では小形丸底壺が増加し、器台がほとんど消滅する。これに代って坏部にシャープな稜線をもつ高坏・頸部でわづかに外反する半球形の坏・小形手捏土器・瓢形土器（？）の出現などにより、畿内及び周辺地域の遺跡との比較検討によって大阪府布施市小若江南遺跡・同府船橋遺跡Ｏ－ⅡないしⅢ群・岡山県笠岡市高島王泊遺跡第四層期などに比定されているもので[33]、本遺構出土土器とに若干の様相差が認められる。しかし、小型丸底壺の増加・小形器代に代って脚部が中脹らみの、高坏が増加する傾向は同様であり、又、小形丸底壺に穿孔を施すものが出現しており、近接した時期に当ると考えられる。畿内地方の大阪府布施市小若江北遺跡[34]にやや後出的とされる同府船橋遺跡ＯⅠ期[35]に比定し、岡山県笠岡市王泊第四層[36]・鳥取県青木遺跡Ⅷ期新[37]・南関東における古式土師器第Ⅵ期[38]にそれぞれ比定できるのではあるまいか。

3.　律令期の遺物と考えられる第21図の土器は遺跡地の東側より出土しており、古墳時代土師器の出土区とほぼ合致しているようであり、未調査区の徳久・荒屋部落（東方向）方向になお延びているものと想われる。集落を営なむ立地的条件を匂わせているが、中世期に属すると考えられる第22図の土師質皿（その他中世陶器小片もいくつか認められている）が西側に広く分布しており、井戸跡の存在とともに土地と集落の変遷の一端を伺わせている。律令期の土器は、金沢市末古窯跡ＳＴ－02期[39]（８世紀中葉頃）～輪島市洲衛１号窯式期[40]ないしは若干後出のものが存在している。中世期に属すと考えられる土師質皿は井戸跡内出土のものと類似した手法及び器形を示す。近年、土師質土器については広島県草戸千軒遺跡で編年案[41]が提示されているが、地域的様相差が伺え、井戸跡出土の漆器椀・木器等とともになお今後の検討資料としておきたい。

4.　報告を終了するに当り、本遺跡で残された未解決の問題は数多い。断片的ではあるが、縄文時代中期に遡のぼれる資料が確認できたが、丘陵上に営なまれている該期の遺跡との関連はどのようであったのか。又、遺跡を取り囲む周辺丘陵には３世紀末頃～７世紀に亘る古墳群が存在し、それらの古墳群を造築・関連していった一遺跡と目されるが、規模・構造・性格等その具体像はほとんど明らかにできなかったし、律令期・中世期の遺物も発見されたがその変遷過程についても不明瞭のままとなった。その他、大形打製石鍬が月景期にも一部使用された可能性が存在し、鉄器の普及との関連の問題・刳り貫き制井側、曲物、その他の木器などに具現された中世期における木器製作工人の存在が予想されるし、又、井戸跡内出土箸状木器についてみれば、先端が焦げた痕跡を留めるものがあると伴に、井戸内より出土した遺物は主に食器類で占められていることから、多量に出土した箸状木器は箸として考えられるのではなかろうか。

最後に、発掘調査に当っては辰口町高座・徳久・荒屋・寺井町秋常より多くの方々より御協力を頂き、又、調査終了後も地元にあって何かと御便宜を頂いた山岸きよ氏・中田宏子氏、報告書執筆に当っては石川考古学研究会員の多くの方々より助言を頂いた。記して感謝申し上げます。

参　考　文　献

註(1)　斉藤外二「手取扇状地の地形構造と堆積に関する一考察」金沢女子短期大学学葉１　昭和34年。

(2)　吉岡康暢『能美古墳群調査概要』石川考古学研究会　昭和43年。　この時点で汎称される“能美古墳群”ににについては、群及び支群を構成する古墳の相互関係が比較的明らかな、寺井山・和田山・末寺山・西山・茶臼山に所在する古墳群についてである。

(3)　金沢大学考古学研究会『辰口町湯屋古窯（仮称）寺井町和田山下遺跡（仮称）調査略報』　昭和53年。

(4)　平口哲夫・吉岡康暢「石川県灯台笹遺跡の調査」石川考古学研究会々誌第14号　昭和46年。

(5)　昭和51・52年に調査され、縄文時代中期の古府式期を中心とする住居跡７・炉跡２が発見されている。『莇生遺跡』（辰口町教委近刊予定）を参照された。

(6)　高橋　裕『辰口町来丸サクラマチ古窯』石川県教育委員会　昭和50年。

(7)　昭和51年に15基調査され、５Ｃ末～６Ｃ初頭頃に集約されるという――西野秀和氏（石川考古学研究会幹事）の教示による。

(8) 吉岡康暢「第四章第二節　奈良平安期の土器編年」加賀三浦遺跡の研究　昭和42年　石川県・松任市教育委員会　。

(9) 『南禅寺文書』。戸田芳美『日本領主制成立史の研究』・三浦圭一「中世後期の商品流通と領主階級」日本史研究65。

(10) 小松市教育委員会『小松市史』参照　昭和40年。

(11) 吉岡康暢『能美古墳群調査概要』石川考古学研究会　昭和43年。

(12) 吉岡康暢・橋本澄夫「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器」石川考古学研究会々誌第９号　昭和40年。

(13) 橋本澄夫『金沢市高畠遺跡』金沢市教育委員会　昭和50年。

(14) 吉岡康暢「北陸における土師器の編年」月刊考古学ジャーナル　第６号　昭和42年。

(15) 注13。Ｐ39ℓ５～６

(16) 北陸自動車道関係で調査されており報告書は近刊の予定である。

(17) 澄田正一他　『新編　一宮市史資料編二』　昭和42年。

(18) 橋本澄夫「金沢市下安原海岸遺跡の第１次調査」石川考古学研究会々誌第18号　昭和50年。

(19) 富山県教育委員会『小杉町中山南遺跡調査報告書』　昭和46年。

(20) 杉原荘介・大塚初重『土師式土器集成』本編１　昭和46年。

(21) 注(18)に同じ。下安原海岸遺跡では弥生式土器（中期）も出土しており、弥生期に伴ったものと想定されている。

(22) 報告書は未刊行であるが、近刊予定である。当遺跡では確実に月影期に属するものといわれる。
（四柳嘉章氏教示）

(23) 注(1)に同じ。

(24) 金沢大学考古学研究会『旭台遺跡』　昭和51年。

(25) 吉岡康暢　註(14)に同じ。

(26) 杉原荘介・大塚初重『土師式土器集成本編１』　昭和47年。

(27) 橋本澄夫　註(18)に同じ。

(28) 吉岡康暢　『金沢市塚崎遺調査概報』石川県教委　昭和47年。

(29) 富山県教委『小杉町中山南遺跡調査報告書』　昭和46年。

(30) 註(26)に同じ。

(31) 註(14)に同じ。なお、金沢市高畠遺跡出土土器をもって第Ⅲ様式とした方がより妥当という提案がある（橋本澄夫　昭和50年）

(32) 註(14)に同じ。

(33) 吉岡康暢・橋本澄夫　「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器」　石川考古学研究会々誌第９号　昭昭和40年。

(34) 坪井清足　『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』昭和31年。

(35) 原口正三『船橋Ⅰ・Ⅱ』平安学園考古学クラブ　昭和50年。

(36) 註(34)に同じ。

(37) 鳥取県教委『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　昭和52年。

(38) 上野純司「南関東における古式土師式土器編年試論」『史館第９号』　昭和51年。

(39) 小嶋芳孝「金沢市末町付近の窯跡群とその歴史的性格」　石川考古学研究会々誌第18号　昭和50年。

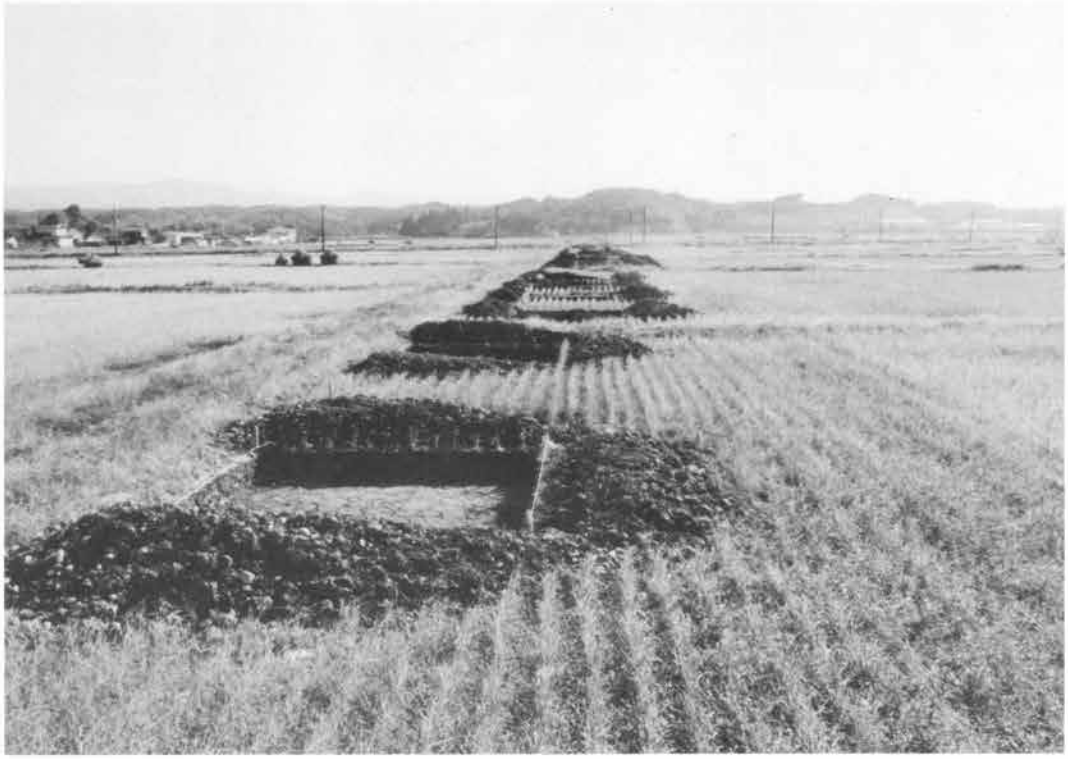
(40) 吉岡康暢「洲衛古窯址群」石川考古学研究会々誌第10号　昭和41年。

(41) 志道和直「草戸千軒遺跡出土の土師質土器編年試案」『草戸千軒No.84』　昭和52年。

※　なお、東側調査区（月影期包含層中）より土製模造品(鏡？)・Ｓ字スタンプ文が出土している（図版30)。いずれも伴出関係遺物については明確でないが、東調査区での古墳時代出土土品は月影期に集約されるので、該期の所産と考えておきたい。

高座遺跡より能美丘陵を望む

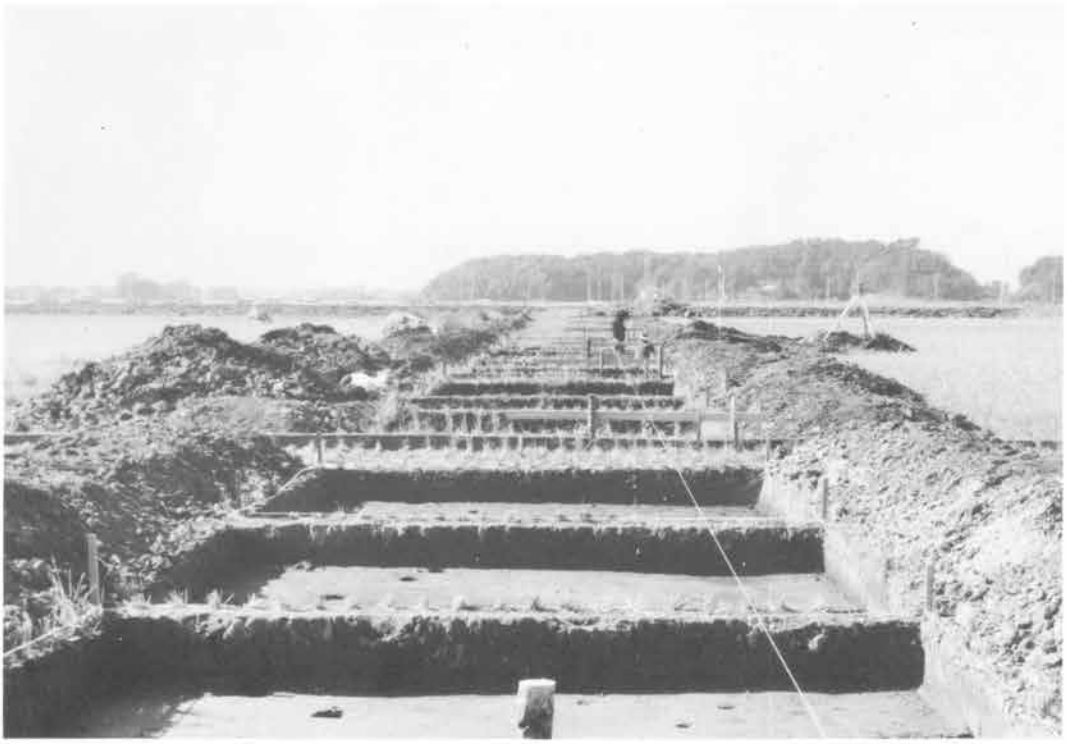
南方より遺跡を望む（前方の独立丘は西山）



東調査区（北より）

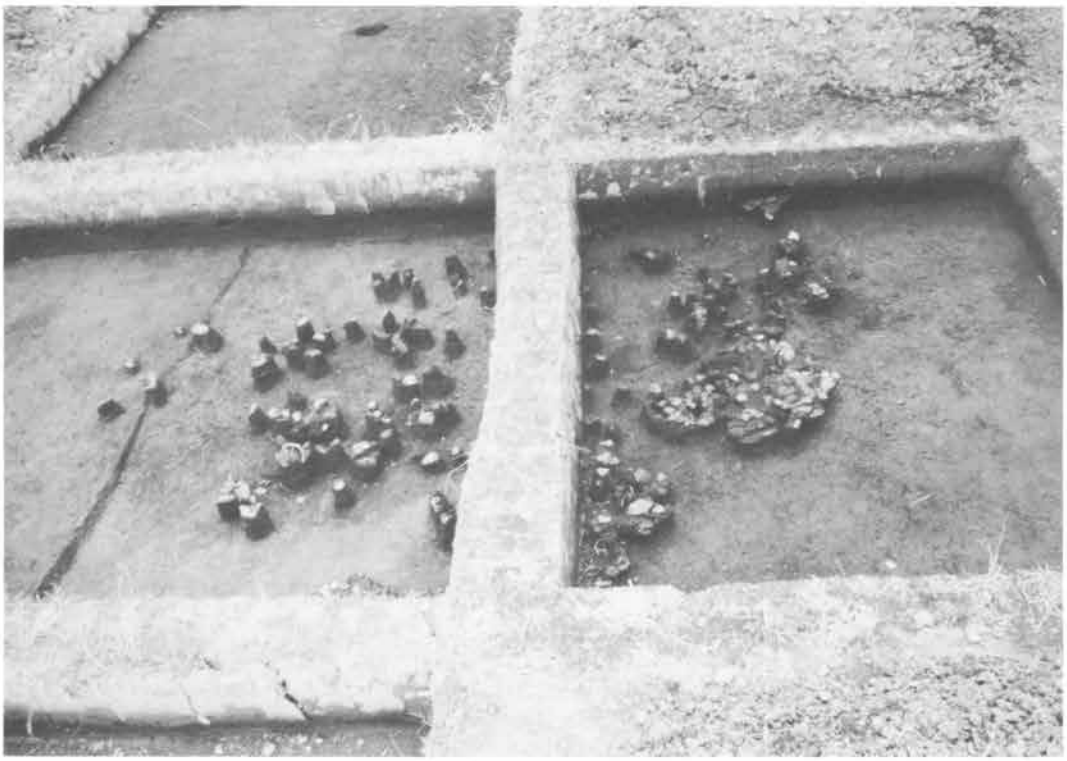
南調査区発掘風景（西より）

東調査区発掘風景（北より）



南調査区（前方の独立丘は和田山）

東調査区（南より）



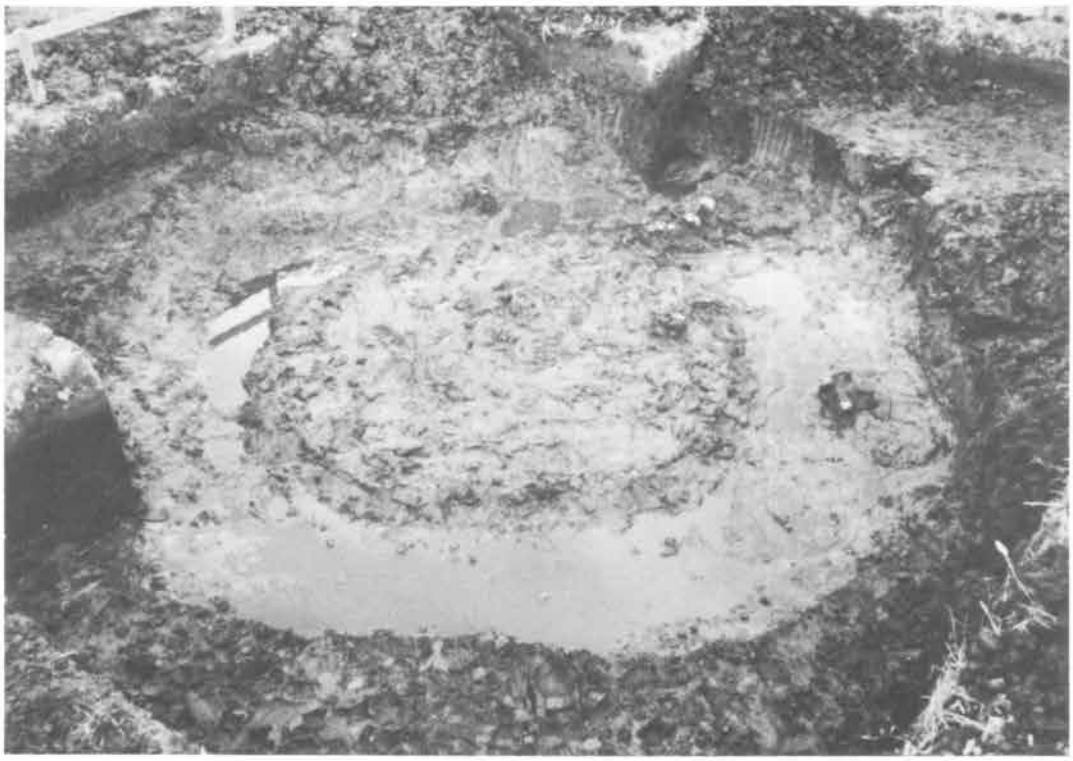
南調査区土器溜り（西より）

南調査区住居址状落込み（南方より）

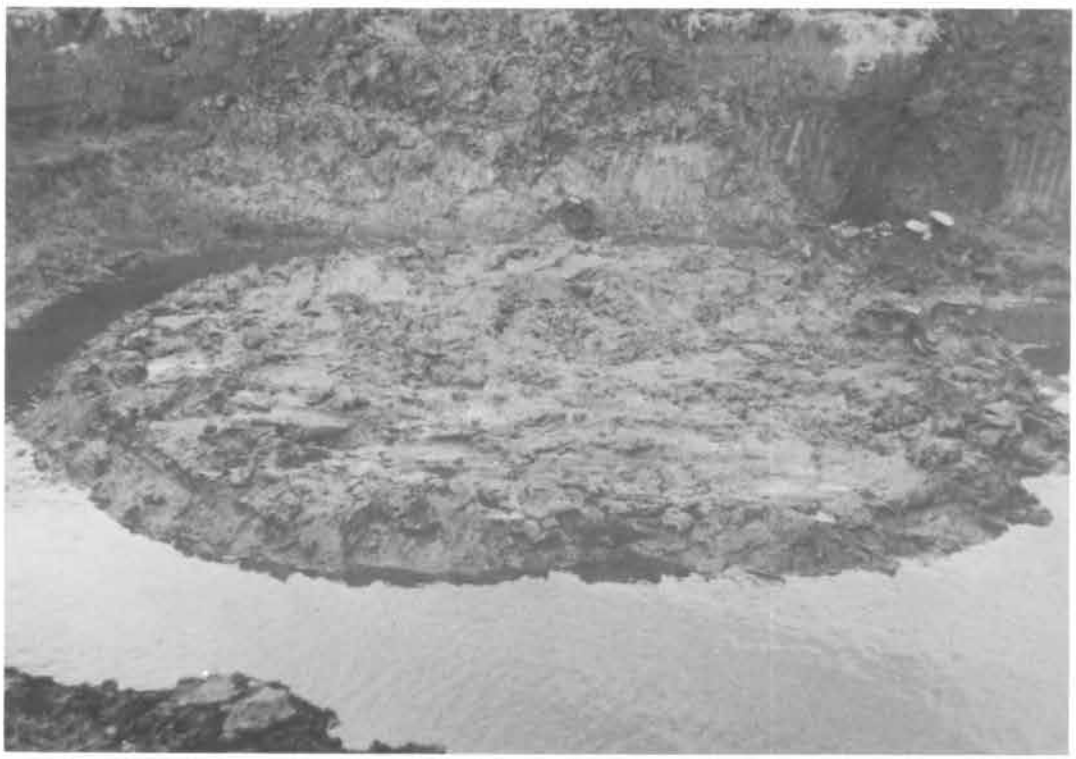
同上遺物の出土状態

住居址状落込み（南より）

同上内部



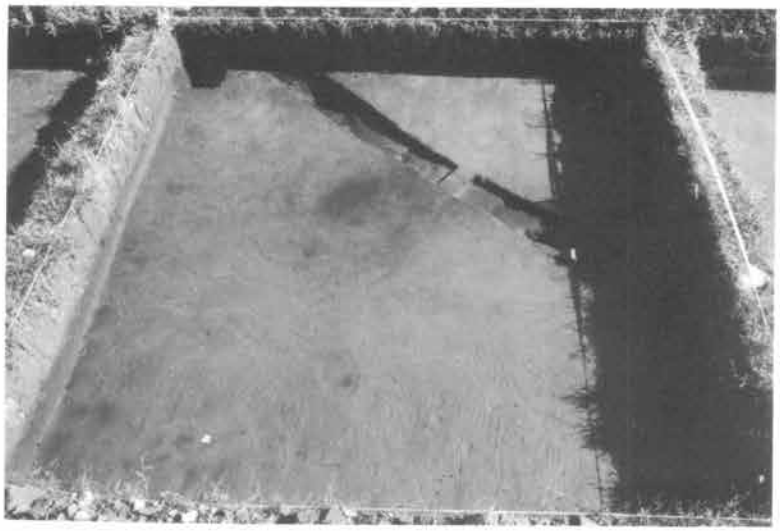
方形周溝遺構（南より）



同　　上

東区遺物出土状態

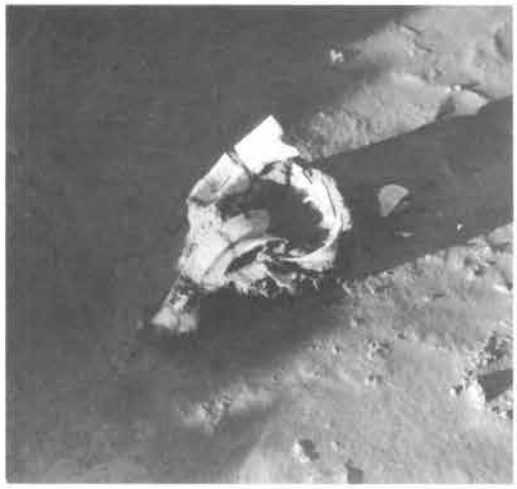
東 区 同 上



古墳時代前期溝跡

周辺の遺物出土状態

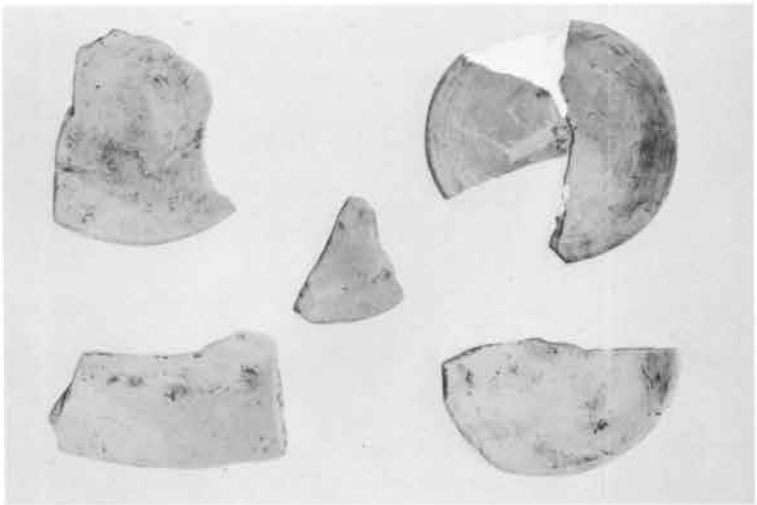
同上



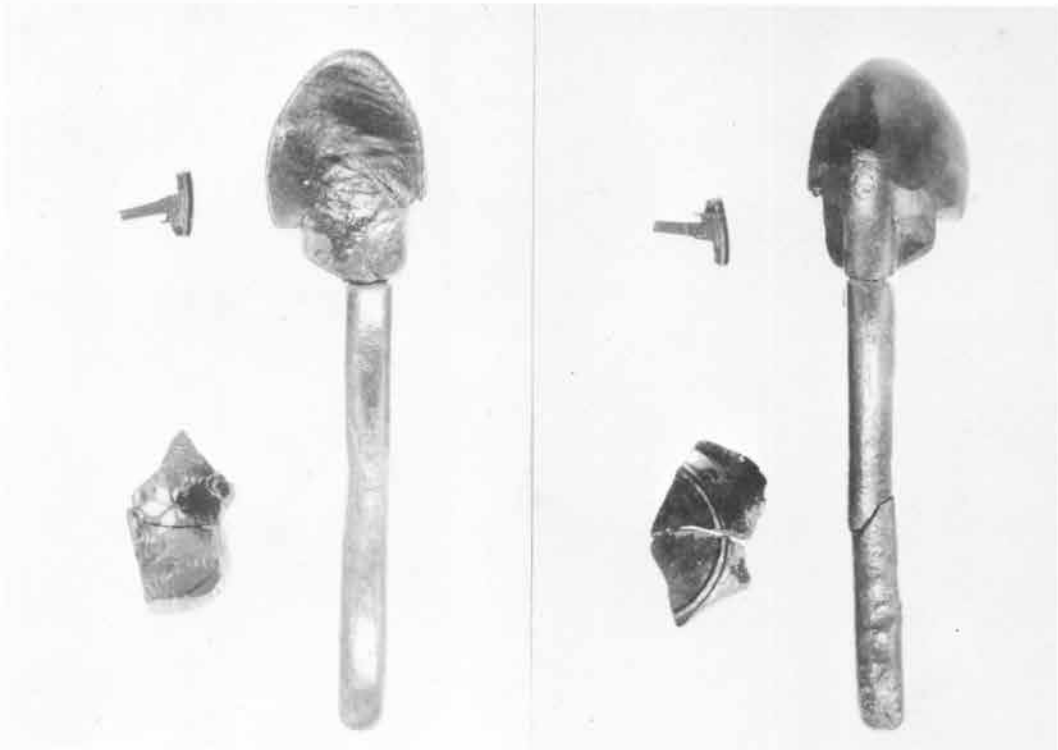
東調査区遺物出土状態

井戸跡（東より）

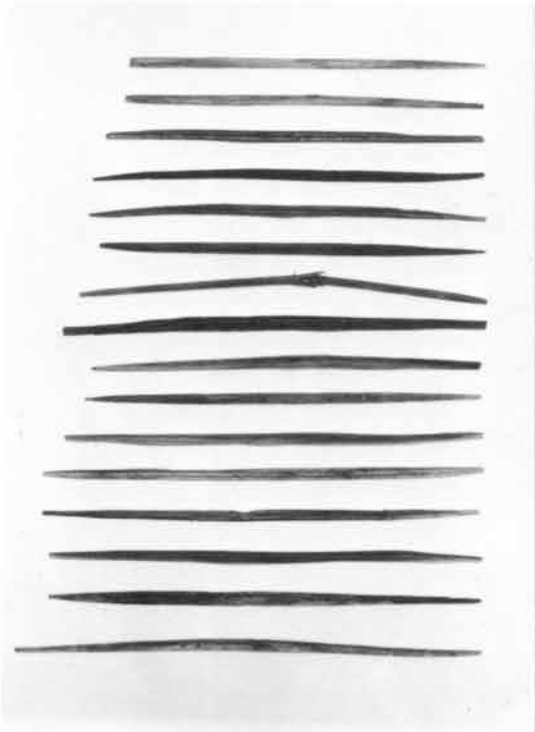
同内部



出土土器（土師質）



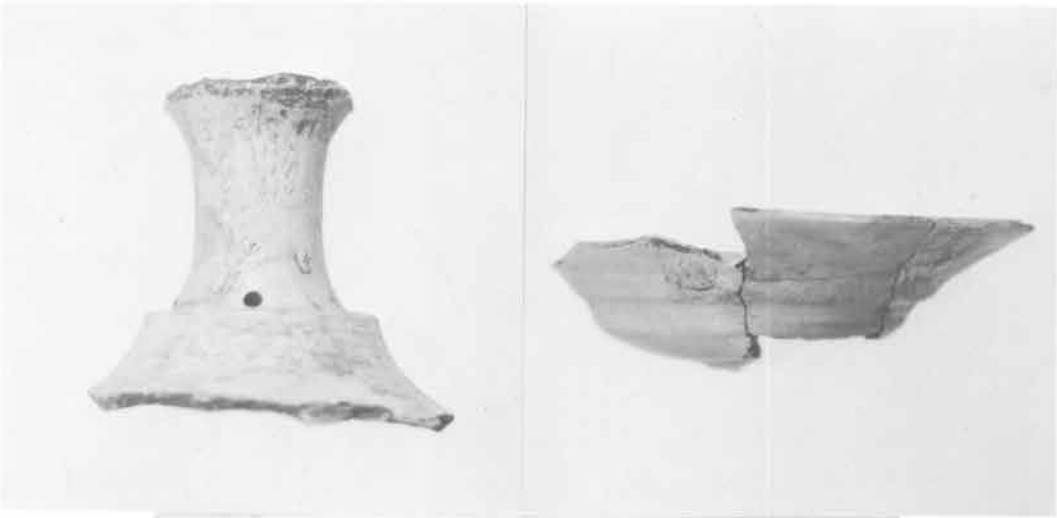
井戸跡内出土遺物（表・裏）

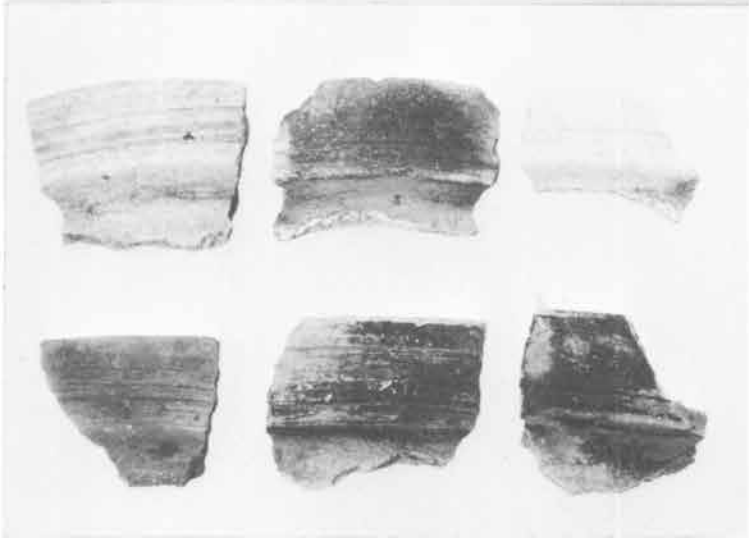


同上箸状木器

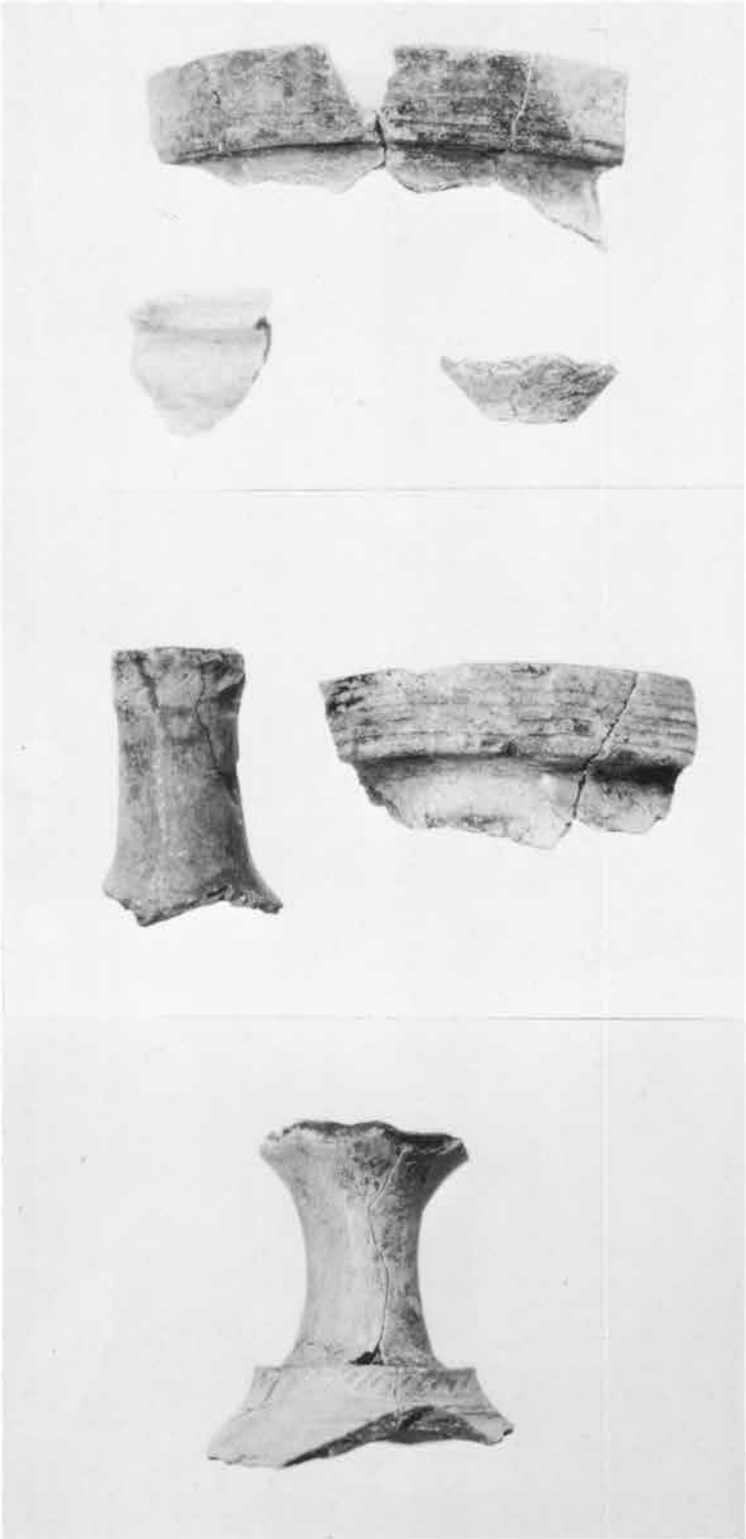
同上自然遺物

東調査区出土土器



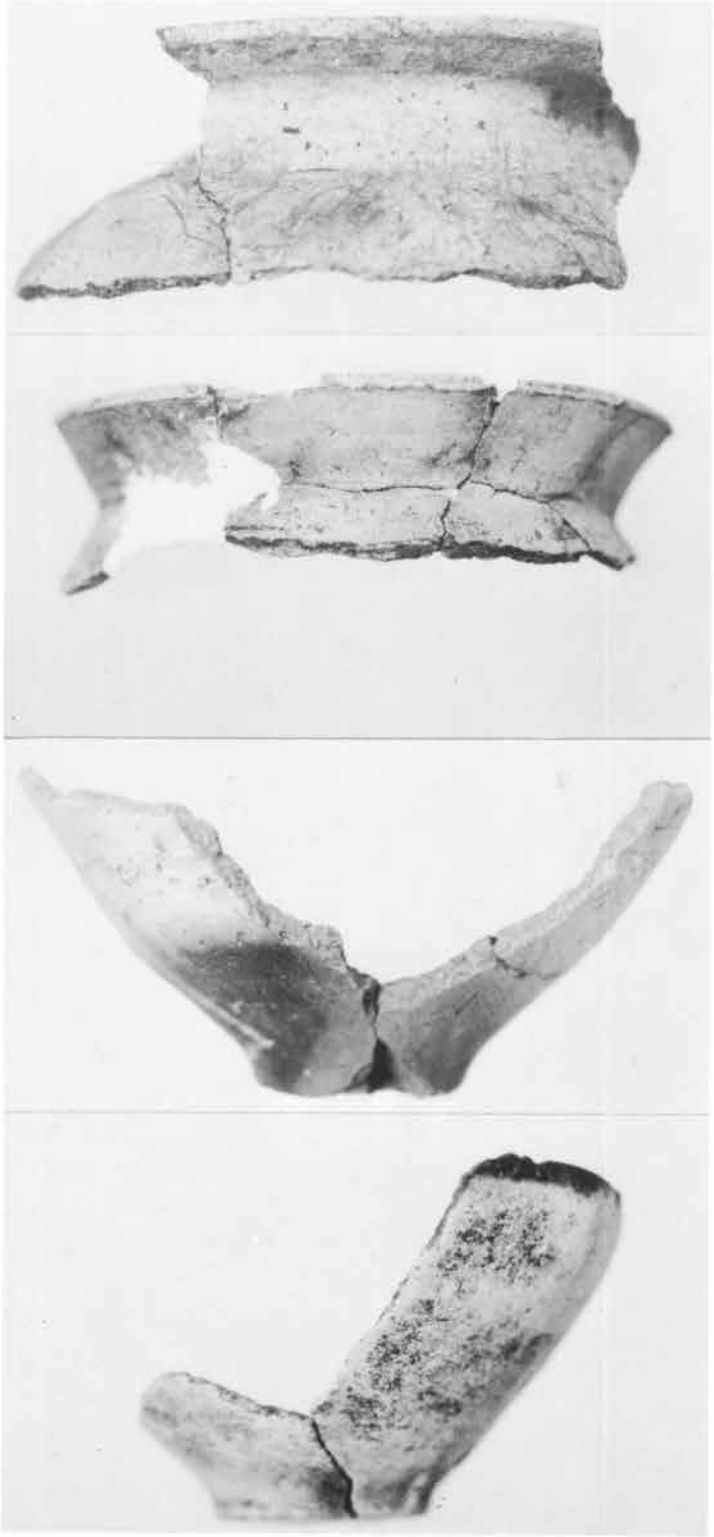


東調査区出土土器

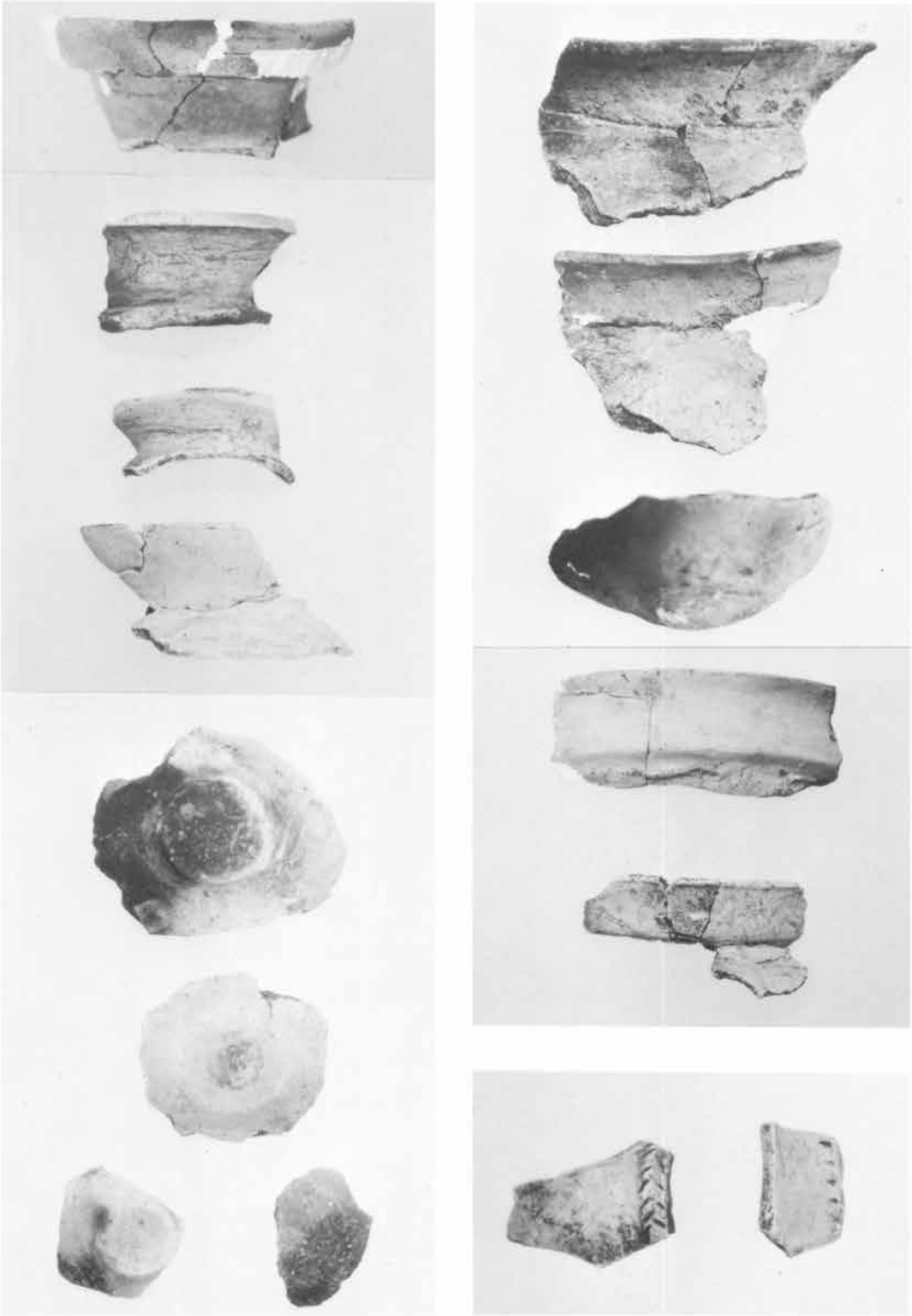


東調査区出土土器

東調査区出土土器



南調査区出土土器

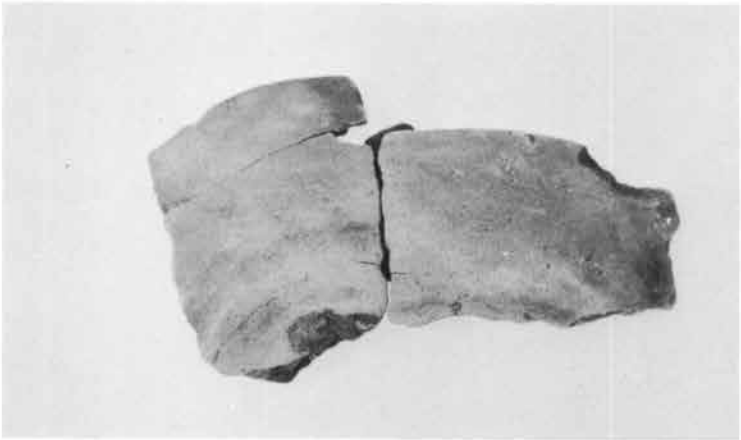


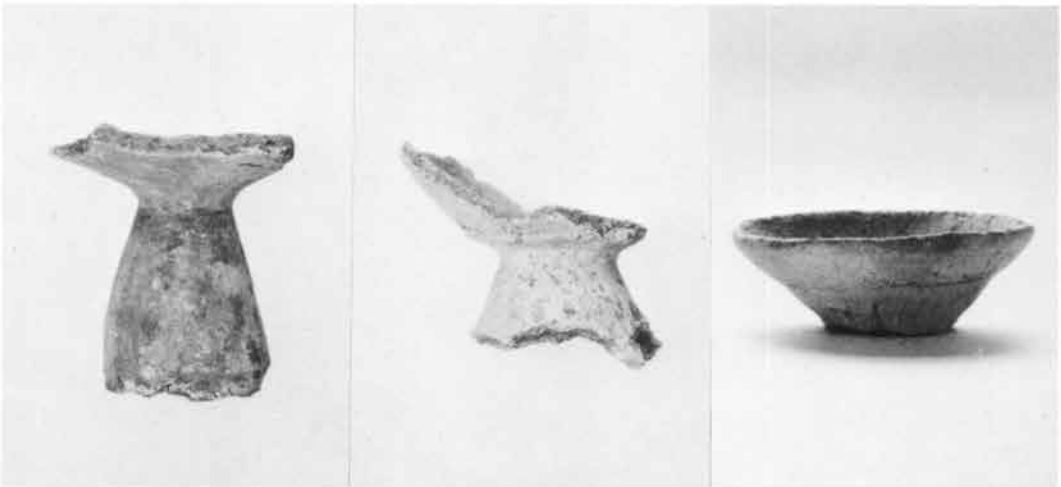
南調査区出土土器

南調査区方形周溝遺構（下部）出土土器

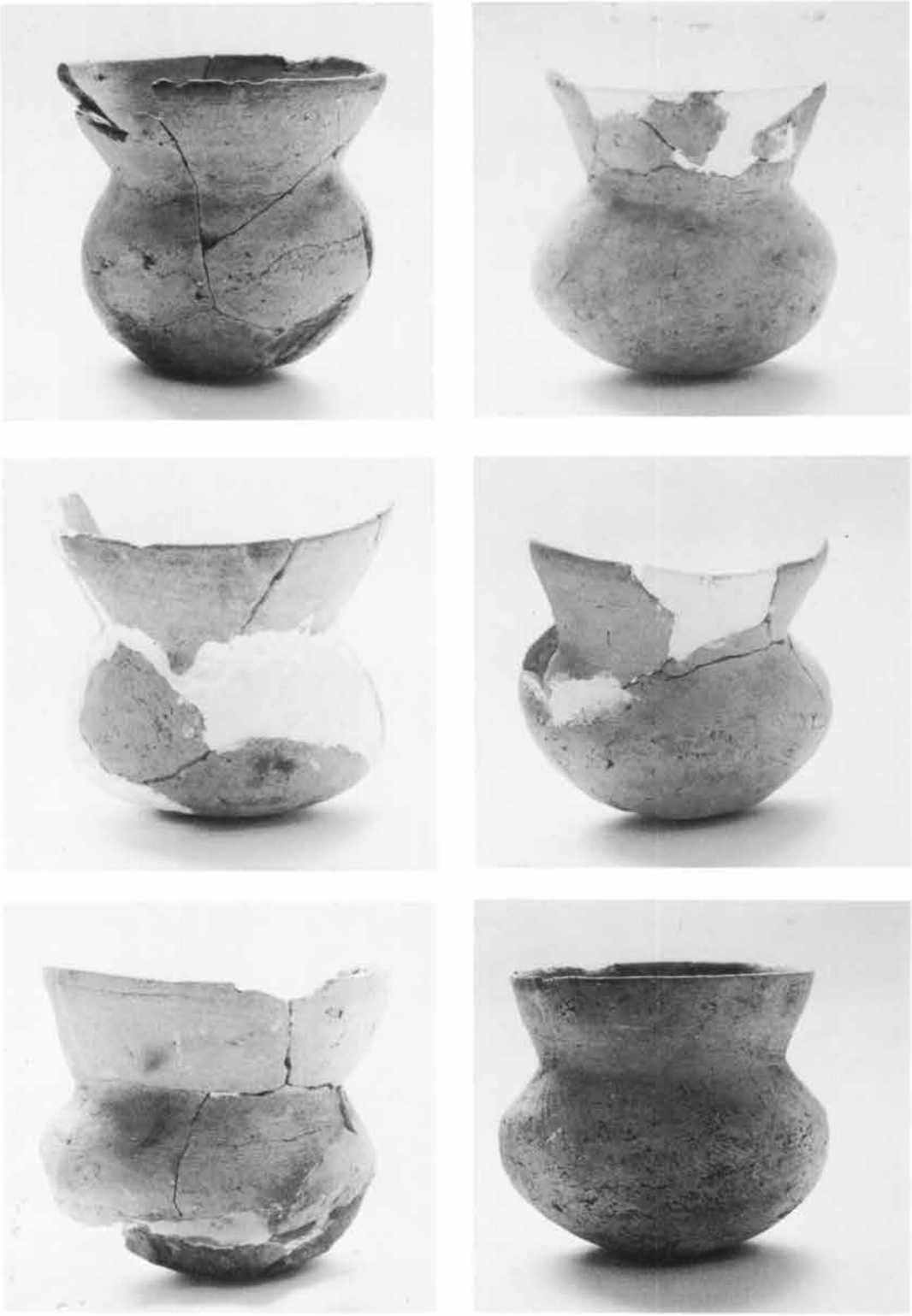
南調査区住居址状落込み内出土土器（一括）

南調査区住居址状落込み内出土（一括）





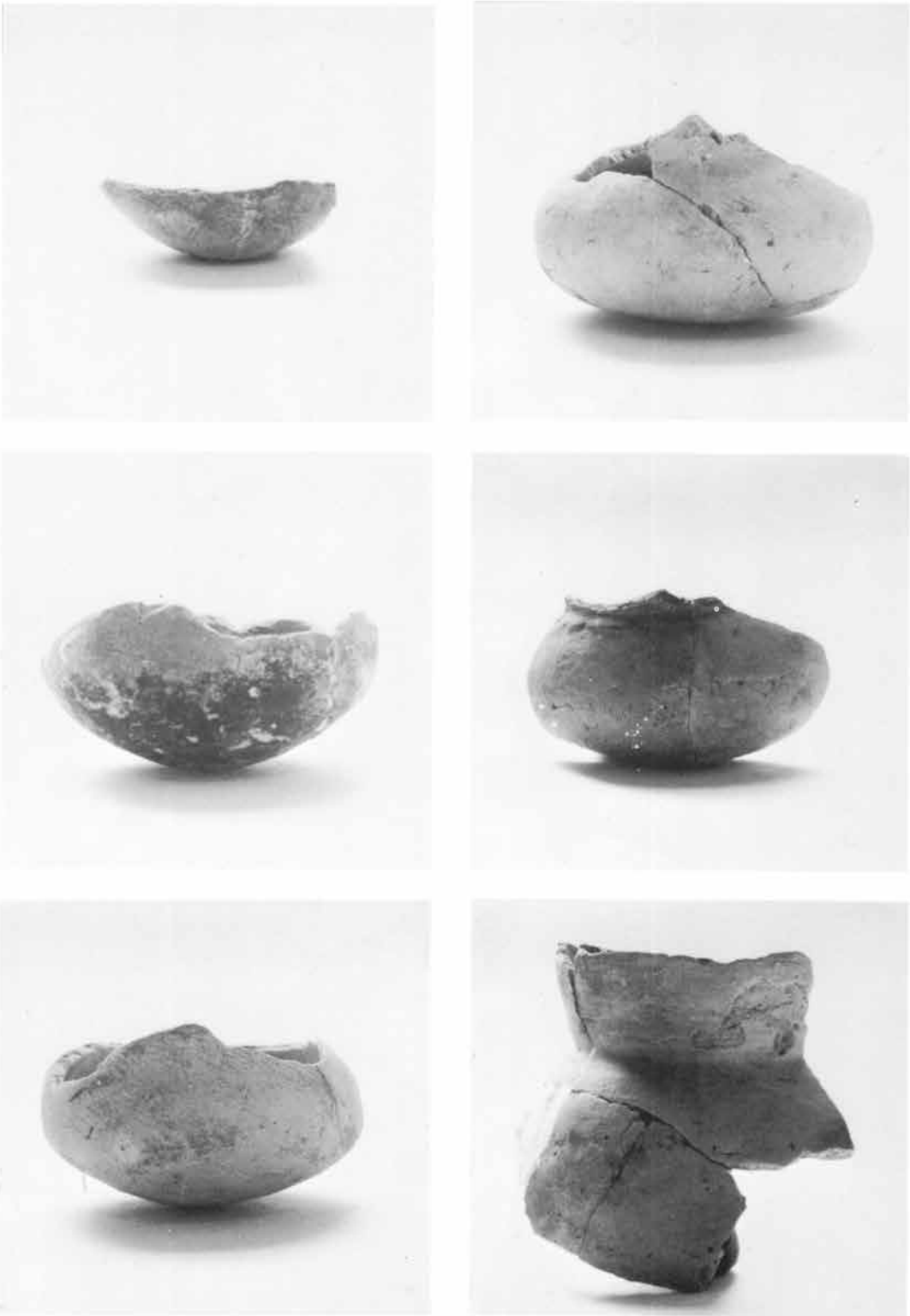
南調査区住居址状落込み内出土（一括）



南調査区住居址状落込み内出土（一括）

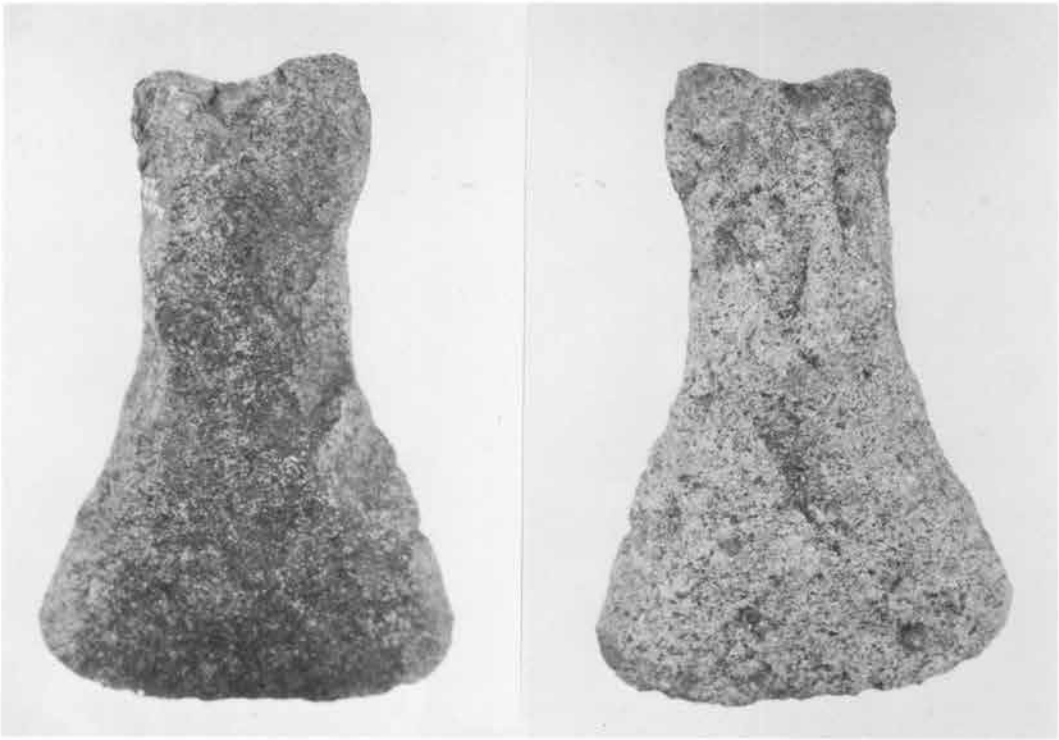
南調査区住居址状落込み内出土（一括）

南調査区住居址状落込内（一括）

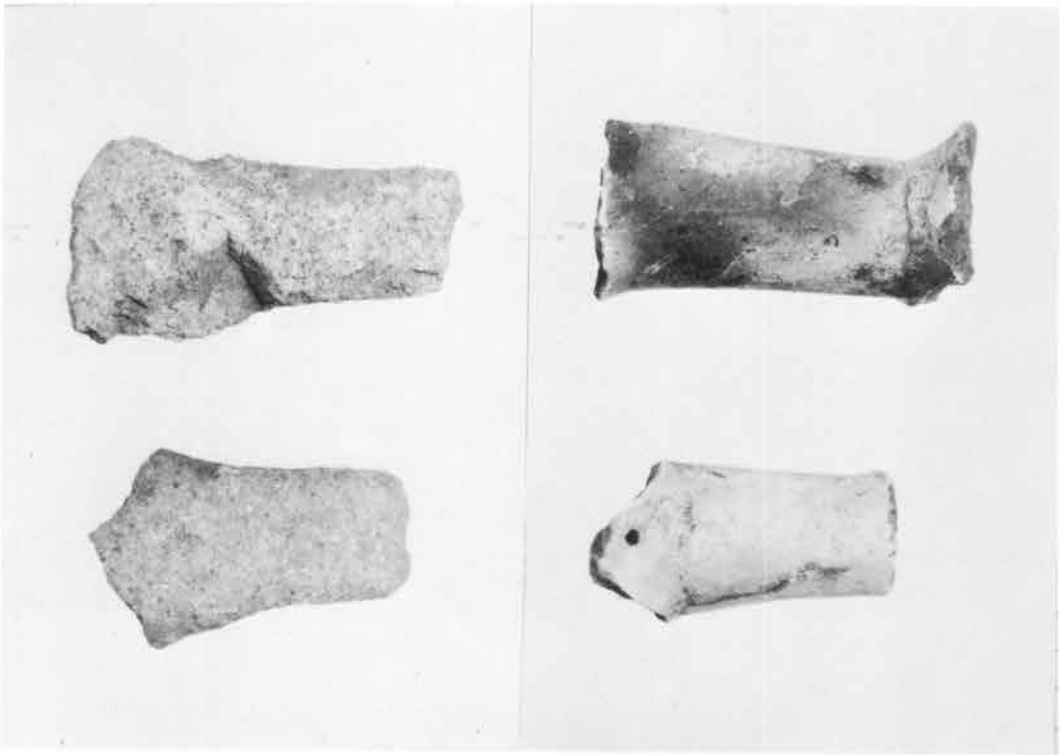


南調査区住居址状落込内出土（一括）

南調査区住居址状落込内出土（一括）

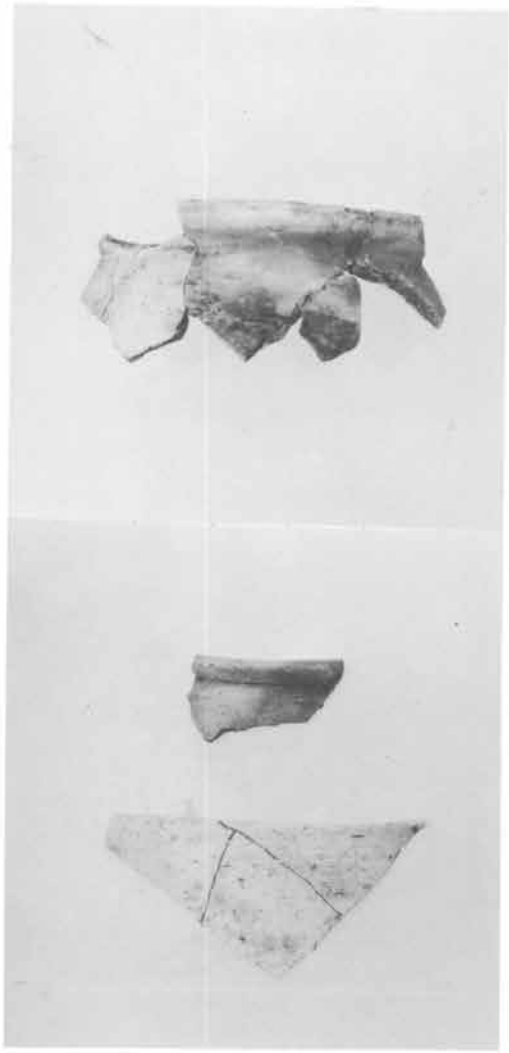


東調査区出土石器



東調査区出土（石器・高坏脚）

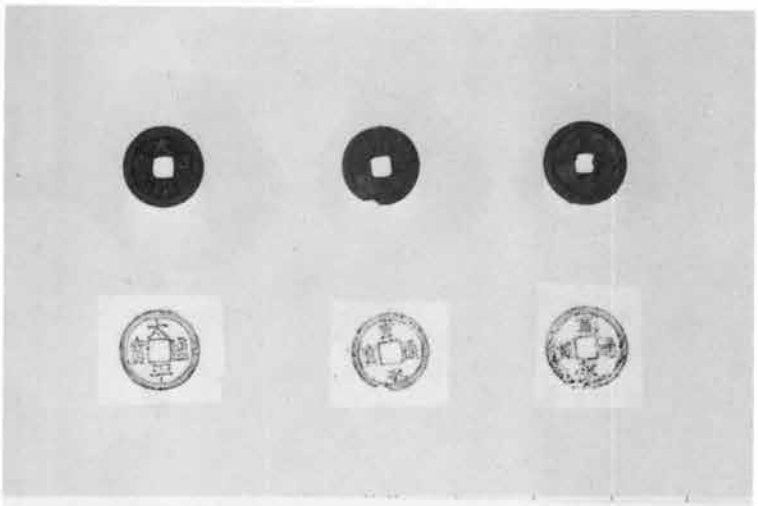
（古墳時代土師器）



（平安時代土師器甕）

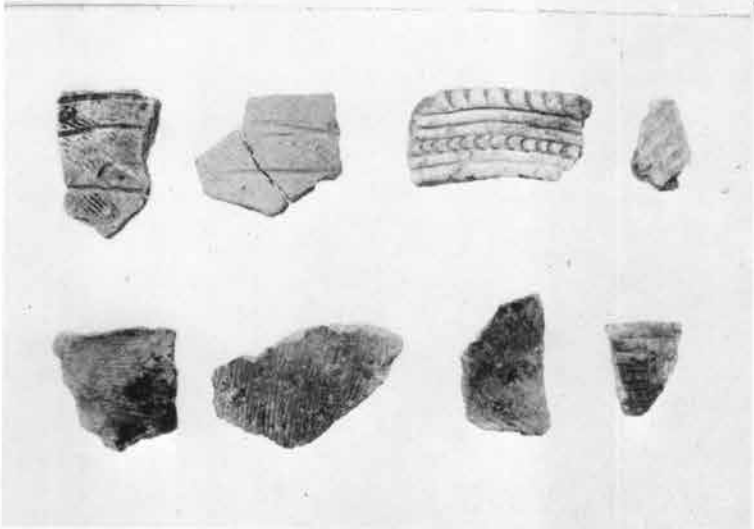
東調査区出土遺物　　（江戸時代？仏頭）

古　銭



土製模造品（鏡？）・スタンプ文土器

縄文式土器



各調査区出土遺物